
水晶の街

iuと猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水晶の街

【Nコード】

N8861M

【作者名】

i uと猫

【あらすじ】

ヤクザ生活に嫌気がさし、どうやら組事務所を飛び出したらしい主人公、赤毛のケンイチ。逃亡中の彼は怪我の治療がきっかけとなり、立ち寄った水晶の塔・美術館に居着くことになる。但し美術館には、高額である筈のフェルメールの絵画【恋文】のオリジナルが所蔵されており？そこで不思議かつコミカル、ヒューマンな日々を過ごしたケンイチが、遂に奇蹟の体験をする…という約一ヶ月の物語。

主人公の逃避行の先は、幻想的な桃源郷であった というモチー

フで、誰も描かなかった衝撃の世界を、怒涛のラスト・ネオスクリ
プト編で描きます。

何度目かの激痛で、ケンイチの視界がかすむ。左腕のキズの痛みはもう半端ではない。ガス欠間際でもあり、もう運転は無理だと感じて、ケンイチはブレーキを踏んだ。

山道を外れた土手際に、車体を突っ込ませる様にして停車する。彼は舌打ちをして車から降り立った。

そこは山道がやや開けた場所で、左側に何か施設の入り口らしい門構えがあり、右側には山道から外れて細い林道が稜線を下っているようで、木立の隙間から下方に、こじんまりした街並が見える。距離はまだ少しありそうだ。

ケンイチは、施設の入り口に近づいて、ゲート越しに施設の敷地を覗き込んだ。

山道を、車で普通に通過していたら見落としていただろうその場所は。杉並木に隠された先で、驚く程広々としている、鮮やかな芝が全体を覆い、柔らかな丘陵の敷地の真ん中に建物がある…

そのシルエットは教会のように、幾何学的で尖がっていて、全体がキラキラと輝いているが？

「お前、ケガしてるのか？」

ふいに声がしたので、ケンイチはあたりに目をやる。敷地内の、すぐそばにある杉の木の根元に腰かけていた老人が、こちらに歩み寄ってくるどころだった。

「…ココはなんだ？もしかしたら病院かよ？」

「ここは美術館ぢゃ、水晶の塔・美術館」

老人は大声でそう言って笑い、鉄ゲートをヨイシヨと開く、ゲートは見た目よりも軽々と開かれた。

「この辺に…病院はねえのかな？」

老人は、血がしたたり落ちているケンイチの左腕を見て驚き（しまった、変なのに関わった）顔だったが、傷の具合を心配したのか、敢えて笑みを消さない様子で。

「お前さんの後ろの林をまっすぐ降りれば、町医者もおるけれど30分はかかるぞい？ケガの手当てくらいなら、美術館でやってもらえば、ええ」

老人が入って来いとゼスチャーする。周期的にやってくる痛みと老人の言葉に、ケンイチは顔をしかめていた。

「ここは、病院じゃねーんだらう？」

「病院じゃない。ぢゃが、ケガの具合位は診てもらえ、ってことぢゃ」

老人はさあさあと、どこか楽しげである。

仕方がないといった風にケンイチは歩み始める事にして、老人に一瞥の視線を投げ残す。

「管理人って、アンタじゃないのか？」

「わしは、3号爺ぢや」

「3号じじい？」

既に老人はゲートを閉めにかかっている。「変なじいさん」と声に出してから、でも憎めないタイプと小声で継いで、ケンイチは丘の小径を昇っていった。

小径はアスファルトで舗装されているが、道幅のない一車線というやつだ。手入れされた芝はあたり一面に藍々とした香りを放って心地良かった。が建物の威容は、近づくにつれのケンイチに、異様な印象を与えていた。教会のように見えたそのシルエットは、無機質の巨大なオブジェのようで、総ガラス張り？ひっそりと山中にある美術館にしては、場にそぐわない近代的さだ、そう感じながら300m程歩いて。

入り口にたどり着いて、暫く呆然としているケンイチだった。それに気付いたらしい、館内に人影が動いてすぐにガラス扉が押し開かれ「どうぞ」

現れたのが大男だったので、ケンイチは一瞬ギョツとした。

ケンイチ自身も身長が180センチあるが、目の前の男は縦も横も、さらにふた回り大きい。顔つきはしっかりした骨格で、薄いがしっかりとした眉、細いきりりとした瞳に、固く結んだ口元、短く刈り込んだ頭髪はどう見てもプロレスラー風で（2メートル、150キロ…要するに想定外のゴリラ男で）これも、建物の外観同様ミスマ

ツチだ。

「水晶の塔・美術館へようこそ。私は管理人です」

管理人の野太い声、けれども語調は穏やかで丁寧だった。

「ここは…美術館、なのか？」

ケンイチは、招き入れられて「へえ」と声をもらしていた。

確かに美術館である。ロビーは意外に広々としていて、外から想像したよりも明るく開放的だ。装飾の無い造りは清潔感があり、壁際に立てられた各パネルボードの白さがきわだっている。

ピカピカに磨かれた床は白系のリノリウム、右手側に見える階段の、クロム色とのコントラストはモダンかもしれない。

左手の奥ばった処に、事務処理のスペースがあり、そこある小さな机は受けを兼ねているようだ。しかしその感じは、可愛い受付嬢がいるべきで（それに普通の机じゃ、この大男には窮屈じゃね？）とは、ケンイチの内心だ。

「怪我をされていますね？」

「ちと、訳ありです」

ケンイチはバツが悪そうに笑った。

「手当て出来ねえかな？とりあえずでいいんだけどさ、止血とか…」

「医者を呼ぶ事も出来ず」

管理人が無造作に腕をつかんだので、ケンイチが痛みに悲鳴をあげた。

「バカ野郎、離せ！」

語尾は怒声である。管理人をつき飛ばしたケンイチだったが、後ろによるめいたのもケンイチだった。

「刃物で斬られましたね？少しひどい」

管理人は顔色一つ変えない。彼は笑顔のまま、どうぞといった具合に通路を差して歩み始めており、毒づくケンイチだったがここは従うしかない…

正面入口からロビーをまっすぐ進むと、管理人室とパネルが懸けられた扉があり更に通路。そのつきあたりが、こじんまりした控え室だった。

上がり框かまちで4畳半くらいの畳敷きの部屋。古いブラウン管式テレビと、小さな茶ぶ台、簡単な茶器。昔見た事がある、学校の用務員室を思わせるノスタルジックなこの小部屋は、美しい美術館の造りとこれ又ミスマッチで、むしろこの男らしいと感じたケンイチだった。管理人はロッカー横の扉を開け、更に奥へと進んでいく。

ケンイチが案内されたのは、地階だった。

短い階段を下りると、今度は広い通路に出る。その通路も正面に向かってまっすぐ伸びて、左右に扉や通路があるのだが、地階の空気

は1Fのロビーと同じ風で、ここがオマケの階でない事は、すぐに感じ取れた。

こんな地方の山中に、ずいぶん立派な設備だなと感心しながら管理人について行くケンイチだったが、ふと転じた視線の先に、広い大部屋が目に入って「？」

立ち止まって覗きこんでみると、100畳位の畳敷きの広間がある。4方の壁が鏡でかこまれて、中央にサンドバッグが吊るされている。…道場だろうか？

（この大男、何かやってるな）と、ケンイチが苦笑いしたタイミン
グで、「こちらです」

管理人の手招きに導かれ 促されるまま部屋に入るなり、又軽い驚きの声をもらしたケンイチだった。そこは上品なクリーム色で統一された、まるでホテルの一室のようだ。上等のシングルベットが壁際にあり、シンプルなテーブルに戸棚、シツクな調度品のしつらえである。

「…ここって、何だよ？」

首を回して部屋を眺めながら、ケンイチは戸惑いを隠せない。ベツトに腰をおろす動作もぎこちなくなつた。管理人は、戸棚から救急箱を取り出し、落ち着かない風のケンイチを気にもとめない。彼はシャツを脱ぐようにゼスチャーして、ガーゼと消毒の準備を始めていた。

痛いやら、優しくやれやら、静かにして下さいやらで一悶着あったのだが、ようやく包帯を巻き終わる頃には、治療をしてもらったのケンイチは、神妙な顔になっていた。

「悪いな」と小声のケンイチ。管理人は気にしないで、という笑顔で「ここはゲストの部屋ですから、安心して下さい」と言いながら、いくつかの錠剤と、コップに用意した冷水をケンイチに差し出した。

「熱もあるようです。これは鎮痛剤と、下熱剤です。医者はすぐに手配しましょう」

ケンイチは錠剤を口に放り込み「そいつはありがたいんだけど」で、水を一気に飲みして「オレってゲストなんだ、ゲストって何だ」と、首をすくめた。

「それでは」と出て行くこうとする管理人を、ケンイチは呼び止める。

「違う広間に、道場を見たゾ。あんた何かやってんのか、柔道…空手か？」

管理人は薄く笑う。

「空手をやります。少しいける口です」

それにアハハと、愛想笑いになるケンイチに「もう横になって下さい」と管理人。彼は、部屋の照明を落として、静かに出て行った。

(あの体格でいける口とは、恐れ入った)

まあ、どうでもいいやとゴロリと横になるケンイチだった。天井

を見上げていると、まどろみがあつという間にやって来る、考えてみれば、くたくたになる一日だった。

ヤクザの事務所から持ち出した大金が、市街外れの私鉄駅のロッカーに眠っている。腕さえ刺されなければ、そのまま鉄道路線で行方をくらませる事も出来たのだが、日頃から気に食わなかった兄貴分の柔らかい腹に、とっておきの蹴りをお見舞いしてやったので……まあ、そこはあいこだろう。

子供の頃の夢を見たような気がした。夕暮れの川原で、友達とチヤンバラをやっている幼い自分。友達も川面も街並みも皆、茜色あかねいろに染まっていた。

人の会話が耳に入ってくる。腕の怪我について話をしているようで、薄く目を開くとぼんやりとした視界の中で、医者が腕の手当てをしてくれている。自分は病院に運ばれたのだろうか、ここはどこだろう？ ケンイチは、浅い眠りの中でいくつかの事をおぼろげに感じながら、又深く眠った。

クリーム色の天井だ…おっと！と。

はつきりと目が覚めた。ケンイチは体を起こして、辺りに目をやってみる。そこはゲストの部屋といったあの部屋だった。

激しい空腹を感じたのは、テーブルの上に準備されたクロワッサンと、まだ暖かいコーンスープが目に入ったからだ。がつつくように食事を済ませ、どれ位寝込んでいたのだろうかと考えながら、ケンイチは部屋を出る。あの大男、管理人はどこだろうか？

階段を上がり、控え室からロビーへ。

早朝らしく、柔らかな朝日が差し込むロビーは凜とした空気が満ちていた。空間の底に冷たい塊の滞留感があり、もちろん足を踏み入れまといつくその空気は、サラリとして気持ちがいい。

ケンイチはガラスの壁の向こうに、管理人の姿をみとめた。屋外の広い芝の中に、男が立っている…ロビーを横切り、入り口の押し扉から屋外に出ると、外の空気は驚く程冷たく澄み切っていた。そこは芝生の緑と朝露の水煙が溶け合って、どこか別世界のようなようだ。

管理人はその中にいた。

彼は、ワイシャツを脱いだ上半身肌着姿で筋肉隆々というか、いかめしいロボットののような骨格をしている。ゆらゆらと体をゆらす姿は太極拳か何かだろうか？空手をやると言ったなと思いつきながら、ケンイチは「よお」

挨拶を口にして、歩み寄っていくケンイチに、管理人は動きひとつ止めず、眉一つ動かさず「おはようございます」だった。

「3日間、昏睡状態でした。怪我の具合はいかがですか？」

ケンイチはその言葉で初めて腕の傷を思い出す。そこを触れてしまつて。気持ち痛みをあげそうになって、アレ？それ程ひどい痛みは、既がない。

「いいお医者様です。15針縫われていますが、あの先生にかかればすぐによくなります」

キュバツと音がする。管理人の空を切り裂く正拳は、ケンイチにはまったく見えなかった。

「街の先生です。高名なお医者様ですが、水晶の街で開業医をされています」

「水晶の街？」

管理人はゆっくりとした動作の中で、ケンイチを見つめている。彼はまた何か動作したが、今度は音さえせず、ケンイチには何をしたのかも分らなかった。

「水晶の街は、この丘の少し下を開けた処です。美術館を挟んでなら、市と反対側の地区になりますね。静かな住宅街です」

「はあ…管理人さんよ？」

ケンイチは露骨に面白くなさそうな顔をして見せた。

「お待ち下さい」

管理人は一度大きく息を吸って、ゆっくりと吐息する。目を閉じ、そしてにっこり。

これがケンイチにとって初めての、いわゆる管理人スマイルというやつだった。糸目となり目尻を垂らし、無防備なお人好しを満面に浮かべる、屈託のない笑顔である。

「終わりです、お話を伺いましょう。けれどもその前に」

彼は、汗をタオルで拭いながら尋ねる。

「お名前を聞いていませんでした、貴方は？」

「…オレはケンイチ。赤毛のケンイチだ、そう呼ばれてる」

不敵な笑みを浮かべるケンイチは「オレは、あんたが言う、その反対側の市街から来たヤクザだ」と、既に早くも挑みかかる雰囲気醸す。内心、自分でも悪いと感じながら、しかしこれが自分のスタイルだと、納得もあるケンイチだ。

「チンピラだけど、空手なんぞ屁とも思わねータイプのチンピラだよ？」

ずいと、ケンイチは一步を踏み出していた。

「色々有り難いんだけど、ここ美術館だろう？ちょっと変じゃねえ

のか？ケガの手当てとか、あのホテルみたいな部屋」で、にやりと笑うケンイチ。

「それに、あんたは妙に親切だし」

次のタイミングで、「気にいらねえ」というセリフと共に、ケンイチの自称アナコンダ・パンチ、予測のつき難い呼吸から放たれ、変則軌道を描く奇襲攻撃が、管理人の横顔に炸裂する筈だった。

だがケンイチが振るおうとした拳の、起点の位置に既に管理人の制止の手の平があつて、その奇妙なバランスの為に、ケンイチはピクリとも動けなくなっていた。

目をむくケンイチ。管理人は、やはり管理人スマイルに変更なしで「ケンカがお強いようですね。けれども、鍛錬を怠らない武道家には通用しないものです。ケンイチさんでしたかね？」

ならばというケンイチの次の行動も、フイツと歩み始めた管理人のタイミングの為に完全に封じられ、逸せられ固まったままにされる。

どこ吹く風で歩いていく管理人との距離が広がって、大きく安堵の息をついたのはケンイチの方だった。

ケンイチは今まで、一度もケンカに負けた事がない（だからヤクザになった。ただしチンピラだが）武術、武道などやった事もないが、その手の連中とやりあつても負けたためしがない。

玄人から言わせると（どんな玄人だ）天性のセンスと、反射神経でプロを超えるとまで賞されてきた腕前のつもりだったが、彼は今その天狗の鼻が、ポキリと折られた気分だった。

ケンイチの行動に関していえば、今の態度を含め悪気はない、いつもこうだ。強い人間には常に挑んでいきたい性分で、他者には随分迷惑な、それが彼の行動原理だ。

(なんでかな、オレは)との、管理人を追いかけながらのケンイチの悪態は、だから案外真面目なものだった。

「なあ？分ったよ。悪かった、謝るよ、冗談でした、ゴメンなさい」
管理人の横顔に追いついてみると、大男はケンイチに見向きもせず歩んでいるのだが、面白そうに笑ってもいて。なのでホツとするケンイチだ。

「オレさ。ちょっと訳ありでさ。だからさ。ちょっとさ…かくまってもえねーかな？」

何だか子供のお願いみたいだな、と自分で感じて(照れるぜ)などと焦ったものだから、ふいに管理人が立ち止まった拍子に、ケンイチはひっくり返りそうになる。

「かくまうも何も」と、管理人は不思議そうな顔をしていて、ケンイチは半分泣き顔になっていて。

怪訝顔で対面する空気に一呼吸の間まがあり、弱った顔のケンイチを弱った風に笑う管理人だった。

「貴方は大怪我をしていた、ですから私は貴方の治療をする為に、ゲストとして此処に滞在していただきました。という事は貴方はゲストです、お好きなようにして下さい。かくれんぼもいいでしょう、

遊んでいかれても結構です。どうぞご自由に?」

「は?」

管理人はコロコロと笑っている。

「ゲストはいかなる理由があろうとも、ゲストです。それが「訳あり」でも私には関係がありません。行動はご自由にゲストが決めて下さい。浴室、シャワー、ゲストの部屋の設備はご自由にお使い下さい。簡単な着替えは用意できますが、また後にもで街に買物に行って準備して下さい。食事の用意も出来ません。食事は3度々水晶の街で外食となります…私はそうしています」形式ばった、コホンの咳払いがひとつ。

「それでは改めまして、ようこそ水晶の塔・美術館へ。ケンイチさん、歓迎いたします」

そして管理人は、芝の手入れの準備をしますと言って、建物の中に消えていったのである。

「?」と、とぼけた表情で電柱のように突っ立つケンイチの姿は、見ているものがいたら、きつと吹き出していたに違いない場面だった。

ケンイチは何本目かになるタバコを灰皿にねじ消して、ため息をついた。

ここは1Fの管理人控え室である。彼は畳に座りこんで、見てもいないテレビの画面に視線を向けていた。

先刻からの話では。

管理人は暫く芝の手入れをやっていた、その後ロビーの奥で事務仕事を始めて、そしてそのままケンイチは放置されている。

ケンイチの地階の探索は、既に終わっていた。地階にはあといくつかのゲストの部屋と、あの道場の広間しかない。

道場のサンドバックはコンクリートのように固くて（おそらく管理人もほとんど使っていないのだろう）もう少しで、自由のきく右の拳の皮が剥けるところだった。腹を立てて蹴り込んでみると、埃ぶく重い音が寂しく響き、ケンイチ以外に人の気配がない空間を強調する。どうやら地下フロアは無入らしかった。

テレビの画面の奥では、料理番組が延々と続いていた。

ケンイチは頭の中でもう何度目にもなる、自分が駅のロッカーに放置してきた大金の事を考えていた。

いくらあったのだろうか？あわててバックに詰め込んだので、もちろん勘定出来なかったが数千万、数億？ともかく組が暫く傾く大金

だろう。今頃、ヤクザ仲間が血まなこになって自分を探している筈だ。

夜になったら、とりあえず金の確認にだけは行きたいところだが、今はまだ、まずいだろうか。

管理人は自由にやっていいと言ったが、美術館を抜け出してそのまま逃亡もヨシ、なのだろうか。

乗り付けた車は、美術館入口敷地の…例の、今朝もいた、変な、小さい、3号爺さん？アレが座り込むすぐ脇に、なぜかどこからか運ばれた藁わらの山で下手くそに隠されていたの見た。ところで動くのかアレ車？

今はなりを潜めていたほうがいいのか、何をすべきなのか、ケンイチは決断が出来ないでいた。情けない気分だった（こんな所で何やってんだ、オレは）

イライラしてもくるのだが、ここに酒類は一切ない。かわりに冷蔵庫の中にあつた牛乳パック1リットル2本を空けてやった、ザマーミロだ。

ドア越しのロビーの会話が漏れ聞こえたのは、そんな時だった。

ケンイチは耳をそばだてながら、扉を少し開けてみる。

視界に、若い女性と会話する管理人の姿が映る。会話は聞き取れない、が。

女性側の質問に管理人が応対している。何だか女性の質問が詰問へ、

管理人の応答が言い訳になっていく。女性が明らかに高飛車で、管理人は押されている。

（何やってんだ、アイツ）

他に人影はない。管理人は女性と対一^{サン}で、何か不利な口論をしている様子だった。

（オーイ、コツチ向け、大丈夫かーい）と。

扉の隙間からケンイチは指でVサインを送ってみると、管理人が片目でそれに気付き、苦笑いを返してくる。とりあえず女性は追っ手ではないようだし、ここでは何となく世話になっているらしいし、第一、先程から実は退屈で仕方なくて。

「おはよーございます」と声に出してから元気一杯にドアを開け、ロビーに入ってしまったケンイチだった。

絵画を次々に流し見している女性が、チラリとケンイチを見る。

彼女と目があってケンイチは「どうも」と頭を下げてみせるのだが、女性は無愛想に口元をニコリ、だけだ。

女性の身長は160センチは足らず、栗色のストートの髪。グレーのスーツはリクルート調でまだ20代前半だろうか、体に柔らかな線があまりなく、彼女はケンイチに言わせれば、デコボコのないただの小娘に過ぎない。

（どうしたんだヨ？）

ケンイチが、管理人の傍に寄ってそつと小声で尋ねると、答える管理人も小声だ。

（市の役人さんらしいです。書類上の手続きが変だとか。調査にいられたようです。先程からまくしたてられています）

（アンタ管理人だろう、何ヤツテンダ）

（役人さんであっても、若い女性はどうも苦手です）

そこで大男2人のヒソヒソ話に、女性の軽い咳払いが割って入りそれ一つで牽制された、だった。

「館長さん、お名前は？」

「私は」と、遠慮がちなながらも管理人は親指を立て。

「矢野龍介といます。ここに館長という方はおりません、私はただの管理人です」

管理人のグット・ジョブの仕草か、に女性は目を細めていた。いわゆる、イラっとしたのだ。

「で、そちらの方は？」

「当美術館のゲストです。ケンイチさんです。しばらくこちらに滞在されています」

紹介をされて、管理人の横で魚の死んだような瞳のケンイチが「どうも」と手を上げ、今度はケンイチが咳払いをした。

「役人さん？ずいぶんチャームिंगな役人さんだね。で、その役人さんがなぜ朝っぱらからこんな所に？お暇ですか」

「…今どきの公務員には、各人ノルマが課せられていまして。その役人さんって言い方、やめていただけませんか？」

怒気を浮かべて態度もそんな風に、彼女は2フロビーへと歩み始め、男達は距離を置いて続きながら背後でごちゃごちゃ、やった。

（ケンイチさん、もめごとはダメです）

（バツカだね、オレに任せとけて）

ケンイチはウィンクしてから、管理人の前に行く。

彼はいくつか階段をすっ飛ばして、2フロビーに上がったところで女性の横に並んだ。

「失礼。じゃあ美人のアナタ、お名前は？」

ケンイチは露骨に冷やかしてそう言って、何気なく目の前の絵画に目をやり「あっ」

そこで息を呑んでいた。

「これって？」

女性はケンイチの変化に気付かず「私は、西野陽子といいます。出向きが市のお役所ですが所属は国税局。一応キャリアのはしくれな

んですけど？この美術館は、登記上にいくつも不備があつて」と、ここで状況を悟る。ケンイチの視線も興味も、彼女にでなく、目の前の絵画に向けられていたのだ。

「あ、の！？」

「イヤちよつとき。でも」

更に慥然とする彼女に、悪意のないシカトを詫びるケンイチだが、尚も目は絵画に向けられ釘付けになつたままだ。

「これって【恋文】フェルメールじゃね？オレ知ってるぜ」

遅れてやつて来た管理人が2人に並んでいた。彼はフンフンと鼻で頷うなずいていた。

「そうです。本物のフェルメール【恋文】です」

ケンイチはふーんと相槌して、はあ？

「本物つて？それ……」

ケンイチは試しにもう一度。

ふーんと相槌して、はあ？もう一度ふーんと相槌して、はあ？やっぱり首が傾げになる。

「いくら何でも、そりゃない！」

それは語調も強くの、ケンイチの苦言だった。

ケンイチは呆れ顔をする。管理人は理解できていない笑顔。役人の西野陽子は無表情だが状況が読めず、目が点だ。

「本物がここにある筈ねーだろう？コ・レ・ハ・外・国・の・お・宝・ダ・ロ？そうじゃねーのか？」

ケンイチは更にぶつぶつ文句を言いながら、絵画に添えられているラベルを読んでみるが、素っ気無く「フェルメール【恋文】」と表示されているだけで。もちろん、本物ですと表示する訳もないが。

もう呆れちゃう風のケンイチが気に入らないのか、管理人は改まった感じで咳払いをした。

「ここにある絵画は、全て本物です。私はそう聞かされております。^{おおよけ}公に所蔵と称される物が、実は贋作^{がんさく}で」そこで西野陽子を気にしてか、ためらいがちになり「莫大な資金が投じられて、この美術館は維持されている。私はそう聞いております」

「そんな、アホくさい」

言下に否定する風にケンイチが片手を上げると、西野陽子 陽子が、あの、と口をはさんだ。

「これ？この【恋文】ですけど。そんなに有名なものですか？」

ケンイチは瞳で、はあ？と応ずる。

「彼女【モナリザ】知ってる？ゴッホの【ひまわり】とか？」

「有名なそれ、なんですか？これが。本物なんですか？」

「と、コノ管理人さんは言ってる」

ケンイチは大男に指弾をくれてやり、独り言のように「∴本物なら時価いくらだ？何億何十億？いやもつとするかもナ」

ケンイチの言葉に、3人は三人三様の無言状態に陥っていた。

暫く沈黙しんもくが流れて。

陽子が初めて、まじまじとケンイチに目をやって、「絵にお詳しいようですね、貴方は？」

「オレか？」

ケンイチはニコツと、オヤ？管理人が陽子の後ろでダメダメと仕草しているゾ？で、ニカツと笑った。

「絵には詳しいよん。中学の時は、校内のコンクールで入賞の常連」
そこで一呼吸だ。

「オレはヤクザだ、市街のZ会。アソコの一員だ」

途端に変わる陽子の顔色だった、当たり前だろう。

飛びのくといった彼女の腕をケンイチはつかんで「心配するな、変なヤクザじゃない」と、早口に言い「黙って、聞け」とも言った。

「いいか？絵には本物とニセモノを見抜く方法がある」

ケンイチが指を立てて注目、といったそぶりをする。

管理人は額面通り注目していて（コイツは馬鹿野郎かも）陽子の瞳には、明らかに怯えがある。そんなつもりじゃなかったのだが後悔になったので、ケンイチは精一杯優しい笑顔を作っていた。

「まず、絵の前で目を閉じる。今日あった事、全部忘れる。嫌なことも楽しかった事もみんな忘れて、それから目を開く。で、一番初めに目に飛び込んで来る「イメージを見る」だ。その時心がザワザワしたらそれが本物。人の評価は関係ない。偉そうに絵を語るのはいそれからだ」

再度沈黙が流れた。どん引き？とはやや異なる、不思議な間があった。

ツイと、陽子はケンイチから離れてしまう。

ケンイチにはその反応が判っていたので、もちろん気にならなかった。そもそもケンイチはこの時、本当に【恋文】の前から動けなくなっていたのだから。

彼は自らの言葉を素でやって、異様に心がザワザワしてしまい、あつげに取られていたのだった。

(本物ならザワザワする、だと?)

ザワザワすると言ったのは、人の直感力を言ったつもりだった。

どんなに精巧なニセモノも、何となく人には見破られてしまう筈だ。それが道理だしそうあってほしいという願いも込めた、ケンイチなりの表現だったが。

それに近い何かが目の前にある、というのだろうか。

【恋文】を見つめるケンイチの脳裏を、本物かも知れないという思

いが一瞬かすめた。ここはまがりなりにも美術館だ、可能性だけはある。

では100歩譲って仮に【恋文】が本物だとして。

(でも話題になってない、そんな話)

国内にあるのなら、もうテレビやマスコミで御馴染みになっている筈だ、上野動物園にパンダがいる事は日本中みんなが知っているゾ。

(で、何でココなんだ?)

こんな寂しい、無名の美術館だから当たり前といえばそれっきりだが、見よ。ニセモノだからか田舎だからか、ともかく世界的に有名な名画に鑑賞者が一人もいない。

やはりどう考えても、状況は【恋文】を本物とは語ってくれなかった。

ケンイチは初めから判りきった事で、考えてみる方がどうかしていると思いつながら、それにしてもと目を細めていた。

この雰囲気は何だろう。ニセモノ、贋作にこんな気配が作り出せるものだろうか。

(まさか目利きが出来るのか、オレって)と、遂には内心でおどけて愉しんでみたり。

ふいに、ケンイチの背後で音楽が鳴り始めていた。

気付いて目をやると、陽子と管理人がオーディオシステムの電源を入れた様子だ。視線を【恋文】に戻そうとしたケンイチに「ちょっと、ヤクザ屋さん！」

なんと陽子は、ヤクザのケンイチを怒鳴りつけたのである。男達が耳を疑って驚いた。

(何？何だ、コイツ？)

ケンイチの顔が紅潮する。でも余裕ありの少しだけで、管理人がニカツと笑ってそっちの方に腹が立つ。

(チクシヨ、全然なめられてるじゃん、オレ)

「ヤクザ屋さんですが、何か？」

ケンイチが軽くにじり寄って行くと、陽子はすごく怖い感じで見返す。ケンイチも管理人もこれにたじろいだ。

「？」「なぜ、怒ってる？」

口ごもるケンイチの腕を荒々しくつかんで、陽子は「ちょっとこっち」「そこ！真ん中！」と命令口調で、彼をオーディオシステムの前に立たせる。管理人はオロオロしていた。

「どうなのよ？貴方、心がザワザワする？」

詰問というより抗議、そんな陽子の口ぶりと同様であり「何だ、どうして怒ってたんだ？アンタ」と、ぼやくしかないケンイチだった。

ケンイチが、右に左にと突き飛ばされた正面には、小ぶりのスピーカーのオーディオ・システムがある。

ガラスで出来たような奇怪な形のアンプの、小さなランプが一つだけ淡く点滅していてよく聴くチンケなクラシックが流れているが、と思ったケンイチは、ふと眉を寄せた。

「あれ？」

無言で、刺すような視線で陽子が見つめている。

「何だ」

呆然とするケンイチ、呆然と呟く。

「…ザワザワするぞ、絵と同じだ、何だコリヤ？」

そこでいきなり、バチンとシステムの電源を落としてしまう陽子だった。

「さぞ、ザワザワした事でしょう」

彼女の肩はワナワナと震えていた。訳が分からずうろたえるばかりの男達を見てか、彼女は少し寂しげな表情になって「とても不愉快です」と、言っただけ。

「公益法人にしては納税の額が、他より二桁多いのは…有名な絵画があるからですか？でも、国際的に価値がある絵画なら然るべき国立施設下に所蔵すべきで、在り方として不自然じゃありませんか？そもそもお役所でいくら調べても、ここを運営する法人の実態が見

えてこないし……正体不明の美術館に、高価な絵画、とても不思議なオーデオ、そして馬鹿が一人。ここは変です、ここは何ですか？」

最後に辺りを一瞥し「帰ります」そう言い残して。彼女は嵐のよ
うな怒りを最期に見せて、足早にロビーを降り逃げるようにして、
そこを去ったのである。

前編・5 前編の終り

何だった今のは？の、ぽかんと残された沈黙の中だった。ケンイチが呟く。

「怒ってたナ、どうしたんだろう？」

ちらりと管理人を見て「アンタ何かしたか、おっぱい触った？」と言ってみるが、管理人も判らない顔で苦笑いだ。

「私は何も。ただオーディオに興味があったようです。何か驚いた風でしたね」

「ふん。女心はわかんねー、だな」

ケンイチがそういえばと、管理人の顔をまじまじと見つめる。

「馬鹿が一人って、言われたゾ？」

「ですからそれは」

管理人は口をきつく結ぶ。管理人とケンイチはちょっとした睨み合にらいになった。双方退かず（馬鹿と言われた、それはお前だ）そんな瞳が火花を散らす。

2フロビーから壁面のガラス越しに、芝生の小径を帰る陽子の姿が見えた。その先にある最新型の黄色いミニ・クーパーが彼女の車だろつ。

いわゆる3号爺が何か声を掛けた様子だが、彼が怒鳴り散らされているのはその光景から明らかで、読めて笑える。

「あのじいさん、だけど」

ケンイチの口調は問うというより、ぼんやりとしてだった。

「前もいた、今日もいるんだな」

あらかじめ質問の内容が分っていたという顔で、管理人もそこを見下ろしていた。

「水晶の街に住まわれている老人です。資産家と聞いていますがごく普通のご老人です。晴れた日には、午前中の内にあそこに座り、日永おられます。彼に言わせると私が1号の管理人、2号はまた別の者がいて……ご自身は自称、3号の管理人だそうです」

ミニ・クーパーが、徐行しながら敷地から出て行く。3号爺はめげない、手を振って見送っている。ケンイチは「へえ？」と了解しつつの軽い笑いとなった。

「あの女も言ってたが、ここは変な所だよな」

ケンイチは独り言のように。

「何か隠し事でもあるのか？例えばほら、金持ちの脱税用に作られた建物とか？」

「いいえ」

管理人の柔らかい即答、嘘がない由縁だろうか。

「ここは純粹に美術館です。確かにある財団の所有になりますから私設という事にはなりません。ただし曇りひとつありません。お役所をはるかに離れた管轄ですから、世間ではなかなか理解できない形態かもしれません」

「金持ちの、悪趣味ってやつか？」

「イメージは近いかも？」

ケンイチのつつこみに、くつくつと笑う管理人。彼は話題を変えて、フェルメールを指で示した。

「ケンイチさんは絵に詳しいですね、さすがゲストですか？」

「普通、知ってるだろう」

管理人のアンタがその価値を知らないのか？と突っ込みかけて面倒くさくなり、ケンイチは頭を掻いた「てか、あのな」と、続ける。

「高校生時分は、これでも美術部だった。絵が好きなの仲間もいた。ヤクザになつたのは？勉強も出来ずにただ喧嘩が強かったからだ」

「4〜5年位前、見た事がある。どこかの美術館だった。もちろんニセモノを見た。興味も無かったけど、たまたま読んだパンフレットであの絵にまつわるエピソードを知った。あの絵、というかこの【恋文】はいわくつきで特別なんだ、だから憶えている。フェルメールの名もそれで知ってるだけで、他は何も判らない。そして…興味もない」

「興味もない？」

管理人が、それは変だという顔をする。

「あの女性に説明した絵画の判別方法は、面白かった。真偽はともかく名画はとそういうものか、と唸りましたが？」

「あれはオレの必殺の表現だし」

苦笑いのケンイチに「そうでしょう、近年の贋作は簡単には見破れない」と、管理人は相槌のつもりだろうか、で笑ったが。

会話の流れに反して、ケンイチはここで笑い返さない。ケンイチは小さく反論する「本当に、贋作を見破れねーか？」と。

そのケンイチの瞳には不敵があり、アマノジャクの茶目っ気があり、（帝釈に挑み続けた）阿修羅王の哀しみのような 質問とも嘆息とも何かに抗議しているともとれる色があった。彼は、じつと管理人を見つめ（仕方のねー大男め）といった顔になって。

「管理人、アンタ絵心はないだろう？」

「私はただ、管理を任されているだけなので」

苦く頷く管理人を見たケンイチは笑う。それは嘲笑でない^{いた}労わりあるの笑みで、2人のバツの悪い苦笑であった。

「上手い絵は確かに人を感動させるかもナ？」と、ため息交じりのケンイチ。

「でもそれだけじゃ、続かない。名画のコピーを見る、寸分違うな
い筈なのに人は通り過ぎてしまっ、ただの感動は長く続かないんだ。
…贋作の場合も同じだ。贋作作家っているんだゾ？ヤツらはオリジ
ナルと絵の具も同じ、キャンバスもタツチも当目を再現、構図に1
ミリの狂いもない仕事をやる。でもそれなら機械のコピーと同じじ
やないか」

静かな無言の管理人、だが耳を傾けている。

「…はつきり違う事は「描いたのが本人じゃない」その一点だ。で
も考えてみればソコが決定的に違う。作者の心はこれっぽっちも描
かれてない」

「多分アンタは…オレもそうだけど、いや人は、みんなか？…どこ
か壊れててそれで。簡単に見破れる事が、簡単な筈なのにそれが出
来ないでいるんじゃないのか」

理屈じゃないとケンイチ伝えたかったのであろう、果たして気持
ちは管理人に届いたのか「いいえ、見破れるのかも？」と、管理人
は微笑んでいた。

「実は、ケンイチさんに言われて【恋文】を改めて見た時、確かに
心がザワザワとしました。お恥ずかしい話管理人の私が、此処で初
めてそんな体験をしたんです…貴方の判別法は案外正しいのかも知
れませんか。貴方は純粹ですね？ケンイチさん」

管理人は照れくさそうに頭を掻いていて「さて」と、声もあげた。

「私はそろそろ、芝の手入れに戻ります。敷地は広すぎて、順番に

視線を投げると、管理人はもう外に現れていた。芝刈り機を肩に担いだ彼が3号爺に近づいていき、老人も立ち上がって気さくに応じている。

ケンイチは【恋文】をもう一度眺め「…ここは、何だ」と呟く。

水晶の塔・美術館と口にして、ケンイチは何度かその言葉を反芻はんすうした。

正確には水晶町というその街は、山あいの扇状の土地にひっそりと佇む静かな住宅街だった。美術館の丘を成す稜線の林を挟んで、その下流に造成された形になる。

美術館は山麓にぽっかり空いた言わば飛び地で、山の斜面をを縫うようにして下る山道が美術館正面ゲート前をかすめ、この山道の細道のように分岐した街へ続く林道が、ここから下っていく（山道は真っ直ぐ行くと、どんどん人気のない地域に入り込み、巡り巡ったあぐく地方の国道に行き着くらしいが、もう地域もよく判らない果てだ）

杉並木が美しいヒノキの林に変わり流れる林道は、美術館への参道のようにやがて道幅が広くなり、二度くねって下り切って街のメインストリート・石畳の大通りの上層につながる。

小綺麗な街並みは石畳の大通りに貫かれてゆったり下り、左右に拡がり、その景観はベットタウンの趣だ。意図されているのか茶褐色の屋根で統一された小ぶりの住宅街が、大河の川面のように上から下へ押し進む。

街の機能は、高台から見てその下方に集中しているらしい。いくつかの商店街、マーケットがあり、公共施設、ケインチの傷の手当てをした高名な医者のいる？病院もその辺りで、そこからいつしか石畳はアスファルトに変わり、メインストリートは県道へと延びていく…

市街にいたケインチには、そもそも山中の美術館など圏外。その後

方に近代的な香りがする街並みが広がっているなんて、軽く意外な発見だった。

市街の外れに隠されたミステリアスな街?…新しい街なのだろう、開発は進んでいく。しかし、整備されたどこかリゾートを思わせるその清楚な佇まいが、目に鮮やかな「水晶の街」である。

街中はマズインだよな、アンタ変わってるよなと。

(そんなセリフばかりで)ケンイチは思いつくまま世間話をして石畳を下る。連れ添う管理人は相変わらず笑顔で、いえ、とか、そうですねばかり言っている。

管理人は、進んで自ら口を開く事はないようだ。会話をおっくうがっているのかというと、そうでもなく、話すたびに顔をほころばせ、実に楽しそうである。話す事は好きな口下手くちへたなのだ。

(ガイコクの大男か・コイツは)と、ケンイチは内心で大笑いしつつ(どこか憎めないヤツだ)

少し人通りのある商店街にたどり着く頃には、ケンイチは管理人に当たり前前に親近感を抱いていた。

商店街といっても、そこは通りに面していくつかの商店が並ぶだけだったが、管理人によると大抵の用件は、この辺りで済ませられるのだという。

管理人が食事はここで、と立ち止まったのは通りに一つしかない大

衆食堂である（路地を行けば食事処はいくつかある。だが管理人がここしかないと言うから、ため息。一つしかないここ、なのだ）

今風の外観だが、お世辞にも立派とはいえない店構えはこれ又この男らしいが、ござっぱりした感じはケンイチの趣味にも合う。

食堂は、女主人が一人で切り盛りしているようだった。

小柄で痩せた50過ぎの女主人だが、陽気に豪快な笑顔で客の相手をして店内の空気は明るく、昼時ともあつてかそこそこ繁盛している様子だ。

管理人は女主人から「管理人さんは、人の倍食べるから大変なんだよ」と、テーブルに着くなり冷やかされていたから馴染みなのだろう。

だが女主人はケンイチにも「キミがゲストさんかい？ひよろひよるなにーさんだ、何を食べる？」と、いらっしやいの歓迎モード。

この女主人は、ケンイチが美術館にいる事を知っている？

目だけを動かして店内を探ると、縦長20坪の店内にテーブルが5〜6。老若男女でほぼ満席で、女主人のひと声に皆が一瞬微笑んだ？錯覚があつた。怪しい連中にはいないが、でもこのアットホームな雰囲気は気になる…

テーブルには、ざくつと大きめの白いクロスが掛けられている。シミ一つないそれは清潔な印象、いい雰囲気だと、ふと違う事を感じている。

運ばれてきた料理は、管理人お勧めの逸品、焼肉定食だった。まだケンイチは注文をしていないのに、まだ壁に張られたメニューを見ているのに…

この量は冗談か？な。

山盛りの焼肉定食にケンイチが手こずっていると、いつの間にかペロリと平らげてしまった管理人が、口元を拭いながら「まだ食べているんですか？」というような顔をしていた。

（チクショー、化け物め。噛んだか、いいや噛んで食ってねーだろ？）

何人かの客達が、食事を終わらせて店を出て行くが、彼らは一様に管理人に気さくに話し掛け、なぜかケンイチにも「こんにちは、ゲストさん」と挨拶をしていた、なぜだ？

ぎこちなく笑顔で答えながら、ケンイチは何度も眉をひそめた。管理人は名が通っているらしいが、ケンイチをなぜゲストと呼ぶ？なぜ皆が知っている？

（管理人、アンタ？まさか話して歩いたか？）

モグモグしたままのケンイチの抗議に、管理人は歯を見せて笑って「何せ小さな街ですから、美術館の噂はすぐに広まります」だ。それが何か？という風でまったく悪びれない。

首を横に振って苦々しげなケンイチをよそに、管理人は「さて」と、立ち上がった。

「私は、食料品を仕入れていくつか用事を済ませます。ケンイチさ

んは、ごゆつくりどうぞ?」

「モグ?」(何?)

モグモグしたまま、急いで食べるから待てというそぶりのケンイチの抗議にもおかまいなし。管理人は、笑顔でさつさと勘定を済ませると「帰り道は分かりますね?早く街に慣れるよう、散策もいいものです」

そう言い残して出て行ってしまった、ため息をつくケンイチ。憎めない奴だが、アイツにはデリカシーというものが欠けてる、置いていくか?普通。

ケンイチは、ペースを落として食事を楽しむ事にした。ボリユーム満点というのは実のところ嬉しかったし、料理の味は掛け値なしに抜群だし…そろそろ店の客もはけてしまう。それならさり気なく、市街の情報を聞き出せるかもしれない。

女主人に目をやると、ニヤリと笑う彼女と目が合い、ケンイチはギリとする。市街の騒ぎ、ヤクザ連中から金を奪って逃げた事が知れているのだろうか。

どうやら、お喋りの頃合を見計らっていたのは女主人も同じらしかった。

「ゲストさん。あんた名前はケンイチさんっていうんだ、学生さんなんだって?」

(…学生?そんな話になってるのか?)

ケンイチはややキツイ目になる。少し怖いヤクザ顔をして、女主人に向け威嚇を試みるが、瞳に映った女主人の態度に何一つ変化はない。彼女はカウンター越しのどんぐり目で、ケンイチの返答を「ん、どうした？」風に待っていて。

(…ダメっばい)

この手合いにハツタリが通用しない事は、ケンイチの経験則にもある。婦人というものは何を言っても大笑いして、バンバン体を叩いてくるものだ。

あきらめ顔でぶっきらぼうにケンイチ。

「そうだよ、オレがゲストさんだ。学生さんは…どうでもいいだろう?とところで、みんなオレの事を知ってるんだな?」

「当たり前さ」と女主人、笑い飛ばしで「美術館の事は、みんなが知っている。この街の一番の関心事だよ?」

「ヤツか、管理人だな?何を喋ってるんだアイツめ」

「管理人は口の軽い男じゃないよ?私だけに喋ったんだ。ただね、ここで喋ったら街はその話題でもちきりになる、変だねーっ」

爆笑する女主人。笑いごとじゃないゾと口をへの字に曲げるケンイチに、更に彼女は大喜びだ。

笑ったのは女主人だけではない。食事を終わらせた最後の客も、笑いながら席を立って来た。

「こんにちは、ゲストさん」

静かな感じの老紳士である。彼は「中村です」と名乗り挨拶をして、女主人と親しげにやりとりをして支払いを済ませると、もう一度ケンイチに笑顔を向けてから出て行った。

会釈ともとれない位に頭を下げつつ、たまらずケンイチ「なれなれしいヤツラだ」

いい事じゃないか、と女主人は笑いながら言い咎め（そこがなれなれしいのだ）意に介さずレジをチーンと終わらせると、厨房との仕切り台の端に頬杖をつくそぶり。

「今の人が中村さんだ、街に住む弁護士さんだよ。山の向こうの市街に事務所をもってるんだけど、いい男だろ？アタシは好きだねえ。管理人にも熱くラヴ。なんだけどねえ…」

…遠い目？管理人にラヴ？と、ケンイチが吹き出した。

「アイツに？管理人？あんなのの、どこがラヴなんだ？」

腹をかかえるケンイチと同じように、女主人もくつくつと笑う。その笑いは、管理人が決して見た目カッコ良くはない事に、同意する笑いだ。

でもゲストさん、ケンイチさん？と、女主人はひとしきり笑ってから「キミは、管理人の事を知っているのカナ？」

「？」

「管理人がどんな人かって事だよ、彼の正体だよ？」

女主人は、興味津々という目でケンイチの反応を待ち「？」（怪獣？）と、分かりません顔のケンイチを快く了承。待ってましたとばかりに、かしまった調子で自慢気に胸を張った。

「管理人・矢野龍介。その本当の姿は？…謎の失踪をとげた元・空手世界チャンピオンだ」

女主人がグッド・ジョブの親指を立てる、コノ女性ハ誰カニ似テル。

「管理人はこの話をしたからないけど、みんな知ってる事だ。あの人は昔日本空手界、無差別級のホープだった。5年位前 ああ、週刊誌の受け売りだよ？彼は、突然その世界から姿を消した。向かうところ敵無し、破格の強さで世界一になって、その去就は注目されていたのに、だよ？行方不明になった当時、管理人を、格闘系のプ口的スカウト達が探したらしい。体格も日本人離れしていたから、当然ワールドクラスで世界的な話になったんだけど、結局足取りはつかめなかった。でも？フタをあけてみるとなぜか、彼はここ水晶の街にいた 水晶の塔・美術館の管理人におさまっていたって、こんな話さ」

「ふえ…？」

ケンイチは、あからさまに驚き声をあげていた。

空手の事は見たし聞いたし、何だか少し手合わせもした。その実力が世界チャンピオンクラスだったとは…今考えるとゾツとする。そして有名人なのか？オレは無名人だゾ。

「^だけど、何でだ？なぜそんな男が、美術館の管理人なんだ？」
不思議そうにケンイチが呟くと、女主人は意味ありげに笑った。

「それだけ、すごい美術館なのさ」

女主人は軽くウインクしたが、似合わない。自覚があつたか女主人はそこで少し照れる、だからケンイチに、少しだけ暖かく判った事があつた（この人は、若い頃きつとモテたろうな）

「コホン、ともかく世界一の美術館だよ。だから、世界一強い男が守ってる、そういう事じゃないのかい？」

「世界一？…世界一か」

フェルメールが本物ならそうかもしれない、とケンイチは考えて苦笑いになる。

暫く、とりとめのない会話をしてからケンイチは食堂を後にした。

女主人の話の断片からは、市街のヤクザ達がケンイチを探してこの街に来た様子は、まだないようだ。

女主人は出て行こうとするケンイチに「ゲストさん、ケンイチさん？ 晩ゴハンも食べにおいで。特別定食を作つてあげるよ」と、快活に声をかけてくれたので悪い気はしない、だが。

通りに出て色々見て回っていると、通行人がケンイチをみとめて笑顔を向けてくる。小声の「ゲストさん」という言葉が耳に入ってくる事があつて、度々あつて。もう慣れた、特に不快はない。そうなのだが。

「調子が狂う所だな、ココは」と、ケンイチは幾度も通りに立ち止まり、空を見上げて頭を掻いた。

通りのずっと向こう側で、何人かの婦人達と談笑している管理人の姿が目に入る。管理人は街の人気者らしいが、2メートルの巨体は目立つというよりまるでマンガだ。

「美術館の街か」と、ケンイチは呟く。

いくつかタバコを買い込もう。酒は？やめておこう、美術館は持ち込む感じの場所じゃない。そうだ、何か武器がいる。

ケンイチは通りをウロチョロして、青いプリントの長袖のカッターシャツと珍しい藍い色のM1ジャンパー、リングを紙袋で小脇にひと抱え買う。通りの外れにスポーツ用品店があって、ここでは金属バットを買う。それが武器、護身用だ。誰の何に対する護身用かって？もちろんケンイチの、対・管理人用の護身アイテムに決まっている。

ケンイチは、M1ジャンパーの背中に金属バットを差すいでたちになる。そしてすれ違う小学生に変な目で見られながら、美術館へ帰っていった…

数日が過ぎると、ケンイチは絵画の前で時間をつぶす事が多くなっていた。

美術館にある絵画は、【恋文】だけでなくどれもこれも、いわゆる

心がざわつく作品ばかりだった。

ピカソの有名な作品を発見して、慌てて管理人を探そうとしてやめた、事がある。どうせ「本物か?」「本物です、奇跡ですね」のやり取りになるに決まっていた、アホくさい。

ケンイチが、そんな事に囚われず絵画を眺める事に慣れてから。

ここにある作品は、毎日ひとつひとつ雰囲気が変わるようになり、見飽きるという事がなくなった。なぜだろう…

それでも退屈になると、ケンイチは管理人にちょっかいをかけた。

食堂の女主人から聞いた「元・世界空手チャンピオン」の一件は、気にはなったがあえて口にしていない。

本人が語らない事だ。もちろんケンイチにとっても、力で管理人を屈服させられない位の問題に過ぎず、会話の支障にならない。事実口論になっても大抵言い負かされるのは管理人で、それがケンイチにとっては返って痛快に感じられる。世界チャンプだから、何?だ。

管理人は、毎日同じ時間に受け付けにちぢこまって座り、事務仕事に取り組む。その時はケンイチがそばに立ち（何やってんだ?）

机の片側には古いパソコン。もう片側には定型の黄色いA4郵便が4〜5通、その上にこれも4〜5通手紙が重ねられている。定型の郵便物には【水晶の街・住宅公団】とスタンプの送り主。

管理人は手紙の返事を書いている。手紙には、オイオイ!ハートマークで封してるのがあるゾ。

「ファンレターなのか、それって？」

はい？と管理人は苦笑いして。

「宛先はここ美術館です。ファンレターと言われれば、そうかもしれません」

「ふーん。毎日よくも飽きないな？」

「これは電子メールへのお返事です」

ケインイチは怪訝になり「電子メール？」

「電子メールに、アナログで返事を書いているのか？メールにはメールで返信じゃねーか、普通？」

「はい、いいえ」と、管理人が頭を掻きながらパソコンを示す。

「一応この美術館はWeb上にもサイトを開設しています。サイトにはいくつの方針があります。いたずらに双方向の発信を行わない。極力、匿名性を排除する。その結果、多くの電子メールの差出人が実名となりました、連絡先も実在するものに」

ケインイチは、一層怪訝顔になる。管理人は困った風に「そうになると心のこもったメールには手紙でお答えしなくなりませんか？」

「どうだろうな、時代に逆行してないか？完全に」と、ケインイチ。あまり真剣に聞かない事にして傍から手を伸ばし、マウスをいじるとパソコンの画面が生き返る。

「私の場合、メールの返信で。はじめまして（顔文字、爽やかに挨拶）…は変でしょう?」

「は?」

「管理人です ヨロシク（顔文字、奇抜に挨拶、半角カタカナで印象的セリフ）では正直、キャラが違います」

「容姿は違うが、キャラは合ってるじゃね?」

パソコンの画面はサイト風ではない。【美術館に棲む^す管理人^{かいじん}】これはタイトルロゴ？

(コ・レ・ハ・ブログ？)

クリックをして、ケンイチは「あっ！」と声をあげた。

「な、なんでこんな写真がうPされてる？」

それは管理人のブログだった。ブログ記事に、ケンイチの寝顔の画像がある。傷の手当てで寝込んでいた時の画像か？

クリック「あ？」クリック「う？」クリック、クリック…

角度を変えていくつもある。「新しいゲストさんです、活きのいいのが転がり込んできました」と、管理人のコメント。なぜに三角帽^{ナイトキャップ}の寝顔、しかも有名どころブログサイトじゃねーか。

「くおの激バカ！」

マウスが握り締められメキメキと音をたてるほどに、ケンイチが腹を立てた。

「オレを、誰が紹介しろと言った？」

道理で街の連中がケンイチのウワサをする筈だ、これが原因だ。

まあまあ、と口ではなだめ、目に反省のない管理人。

「一応、決まりです。ゲストは私のブログで紹介する。これは街の読者を安心させる為、そしてケニイチさんを守る為です」

「オレを、守る？」

そう言われれば自分は今露出はマズイ状況だと、ふと気付くケニイチ。

画像はなおさらマズイ、まずいことになった。と焦りはじめるが、管理人の次の言葉がケニイチを焦燥から救った。

「訳ありなら、これで貴方は保護される。少なくともゲストは私、管理人の保護下ですから」

「？」

「ブログ記事は、私が承認した読者しか見る事が出来ませんから安心して下さい。街の読者さんは、美術館のゲストは私が保護している事を周知しており。怪しい連中に貴方の事は決して明かさない、という事になります」

クリック、クリックとケニイチ。

「だけど」と、反論を試みるが「水晶の街で、何か不愉快な事がありましたか？」と問われて、言葉が続かない。

「街の皆さんはケニイチさんに明るい筈です、いえ、そもそも。水晶の街の住民は皆さん明るいんです」

「…」

クリック…目の前に管理人スマイル、か。

ケンイチは、フン、どうせ街を出歩くしナと、ため息になる、クリック。

「じゃあ、撮り直しだ」

「？」

「ちゃんとした写真に変えろ、寝顔はイヤだ」クリック、クリック。

ケンイチがいきなり机の引き出しを開ける。カメラはどこだ、今どきケータイももってねーのか？そこはダメです、と男達はがちゃがちゃ始める。

そんなこんなで小気味良く日々が過ぎていき。

西野陽子が再び美術館に現れる。それはケンイチがここで初めて迎える日曜日の遅い朝だった。

「よお、久しぶり。またアンタか」

対応に立った管理人の頭上から、階段ごしにケンイチが声をかける。

陽子は唇をかねて目でそれに答えるのだが。その雰囲気は以前と違

う。服装も手伝ってか、この日の陽子は薄手の淡いグリーンのセーターにジーンズ。髪を後ろ手にくくったラフな姿だ。

2Fロビーの長椅子でうたた寝をしていると、屋外に車の気配がして、陽子の再訪にいささか慌てたケンイチだった。だから役人には日曜日もないのかと、呆れた調子になっている。

「今日は、何デスカ?...何なんだよ」

とげとげしいケンイチの口調に対して、少なくとも高飛車でない陽子は、うつむき加減に言葉を選んでいる風だった。

「今日は、違うんです」

「?」

「美術館の調査は、中止になりました」

「中止?」

そうだ。前は勝手に怒って帰っていったが、確か何かの調査に来た風だった。美術館の登記がどうか言ってたっけ、その調査が中止なのか。

ケンイチが管理人に問う様に目を投げると、管理人にも判らないように腕組みをしている。

「調査は中止です、一切、不問となりました。それをお知らせに伺いました、それと」

そこで口ごもり「ごめんなさい」と、突然頭を下げる役人、西野陽子 陽子。

男達はロビーと階段と、上と下とで顔を見合わせてしまった。

「…中止で、何で謝る？」

ケンイチは関わりあいたくないが仕方なくだゾ風に、ロビーへ降りる。管理人は話を聞きましよう、場をとりなす感じになる。

「中止になった経緯は、申し上げられません」

疑念はまだあると目は言たげに、それもすぐに隠して「色々考えたけれど、疲れてしまつて…」

「手が離れて改めて思い出すと。私はあの時、失礼な事ばかり言いました。だから謝罪したいんです。ごめんなさい」

もう一度頭を下げて、陽子は不器用に笑顔を作ってみせる。その仕事はまるでただの小娘だ、もじもじしてる。

今回の陽子は、以前と違い寂しげで別人のようだった。調査の空振りで意気消沈なのか、それにしても随分の変わりようだ。

「だからその、今日は遊びに来ました。いえ、見学です…その、いけませんか？」

「見学つて…」未だ何だどうしたのケンイチ。

管理人もひるみっぱなしだったが「そう、見学です。いけないんで

すか？」と重なる陽子に、何か感じたようで、ここで笑顔になる。

「書類の不備の疑いが晴れた、という事ですね？」

陽子が、実は未だ疑わしく首をひねりたいのに、無理をして「そうです、疑いは一応無し」と、ウンウン頷くので変な姿勢になり、質問した管理人の失笑をかう、ケンイチも一応苦笑い。

「そして一般の来館者のように、この美術館に興味がある」とは、管理人のセリフだが。

きよとんとするケンイチ。え？そうなのか？陽子は小さく頷いている、え？そうなのか？

「それでは、改めましょう」管理人がコホンと咳払いした。

「ようこそ、水晶の塔・美術館へ。西野陽子さんでしたね？ゲストとして歓迎いたします」

忽ち、^{たちま}陽子の頬が真っ赤になった。

「あの、実はお願いがあります。これなんです」

彼女はおずおずと、コンビニのレジ袋を2人に差し出した。

差し入れかとケンイチがそれを受け取ってみると、レジ袋（小）いっぱい
の記録ディスク、いや音楽CDだ？

「は？」

ケンイチはやはり未だ訳がわからない。

怒って帰った頭の硬そうだった役人が、なぜ見学に来る？そしてなぜレジ袋でガラクタを持ち込む？管理人も不思議そうにレジ袋を覗き込み、首をかしげるばかり。

陽子は笑っていた、ようやく腹の底から笑えたようにさっぱりしている。役人の営業でないその笑顔は、年頃の女の子らしい屈託のない笑顔だった。

やれば出来るんじゃないか、西野陽子、である。

「ヤクザ屋さん、驚くわよ」

「そのヤクザ屋さんってのは、やめてくれねーかな」

「ホントの事だし」

2Fロビー。ケンイチの文句すら許してあげちゃう位、テンションの高い陽子。彼女は前回とは打って変わって親しげに、オーデオ正面のソファーにケンイチを座らせていた、前回こづき回したこの陽子で、やられたのはケンイチで、忘れたのだろうかこの2人（管理人の気持ち）である。

「これはどうかなあ？」と呟きながら、音楽CDをセットしてスタンバイ。「さて、どうだ？」の陽子が、慌ててケンイチの横に後ずさって音楽が流れ始める。

J POP、女性ミュージシャン。最新じゃないケドひと昔ヒットした、えーと誰だっけ？

神妙な顔で音楽に聴き入る3人の中で、感嘆の声を上げたのはケンイチだった。

「今顔が見えた。美人だ」

「え？」の管理人。

「長い、ストレートの髪」

「ええ？」と、管理人。

「や？裸足で歌ってる！」

「えええ？」…まだ管理人。

管理人はさておき、ケンイチは目をぱちくりさせて驚いている。可^お笑^かしそうに陽子が笑った。

「正解だわ。このCDは裸足で歌う事で有名なミュージシャン。収録時も、裸足で歌っていたのね、それが見えた？やっぱりこのシステム、凄い」

「なぜ、見えるんだ？」「あの???」（2人の会話の間でしつこく疑問符を浮かべるのは、後者の管理人である、この男はさておく）
「理由は、オーディオ・システムが極端に正確だから、です。正確な幻影が浮かぶの、ちゃんとした配置でこれを聴くとスゴイ事になる筈なの」

陽子がそう呟いてからの小一時間は、あっという間だった。

次々に試される、流れる音楽。クラシック、ジャズ、演歌、英会話レッスン（なんだソレ）

管理人がうずうずしていたので、ケンイチが場所を^{ホジション}変わってやると、ようやく彼にもケンイチが言う幻影が見えたらしい、嬉しそう。あまりに嬉しそうなので、陽子に大笑いされてしまう。

オーディオ・システムの驚くべき点は2つだった。

まず何の変哲もない音楽CDが、演奏シーンをことごとく幻影のように浮かび上がらせる事。

次に、聴き入っているといつの間にか音に捕まる？なぜか、身動きがとれなくなってしまう事（陽子によると音は本来連続するので、音に捕まることは有り得る。リアルな録音に限らず音に芸術性が潜む場合、それが顕著になるらしい。例えば天才ピアニストとか？ヤクザ屋さん、それ安直）

しばらく、とっかえひっかえディスクを交換して、ワイワイやる3人だったが。

「これは、父が話してくれた理想のシステムだわ」

陽子が感極まったようにそう結論したので、場はひと息つく事になった。これ位でと、陽子はゆっくり愛しむように電源を落とす。前回、腹立たしげに電源を落としたのに。

「つまり」と、ケンイチが切り出した「このオーディオは、ザワザワする絵画よりもすごいっていう事なのか？」

陽子は説明したいけれど、と困った顔になる。

「そういう風には比べられない事だし、あの」

あの、と継いだまま陽子は固まって、困った顔のままだ。

「？」

ケンイチが説明は？と促すと、陽子はここで不意に変な事を言った。「ピクニック、やりません？」と。

「は？」

「実は。話したい事がたくさんあって、今日は、それもあって、その、来たんです。ピクニックやりませんか？」

「は？」の、未だケンイチ。

「ぴ・くにつく？」は管理人。活字にして口ベタじゃ尚判らないゾ。

「ピクニックです。外の芝生でピクニックをやりませんか？と、いうかやります、お弁当作ってきました」

男達は顔を見合わせる。ピクニック、それは何だ。もちろんにわか
に想像できる筈もない。

晩秋にしては、日差しが暖かい。

男達には芝生の上に、ゆつたりと大きめのピクニックシートを拡げさせ、陽子は次々に手料理を並べていく。これは、文字通りピクニックだった。

丁度昼時なので、男達は素直に歓声をあげたのだ。が。

次々に並べられる手料理の多さに、ケンイチのテンションが次第に落ちていく。ちょっと多くないか、何だ、この大量の手作り弁当は？

食材はミニ・クーパー満載に詰め込まれていた、車の中身はどうなっているかと問いたくなる程に。重箱、大皿、バスケット、多彩な品々を次々に披露して胸を張る陽子だが、総量は軽く20人前以上に及ぶ。

ケンイチは呆れてしまう。食堂の女主人や、この西野陽子といい、天真爛漫で限度がない。マテよ？もし話がピクニックにならなかつたら、西野陽子はこれをどうするつもりだったのか。言い出せずに泣く泣く持ち帰ってたのか。準備は…大変だったろうな、チキシヨ！。

こうなったらヤケクソだとケンイチは、陽子が料理を並べ、披露する端から次々に手を伸ばしていた。

管理人は途中から「少し多いですね」位で単純に喜んで、事態の深刻さに気付いていない。量に関しては彼の範疇はんちゆうだろう、奴には平気

だろうが。

何事かと3号爺が歩み寄って来る。ケンイチが、大変な事になった
応援してくれ、と声を掛ける。

「こんにちは」と3号爺を歓迎して「お一ついかがですか？」の、
笑顔の陽子。

3号爺は愛想良くワハハと返しながら、ケンイチに耳打ちをした。

(コノ娘^{おめ} とても同一人物とは思えんな)

(どうした?)

(ワシは前回、どけ、じじいと言われたんぢや)

(だよね? 大笑い)

陽子はニツコリと、どす黒くとぐるを巻くオーラを醸す。おじいち
やん、何イッテルノ?

管理人がガラガラと笑い、食べ物^{食べ物}が喉を詰まったと死にかかり、花
が咲いたように皆が笑う。

3号爺は、若い連中の邪魔はせんと笑ってにぎり飯を一つほおば
ると、片手にローストチキン、片手に伊達巻で、またいつもの場所
に戻って行った。気付いた陽子が、水筒をを届けようと小走り^{小走り}で3
号爺を追っている。逃げる3号爺、アラ、なぜ逃げるの?で、陽子
の笑顔が硬くなり、走りが真剣になっている。

ケンイチと管理人は、同じように肩をすくめた。この展開は完全に仕方がない。

歓談の空気が落ち着いて。

陽子が言うには、あのオーディオ・システムは特別らしい。

彼女の父親は（重症の）オーディオマニアだそうで、外交の仕事に携わり、今は海外に赴任している（さすが国税キャリアの父親は外交官かと、ケンイチが羨望の眼差しで言うと、2等書記官、知られていないけど決して地位は高くない、と寂しげに笑う陽子。だから彼女はキャリアを屈指したのだという）

親を指して【音キチ】と呼ぶ。それなら父親のマニアぶりばかりのものだろう。

陽子は幼い時に病弱だった母を終ついに失って。それから父親の傍らにいたので、おのずと父親の高尚な講釈を聞かされて育つハメになり、いつしかそんな世界に興味を抱くようになったのだ、という。

「だから私も【音キチ】なの。遺伝じゃなく後天的な犠牲？」と笑って。

スピーカーシステムは、父親が愛してやまない逸品と同じ物だ、と陽子は言った。

「ここであれを見た時、目を疑ったわ。まさかと思った。スピーカーは楽器なの。楽器になり得るっていうのが父の、いいえ、今や私の持論よ」

ケンイチは目をパチクリさせる。何でもそうだが、マニアが語る屈折した世界だ、よく解らん。

「かえでの木や相反するマホガニー。材質を考え抜いて作るとそうなるの。バイオリンや、弦楽器にとんでもなく高価なものがあるけれど、同じ理屈だわ。アンプ類は父のシステムとは違うけれど、私なら、ここにあるものを選んでいかもしれない。幻の〇×社製、無帰環アンプ」

「高価たかいのか？ソレって」

想像が出来ないケンイチには、そんな質問しか出来ない。

理解できないでしょう？風の陽子は「それなりに高価だわ、私のミニ・クーパーが買える位」

「はあ、世の中には、バカがいるもんだ。いや、その」

今度はケンイチがサンドイツチが喉に詰まったという真似をした、今のは失言デシタ。

「でも、たかがオーディオだぞ？」

「マニアですからネ？もつと高価なシステムはたくさんあるし」

先程から、陽子はお茶ばかりすすっている。彼女は時々サンドイツチの端をかじるくらいで、卑怯だゾ（ケンイチの心）

管理人はというと、仕事をしている、大物の処理に回っている。視界の先で気になり、男達にプレッシャーを与え続けていたパスタの

山とドでかい七面鳥が消えた。ところでそんな管理人は、人の話を聞いているのだろうか？

「オーディオは金額じゃなく、バランスが大切です」独り言のように、陽子は続ける。

「父もよく言っているわ。いくら大金をつぎ込んでも空振りする場合がほとんどで。一つ狂っているとそれをごまかす事は出来ないって。ただし、条件とバランスさえ整えば奇跡が起こる」

奇跡という言葉に、ケンイチの内心が反応する（よく聞くようになつたナ、またその言葉だ）

「体験したじゃない？五感が連動する、奇跡」

陽子は、いたずらっぽい瞳だった。

「システムは、全てを描き出すわ。意図しないものまで描き始める。ここにあるオーディオはまさしくそうなの。壁のガラスの反響が、プラスチックアルファになっている。どんなハイエンドもきつと叶わないから奇跡。それは瞳の色や、衣服まで再現して、心までも描いていく？」

私が言うのだから本当よ、こう見えても専門誌にコメントを依頼される位、私達親子は筋金入りのマニアなんだから、と苦笑を添えるが。

ケンイチは考え込んでいた。

確かに幻影を見た。実体はないから見えたものは幻影だ、映像か。

それは一度垣間見るとリアルの度を増していく。だが音楽CDに映像データって無いんだろう？「音」が映像を描く五感の連動？どう
いう仕組みなんだ…

管理人、どうしてかな？あれ、呆けてる。会話の内容に混乱したのか、食べ方に徹し疲れたのか。どちらにせよ管理人、アンタは此処の管理者で当事者だろう？いわばオーディオはそっちが準備した機械なんだゾ、説明出来ないのか？と。

ケンイチが視線を投げてよこしているのに、管理人はただ困った風だった（だろっとな、オーディオにはこの男が一番驚いていたし）返事をするかわりに彼は、次に控える巻き寿司、いなり寿司の大皿をあごで示した、クイクイツ。

（食べなさい、ケンイチさん）

（？）

（今、当面の問題は、オーディオではなくこの弁当です。逃げるな、卑怯者）

（ちくしょう、そっちの困った風かい）

ケンイチは慌ててガツガツ始め、それを見てとった陽子は喋りすぎたかしら？と照れ気味になり。

食べに食べまくる男達を、しばらく面白そうに眺めている陽子だった。彼女は寿司の大皿を平らげて、喰った喰ったのケンイチにお茶を勧め、それをきっかけに「ところで」と次に継ぐ。

彼女はポケットからメモを引っ張り出し、それをひらひらとさせてニコリ微笑んだ。

「フェルメールについて、調べてきました」

話題はいよいよフェルメール【恋文】へ。

では、注目つと西野陽子は人差し指を立てる。親指でなく人差し指である、であっけに取られるケンイチ。

言葉に出そうとして、弁当を頂戴している手前それはやめるが、ワナワナは止めらず（誰ノ真似ヲシテル？）

はにかんでキラキラした瞳、少女のような清らかさで、優しく柔らかな笑みを浮かべる口元。これが今後、度々彼女が見せる事になる、陽子スマイルというやつだった。

ケンイチをよそに、管理人はここで遂に恍惚となり、魂を持っていかれたのか？それにもケンイチはゲンナリとなりながら（管理人スマイルの他に、陽子スマイルだと？ああ、なんて形容句は自由で簡単なんだ）歯軋りする。

「何にも揃っていない田舎のZ市役所で、書類をひっくり返しながらずつと考えてました。この変なポーズ、今度は私が絶対決めてやるって」と、そんな陽子はケンイチの歯軋りを嬉しがり。

「あの【恋文】が本物だったら大変です」

そして、彼女の説明が始まった。

「そもそも、フェルメールの作品は現存するものが少なく、【恋文】に至っては本物だとするとその価値は数十億どころか、数百億円とも言われ、要は値がつけられない程貴重な作品なの」

(説明の下で、ソレ見る、それが本物だつて？のケンイチは管理人を一瞥しつつ、金額には改めて肝をつぶして軽い感嘆をもらす。管理人はまた本物うんぬんの話ですか、と渋い顔をしている)

「貴重な理由は、絵を取り巻いた出来事も関係していて。【恋文】は1度盗難事件に遭っています」

「知ってるぜ」とケンイチの合の手は、ハイ！と手をあげる小学生のタイミングだ。

「オレも昔、【恋文】の贋作を見たことがあった。その宣伝ビラにあった事件だ。どこかのバカが【恋文】を盗んでボランティアに使うおうとしたって話だ。管理人はそれを知らないかな？」

「ボランティア！そうねえ？」

陽子は苦笑しながら、もっぱらメモに目を落とす感じになっていた。

「ヤクザ屋さんが言っているのは…失礼、ヤクザ屋さん？でもホントだし、コホン。1971年、ベルギーで発生した義賊「テイル」による【恋文】盗難事件…。義賊「テイル」というのはベルギー版のねずみ小僧みたいなものかしら？」

「義賊「テイル」の本名は、マリオ・ピエール・ロイマンス。男性、21歳、ベルギー人。…彼はブリュッセルで【恋文】を盗み出してそれを楯にしてオランダ、ベルギー両政府にとんでもない要求を突きつけた。絵画を返してほしくば、東パキスタンの難民を救済せよ。当時の金額にして実に400万ドル！もの支援要求。…盗んだ手口はハチャメチャで、なんとナイフで画枠からキャンバスを切り取り、絵画をポケットにねじ込み逃走 結果【恋文】は致命的な損傷をこ

うむった」

陽子がメモから顔を上げて、凄くない？

ケンイチはそうだそうだと相槌しながら、ふふんと鼻を鳴らして。

「後日談があるんじゃないか？オレが知っている話では、その後、犯人はバカなヒーローになった」

「バカな？ヒーローですか？」

ここで、食べる専門の管理人が疑念を挟む。オヤ？見ると管理人の半径1メートルエリアの料理が、跡形もなく片付いている、さすが管理人、ヤツタゾ怪獣とケンイチ内心で大喝采しつつ「当たり前だ。身代金で難民の支援だぞ、ボランティアだろ、バカだけどヒーローだろ？」

それを説明します、と受け取る陽子だった。

「ヒーローなのかどうかは良く分からないんだけど。義賊「テイル」ことロイマンズは、程なく当局によって逮捕された。ところが彼は、自分は無罪だと主張、監獄からメッセージを発し始めた「きつとフェルメールなら、自らの作品を貧しい人々を救う為に使っただろう」と。かくして、マスコミを巻き込んで、当時のベルギー国内は大騒ぎになった。有罪か無罪か、賛否両論真つ二つ。結局世論はロイマンズに味方して、彼は6ヶ月で保釈になった、事実上の無罪放免です。ロイマンズ青年は【恋文】を損傷させた事にも悪びれず後日、友人にこう語った「どんな高価な絵画よりも、人ひとりの命のほうがるかに尊い」と」

これが事件の全容ですと、もうおどけてしまう陽子だ。ケンイチはニヤニヤして、どうだと言わんばかりの顔を管理人に向けた。

「バカバカしい話だろ？でも天晴れだ、そんないわくつきの名画なんだ」トーンを落とし「それなのに、これが此処にあると言い張る奴がいる。本物の【恋文】^{オリジナル}が日本国内に？名も知れない山中のこの美術館にある…」

もちろん、からかうケンイチだったのだ。実はいつしかケンイチは、絵画の真偽にこだわりを感じなくなっていた。美術館で過ごす中で、それは一つも重要な事ではない。むしろそれよりもそれがチヨイスされた事に意義があつたと、そこが上手く説明出来ないのだが。

管理人は真面目な顔で未だ反論しようとするので、ケンイチは冗談だ気にするなど慌てて、からかってゴメンナサイの反省色の笑顔を作った。

「いいんじゃないのか、本物、ニセモノとか。結局、価値観の矛盾を事件が衝いてる。その「テイル」って奴の言い分なら、絵の価値なんてクソ食らえて事じゃねーのか」

ここで、陽子は真面目な顔になったのである。おもむろだった。

「私は、本物だと思う」

彼女はもうおどけていない。ピクニックムードの雰囲気がいや、場面は本当にピクニックだが、少し変わっていた。

@参考「盗まれたフェルメール」朽木ゆり子・新潮社（新潮選書）

季節の変わり目を迎える杉の並木は、新緑の勢いが退き褪せた緑の回廊として丘の輪郭を沿う。此処から伺うのなら水晶町は、垣間見えるヒノキの色の裾野にある。山脈という遠くの黒い濃緑は、紅葉を予感させるそれぞれに違いやがて群青くんじょうとなつて迫り、背後の林を成し丘の一面にも変わり、三方に流れていくのである。

陽子が美しく背筋を伸ばし、いつとき眺めていたそれは、芝の高さから始まる競り上がり拡がり至ろうとするつかのまの空だった、視線は遙かに投げられている…

「美術館の調査打ち切りは、上からの圧力でした」

静かな調子は流れる。察して、ケンイチと管理人は耳を傾けている。

「まだ、経過報告も正式なものじゃなかったのに、突然、中央官僚局長クラス、雲の上から中止命令が発せられ、調査が差し止められました、訓戒付き。それでもキャリアの雛ひなだから、それなりの救済で早めの尊重？だったのかもしれないです」

「この美術館に対する追及は、中央各省庁にとってタブーだったようです。だって洩れ聞いた話では、今回敏感に反応したのは、外務省、経済産業省、なぜか公安エトセトラ」

「外務省については分かる気がします。父のか細い外交ルートに絡め、知り合いがマスコミにいたので直接オランダ側に当たってみる模索もしたから」

「オランダ側の見解は、メールながら責任ある立場の方からいただきました。公式には有り得ない話だ。但し非公式には、事実を隠し通し十分な対価、経済支援が約束されるのなら…魅力的な話ではある」

「古い絵画は保管・修復という部分で手がかかり、相当の経費が必要でそれが常に頭痛の種だ。だから見返りが期待できる資本家・経済団体が長期間レンタルしてくれれば（いつそ極秘裏に売り払えれば）どんなに助かるか。（どう転んでも我々には本所蔵という錦の旗がある。偽りの贋作であっても一般の観光観料を得ることが出来るであろうから問題はない…）回答の内容は非公式を連発しつつ、そんな本音を明かすものでした。興冷める話だけど、現場は名画のロマンなどなく実務的ね。そしてそんなメールのタイトルは『真実を知らんとする者は、智者が愚者の一方である』^{（ことわざ）}という諺でした。何かを匂わせているのかしら？」

「要約すると。通産、公安まで動く理由はわからないけれど、ともかく中央の高級官僚の一握りは、この美術館の取り扱いに随分慎重になっている。そしてオランダの本所蔵側もお茶を濁すのなら。超貴重なフェルメールの【恋文】でさえニセモノと言いつつ切れない、と私は思います」

語り始め役人の講釈を思わせたが、後半は思いの暖かい、ここにいるゲストの陽子だった。

ここまでをどう思う？と、思慮に光る瞳がケンイチと管理人に向けられる。

肩をすくめ、考えあぐねている左右の男達だった。

ケンイチはおぼろなイメージで、色々な連中が何か隠してる状況を描いてみる。暗躍する役人とは、と見当もつかないが隠すという事は、只事でない秘密があるのだ、だとすると？

「【恋文】は本物か？」

陽子はコクリと頷き受け取って、さらに洞察の光を瞳に浮かべてみせた。

「それ位なら、それでも推定を助ける状況証拠に過ぎません。私が強く本物だと確信するのは、オーディオと絵画の不思議な共通点です」

ケンイチも管理人も、えっ？と意外な顔をする。共通点？比べられないと言っていなかったか。

「簡単には比べられません。共通点というのは、重ねますが体験した筈です、五感の連動です」

解らないでしょう、だから説明する、身振り手振りを沿えて「耳で聴いて、目に映る、目の前には何も無い、という情報に、さらに耳が不足情報を補う、映像が鮮明になる…」

今度は、胸を両手で押さえて「絵を見る、心がザワザワする、何かの感覚が補完をする、心がザワザワ…」

思わずケンイチの口から「似テイル」とこぼれる。意図せずこぼれた、パズルのピースのばらばらの文字列…

似ている。プロセスが違うが、最終的には心がざわつくのだ。絵画

の場合は、目で見て：他の五感が情報を助け、待てよ、助けてくれる何かの感覚と陽子は言った、それは何だ。

ケンイチの目が問い管理人の瞳が、やはり陽子に視線を注ぐ。

「第六感です。それに似た何かが騒いでるんです」

男達はようやく、ここでしてやったりのガッツポーズを見せるこの西野陽子が、これを告げるがためにピクニックを画策し、苦労したたろう程の料理を用意しこんなシーンを演出したのだ、と知った。

「第六感：虫の知らせ、か？」

ケンイチが、か？を強調する。

シックス・センスなら、と管理人がケンイチに応じる。

「それなら、靈感や霊能力の類たくいでしょうか？」

管理人はケンイチを指差し、自分を指差し「？」「首をかしげて「私には、靈感なんてありません。ないでしょう？」

ケンイチは「うん、管理人に靈感は無しだ、ナッシング、鈍感だし」

はあ？と嬉しそうな管理人だ。片眉が上がり、ケンイチに食いつきそうになり、それは陽子の「そこまで」と両手を広げたゼスチャーで制せられる。陽子はかわるがわる2人をにらみつけ、脱線ムードを真面目モードに引き寄せた「まったく」

「虫の知らせや、靈感はあながち遠いとは言いません。絵のイメージを霊媒師などは違うイメージで見ると聞いた事があります。但し今回は違います。皆がざわざわするでしょう、一様に？私にだって靈感なんてないわ」

じゃあ、何で、どうして？

2人の好奇心旺盛なでっかい子供が、新米の先生を問い詰めている構図のようだ。困って笑い出す陽子は？新米教師で自信がない。

「私にも解らないんです。ただ聴覚や視覚のように、誰にでも普通にあるんだけど、まだ知られていない未知のの感覚？じゃないでしょうか。それが活発になる仕組みが絵画であり、あのオーディオです」

「単純に、趣味や話題性に任せてフェルメールなら、有名な作品【真珠の耳飾りの少女】などでもおかしくはない。でも「テイルの義賊」のような秘められたエピソードが、その第六感を刺激する為に必要だったなら、それこそ贗作じゃ意味が無い。第六感に関連有りとした時、やっぱり【恋文】は本物じゃないといけない」

考え込む空気が漂う。陽子の思案顔は続く。

「公安が動くのは、犯罪の事件性があるから？不法ルート of 違法な展示？けれども、税法上は本物に見合うだけ税金が事実納められているし、その点で曇り一つ無い。そもそも始めから管理人さんは本物だと公明正大に主張されている訳だし」

「それにオーディオから推測すると、あのシステムはとても柔らかいわ。お金さえかければ、似た事は出来る。極細レベルまで計測し出力を理論値上で管理すれば。でもそんな冷たいシステムじゃない。真逆の暖かい仕組みを突き詰めた、まるで一本の張弦の上の偶然の自立独楽こま：そんな在り様ようを当てはめるのなら【恋文】も決して冷徹な選択で展示されていない筈。犯罪のような暗い陰かげじゃなくて、知的で善意的な陽の光のようなイメージ…」

ここでケンイチが、いいかげんにうんざりだ風にため息をついた。

陽子と管理人を交互に眺めて「さっぱり解らねー」と、手に負えない

いものを放り投げる仕草をして。

「役人さん、いや、西野さん？アンタ自身はどうなんだ」

「え？」

「オーディオとか、良かったじゃねーか、素晴らしかったじゃねーか？つまり、本物だニセモノだとか、仕組みは、目的は？そんな裏事情ばかりじゃなくて。ここが善いのか悪いのか、作品達が何をアンタに語ったのか…素直にアンタがどう感じたのか、それが大事なじゃねーのか？」

「それは、そうですね」

それで押し黙る陽子。

ケンイチは次に管理人に目をやって…目を合わせないようにして、大汗なのか？な管理人には、軽く舌打ちになっていた。

（なんでこんな、ややこしい美術館なんだよ？）

どうやら此処は、本物らしきをズラリと並べて、靈感ゲームをする美術館らしい。

カラクリを説明する管理人と、やっぱり文句の一つも言いたくなるが、しばらく同じ時間を過ごして、管理人が隠し事の出来ない人間だと知っている、では管理人もまた被害者か？この男は（こんな不思議な環境の中で）何の疑問も持たずにつつとここにいたのか、素直に？

それも何となく判り、何となく笑えた。善意的な陽の光でという陽子のイメージが、管理人に対するケンイチのイメージと重なった。善意の陽のあたる丘で、せっせと芝を刈るフカフカ・モコモコ熊イコール管理人…

口を開いたケンイチだったが、彼に答えなど無い、ぼんやりと苦笑うしかなく「オレは、個人的には善いと思うぞ。スゲー、素晴らしいかもな。本物ならなおさら凄いけど、凄すぎて…だんだんよく分からなくなってきた」

「【恋文】に感動したかどうか、私の意見を言います」

ここで遠慮がちに切り出す陽子だ。いつしか彼女はその視線を、まっすぐケンイチに向けていた。なぜか、以前のように少し怒気を含んで。

「ヤクザ屋さん、お名前は？」

怒気にたじろぐケンイチは（そういえば、今初めて名前を聞かれたナ、こんちくしょう）で。

ひと呼吸置き「ケンイチだ」と苦虫をかみ潰し答えるが、つつけんどんにひるまない陽子の視線。

「じゃあ、ケンイチさん」

まっすぐだがふいに、彼女の視線の緊張が緩んだ、いや、むしろ崩れたのである。

「貴方は、心で「絵」を見るのと言った、驚いたわ。父も同じ事

を言うの。「音楽」は心で聴く物だって、それが口癖で。理由は簡単だわ。そうしないと本質を見失ってしまう、大切な物を見落としてしまうから。私は父を尊敬しています。周りの人は、父はただ趣味に没頭している変わり者、だから人も羨む勤め先なのに偉くなれないんだって笑うけれど、私は知っている。父は病気で私の母を、妻を失って没頭するしかなかった。母も愛した音楽に面影を追うしかなかった。父がついに到達したそれは、凝^{こじ}って透明で澄み切っていた…それは最愛でした。正直に言います。あの日貴方に言われて【恋文】を見た時、私はざわざわしたわ。感動して足が震えてさえた、だから、腹が立った。何故簡単に貴方に分かるのか、それが悔しくて。何故簡単に貴方が笑うのか、それが許せなくて。だから言います。ケンイチさん、貴方本当にヤクザなの？貴方は似合っていない、全然似合っていないのに」

陽子の言葉に押され、どきまぎになり（オレ、なんちゅー事を言われてる？）のケンイチだったが。

訴える陽子に、敵意など微塵^{みじん}も感じない、むしろ思いやりが痛いほど胸に刺さる。彼女の言葉は諭^{さと}す調子でいつしか、震えていないか？

心が悲鳴を上げている…

中編・10 中編の終り

ケンイチは目を泳がせていた。

「そう言われても、なあ？」と、目で救いを求めても管理人は無言で、2人の成り行きを見守っている。

「ヤクザ者つてのも辛いんです、みなさん」

そんなケンイチの声も明るい振舞いも、場はウケない。ふん、判つてたよ。

ケンイチは陽子の哀しげな瞳を見る。管理人にも目をやって、くそっコイツまでなんで哀しげだ？そして笑って、笑うしかなくて…自責になる、わかった悪かったよと自嘲する、仕方が無い。

彼は首を傾^{かじ}げて陽子に笑ってみせて、改めてポットのお茶を「ドウゾ」と彼女に勧めてから。

「あのな」

「…はい」と蒼ざめる陽子は、あれ？きよとんとする。ケンイチの、素の微笑みが柔らかく彼女に向けられていたのだ。

「ヨーコさん？」と言うケンイチは、優しい、なんで？陽子の瞳から、涙がこぼれる。泣くなというケンイチの笑顔が頬に触れたような、そんな錯覚を3人が感じた。

「お父さんは、元気なのか？」

ニッコリのケンイチに、ややあつて何だか我に帰ったような陽子「え？」

彼女の頬に、ぱつと花が散る、明るく紅がさす。

「はい！」

場違いに元気いっぱい。西野陽子 ヨーコさんの満面が涙でくちやくちや、笑み爆発、となった。ヤツタ、笑ったな。

赤面になるケンイチ。関係ないが赤面する管理人。首から上を真つ赤にした西野陽子は「私だってこの美術館は凄いです、いいえ…大好きです！ × …」本当にインテリか？

さて、場に子供が一人増えて3人になった。

ケンイチが肩をすくめると管理人は笑う、居心地が良さそうに笑って彼は「私も言わせてもらえば…」

ケンイチはおや？と思う。管理人が自ら話す？こんなタイミングだったか？

「管理側として恥ずかしいですが、実は私も長年悩んでいた処です。本物だと聞かされています、世界的な名画の管理ですが。私はただ管理しているだけ、これらを守って何の意味があるのか？けれども意味はあつたようです。お2人を見ていても思いますが、何か晴ればれとした気持ちです。ここは本当に奇跡の美術館なのです」

管理人がそれを言うか、と突っ込みたいケンイチは（また奇跡か？）

その言葉で何でも解決だな、管理人？と、笑うのだった。

ヨーコは管理人の肩をばしばし叩いていた、先ほどからずっとだ。

「細かい事はもういいですね、此処って本当に奇跡です、私達は幸せなんです」

ヨーコさんキャラ変わってますアナタ、とさすがに管理人も手を焼くが。でも、確かにもういいんだ管理人。細かい事は抜きにして（いや細かいくないし、抜きにしてもいいのか、度が過ぎてるゾこの話）ここは本物だらけの世界一だ。そういえば管理人、アンタも世界一だったな、武道だろ、立派な芸術じゃないか？（ケンイチの深い心）

あらかた料理は片付いている、いや・いない。デザート、ケーキの山が残っていた。得体の知れない例えば洗面器位のパイ？ラザニアかも？から大きな伊勢海老が顔を出しているやつとか…何だコレ？

3人はつべこべ言いながらデザートを処理するが、会話は弾んだ。

「問題です…：シーンはアフリカを想像してね？川にカバがいます。擬人法です。逆立ちをするカバをバカにするカバはバカかカバか、さあどっちだ？」

「答え、熊だけどバカなら管理人デス」

「熊？私をバカにするカバ野郎はケンイチさんです」

「きゃはは、意味わかんないですが2人共バカみたいだから正解です！」

ピクニックもこんな具合にできばきと片付いていく…

結局、西野陽子は終日美術館にいた。

彼女は、午後からゆっくりと一つ一つの絵画を鑑賞し何度も泣き、音楽を楽しみ何度も微笑んだ。3Fフロアの書籍に目を通し、何度も感嘆した。

そして日も沈む頃、ようやくまた次の日曜日に遊びに来ると言い残して、帰っていったのである。

管理人と共に片手を上げて陽子を見送りながら、大男の横顔を見てふと我に返ったケンイチだった。

(オレはこの男と、何をやっている?)

美術館の夕暮れは、美しかった。

後編・栞（しおり）

ケンイチは石畳のメインストリートを、なだらかな坂道を歩く。

日に何度かの食事の為に、時には街なかを何となく散策もして、美術館と水晶の街を繋ぐ石畳を歩き来する。

風が強い時は足早に、穏やかな日和には道草するように歩む事もある。

曇りがちな日の切れ々の雲は、霧のような淡い輪郭で地表に近い部分は暗く重そうに、空を覗かせる様々な切れ目を白金色に光らせて、空とは呼べない低い宙を羊の群れ達のように前をつついて進む。

晴れ澄んだ日の空は、濃くなった空気が透明に輝き、青空の色は彼方からやって来て、かすみから水色へ青にと拡がり、遂に大気の外 of 漆黒も示唆する群青域にまで伸びて、頭上を過ぎ去り越えていく。

ケンイチと管理人が連れだつ事もあり。

ケンイチが立ち止まって空を仰ぐと、管理人も決まって立ち止り預かり受けて空に目をやり、その高さを測るように目を細める。

ケンイチは深呼吸のなかでふぁと声を洩らし、しきりに瞬きをまはたして。

「…高っけーな、空」

こんな日々にこんな場面が幾度か有る。この物語の栞しおりのように…

後編・1

ケンイチが水晶の街へ食事に通うようになってから暫くすると、美術館へ来館者がやって来るようになった。その多くは水晶の街の住人だ。

管理人が言うには水晶の街の人々は美術館の常連で、彼らが訪問を控えていたのは、美術館に滞在するケンイチ 新しいゲストに、気遣いをしての事だったらしい。

気遣いは、新しいゲストが美術館に慣れるまでそつとしておこう、概ねそんなところだ。

但し、関心は隠せない。ゲストはどんな人だろう？街の雰囲気のような、メインストリートの空気には、住人達の好奇心があちこちにあつて。食堂の女主人の流す「いい男だよ？」というウワサは良い風に働いて。

ケンイチが街を行けば、路地を歩けば、ひよこつと店先に顔を出せば、必ず誰かの明るい声が掛かる。

街の住人が見せる暖かな眼差しは、はじめ面食らっていたケンイチの心を次第に懐柔して。いつしかケンイチのぶっきらぼうな態度に笑顔が滲むようになり、それなら元々気さくなケンイチだ、程なく彼の周りに人の笑う声が集まる処となった。

ある日など気が付くと、ケンイチは両手一杯に野菜や果物や魚だのと、街のお土産を美術館に持ち帰ることもあり。

そんな頃には、ケンイチに対する街の気遣いも霧散したのだ…

「日に、どれ位人間が来る？」

「コンスタントに、日に10人位でしょうか」

そう答える管理人はケロリとしている。

デコボコの2人を可笑しそうに笑って会釈する婦人に、軽く手を上げて答えながらケンイチは、管理人に口をとがらせた。

昨日も来た、よく見かけるようになった水晶の街の婦人達のグループが訪問してきた、午後のひと時である。

なるほど、来館者は増えてきた。しかしとケンイチはいぶかしがる。来館者は日に多くても十数人というところか。【恋文】が本物かも知れないのに「もう、笑えん」とケンイチ。

「よく、それでやっていけるな。まるでボランティアだな」

「ボランティア？そうですなえ」

管理人は苦笑するが、ケンイチの苦言には理由がある。驚くべき事に、美術館は無料で開放されている。もう断言してしまおう、本物の【恋文】が、この美術館はなんとタダ見なのだ。

「ここは開き直りましょう、正確に、まさに、此処はボランティアです」

管理人は「給料はしつかりいただいていますので、問題はありませ
ん」と言い添え、涼しい顔をしている。

世には様々な美術館がある。公営美術館からハウスミュージアム。
運営形態は様々だろうが、それでもそれぞれに所蔵する作品の宣伝
をし、観料を稼ぎ寄付を得るなどして、採算の取れる運営をするの
だろう。

だが、そんな常識でこの美術館を測るが出来ない。そもそも、測ろ
うとする事が間違いかもされない。ここでは数え切れない程の奇跡
がある。経費とか費用とかそれを心配する必要がない奇跡も、その
一部なのだ。

「有り得ねー、こんな美術館」

ケンイチは論議するでもなくそう呟いて口をつぐんだ、笑みを浮か
べて。

結局ケンイチの頭では理解できない。最後にはバカバカしくなって
笑ってしまっ…

ふーん、半年に一度の或る日の日曜日？美術館に水晶の街の住人
が集まってくる？

管理人に言わせると、それがさあ大変「美術館・大掃除の日」だそ
うだ。

それが今日なんだってさ。

「何だソレ？」

正午を過ぎると、既に多くの人々でにぎやかになってしまった美術館1フロビーだ。

ケンイチが目を丸くしていると、管理人は「いつの間にか、そうになりました」と、苦笑して。

「皆さんは自由に行動されています。私に止める事は出来ませんし、大変助かりますからむしろ喜ばしい事です」

今日は、丁度ピクニックから7日目にあたる。つまりこの日が陽子が次に来ると言っていた「次の日曜日」で。

天気は快晴、ピクニック日和、もうその昼下がりがりじゃないか。

いつしかロビーから人が溢れ、それぞれ持ち場を決めた人々が、芝生の丘のあちこちに散って清掃やら、芝の手入れを始めている。館内と周辺を合わせて500人は下らない、何だ、何だ、何でこんなに人が集まる？とケンイチが焦るそんな中。

何も知らない西野陽子が、ノコノコやってくるのだった。

ミニ・クーパーは敷地の小路を昇ってくる。それは徐行して様子を伺う感じになり、やがてためらいがちに停車する。

「き、今日は…何ですか？あれ、あれね？」

それが車から降り立った陽子の第一声だ。それはともかく。

そのいでたちはなんと、フリルがたくさんついたハデな赤いパーティードレスに、お似合いの赤いハイヒール。

嫌な予感がして、玄関周りの雑巾がけをしていた頬かむりのケンイチは、それを目にしてギャー！雑巾を落とす。

もちろん、なんですか？と出てきたこれも頬かむりの管理人がヒョエー！バケツを落とす。

うす汚れた作業服や、草むしり用の軽装や、運動靴、草刈釜、ビニール袋、タオルで頬かむり…その群集の中に、迷い込んだよそ行き衣装の可憐な赤い花が一輪。

500人近い衆目が固まってしまった。さらさらと芝を渡る風が吹き、丘は更に静まり返る。

よりによって今日はお洒落して来たんだナ、と冷や汗のケンイチと管理人。立ちすくむ西野陽子の瞳は気配を察して瞳孔が開いたまま。さてどうする？これだけのギャラリー、よっぼどの芸人でも切り抜けれんゾ…

すると、何かひそひそ声が聞こえてくる。(ゲストさん…悪い)(ケンイチさん…ひどい)

「？」

次第にヒソヒソした波が、はっきりと声になってケンイチに押し寄せてくる。

(ケンイチさんが悪い) (何故教えてあげなかった?) (連絡不足)
(冷酷) (サイテー)

水晶の街の皆さんの非難の波。

「ちょっと待て、なんでオレが」

「プ。ケンイチさん?この場を誤魔化すには、貴方が一発芸でも披露しないと?」

管理人が分かったような発言をすると。

(管理人さんも悪い) (何故教えてあげなかった?) (連絡不足)
(デカブツ) (ゴリラ)

水晶の街の皆さんの中傷の波。

「ちよつ、ナゼ私が」

うろたえている2人の間をちびっ子2人がすり抜けて、陽子の元に走っていく。

「ゲストのヨーコねーさんでしょ?」

「わーい ヨーコさんっだ」

おお、新しいゲスト・ヨーコさんは管理人がブログで紹介済みだったな?ともかく無垢な子供達ならこの現状を打破するかもと思いきや。

ちびっ子は連携してフェイントをかけ、見事に西野陽子のスカートめくりに成功した。

彼女の悲鳴とちびっ子の歓声が交錯し、群集からどよめきが起こる。

「くうら〜、小僧ども〜っ!!!」

ヨーコさんがちびっ子2人を投げ飛ばすと、転がった2人は？果たして芝生が気持ち良かったのか、嬉しそうにキャツキャと笑っている。

その光景にクスツと、誰かが笑う。人垣の中の隣人が、後方が笑い始める。

男達にすれば、赤いドレスの陽子はもうそれだけでカワイコちゃんのお気に入りだ。女性達にしても、派手に見えちゃった下着が未だ少女風だったので、好印象。老人達には？元氣良く子供を投げ飛ばした陽子が、ひと時で子供と打ち解けたように思えて。

どつと笑いが起こる。

ケンイチと共に加わった新しいゲスト・ヨーコさんは皆に歓迎された。笑顔の「美術館・大掃除の日」は、ここから始まったのである。ところで？ケンイチと管理人は罵り合っていた。

なんだ、管理人は街の名士じゃねーのか、ケンイチさん人気もかた無しですね、何だと、何ですか、ぶんすか！

さてどうしたもんだかなと、ケンイチが行動を考えている間も無く、1Fロビーのモップ掛けが始まった。バケツに掃除モップのご婦人数人が「はい、ケンイチさん邪魔です」

白い床面が、ピカピカに磨き上げられていく。ワックス掛けの準備もされて、水拭きの終わった端から始めるらしい。

管理人が、ケンイチを手招きする「ケンイチさんは、絵画の清掃を手伝って下さい」

管理人の求めに階段を上ろうとしたケンイチは、水バケツと掃除道具を抱えた西野陽子が、管理人室の廊下から現れた事に気が付いた。

彼女は賑やかな婦人達に囲まれ、ちやほやされていた。

管理人室は、洗面台からいくつか水ホースが取られ、豊場は参加している住人達の手荷物で一杯で（そこに管理人のプライバシーなど無い）そこで清掃用の軽装にすっかり着替え（婦人達が用意してくれた、パステルブルーのスクール・ジャージのズボンに、白いジヨングシユーズ、ドラえもんパーカーをまとって）フロアに現れたヨーコさんは、カラカラ笑っていた。

ケンイチが肩をすくめてみせると、彼女もケンイチに気付いて、赤面で嬉しそうに笑みを返す。

横で「よ！」と手を上げるのは、食堂の女主人だ。彼女は早速、ヨーコさんを手なずけたらしい。

ワイワイガヤガヤのそんな婦人のグループが、玄関から外回りの壁面の雑巾掛けを開始する様子を見て、2Fフロアから首を覗かせて管理人も笑っている。

ケンイチと管理人は上と下で額じゆき合い、良かったナと同時に呟つぶやいていた。

(ヨーコさんは、キャリアの役人なのに、いいのだろうか?)

住人に違和感なく溶け込み、女子中学生のシルエットで雑巾掛けをしている西野陽子は、出世を約束されて地方に出向した国税局キヤリアの端くれの、今日はドレスでやって来た、受難の婦女子だ。

絵画の劣化を防止するために、この額縁は色々工夫されています、と管理人が言ったセリフを思い出しながら、ケンイチは軽くひと息入れた。慎重に絵画―額縁をパネルに戻す。

始め、額縁を無造作に雑巾掛けする管理人に「オイオイ、そんな乱暴な」

咎とがめだてするケンイチに「大丈夫です、絵画保管という点で、この美術館は世界最高レベルです」と、管理人。

額縁の工夫には、主に2つある。

表面ガラスと呼吸をする額縁だ。表面ガラスは、極めて細いガラス繊維で織り込まれた薄い膜を何層か重ねたガラス板で、反射が低く

押さえられ、透明度が高く、軽量かつ頑丈、空気分子だけ透過するという…ともかくハイテクガラスらしい。

「ちょっとした防弾ガラスと同じ性能らしいですが、主な目的は光学的な劣化の防止です」

「光学的な劣化の防止ねえ、ほほう？素晴らしい」

ケンイチは解らないのに感心。

額縁は、木目が塗装されたチタン製で、湿度や、額縁内部の雰囲気成分を調整する装置を内蔵し、なんと勝手に呼吸するのだそうだ。

「少々の火災なら、1000の雰囲気下でも、内部は25の快適空間…だとか」

自慢をする管理人の語調が弱まるのは、説明書にそう書いてありまして、なので詳しい事は解らない。考え込む2人…ともかく2フロアの絵画の清掃作業を始めよう。

と、作業はてきぱき進んだ。

額縁は確かに軽量で、さすがに大型の絵画は、全体がそこそこに重く、そこは数人がかりだったが、パネルから取り外し、取り付ける作業は簡単だ。

ガラス面ををごしごしと磨き、全体を軽く雑巾で拭き上げる。2人コンビだったり、手分けになったり。

小1時間もすると、2Fに展示される絵画の清掃はあらかた片付

いていた。

管理人は先刻、フロア作業のめどがついたと見てとり「私は屋外へと、姿を消している。」

ケンイチは中くらいの脚立の天板に座り、コイツは俺が最後に、と残っていた【恋文】を膝に抱え、ハアーツと息をあてて雑巾掛けをしながら、ガラスの壁越しに広がる屋外の様子に目をやった。

秋の青空の午後であった。広い芝生の丘中に散る、水晶の街の住人達の姿が見下ろせる…

芝刈りをしている男達、芝の根がらみを手入れする婦人、刈られた芝を集める者。子供達は手伝ったりそこら中を走り回ったり、交歓の声が聞こえてきそつだ。

美術館を中心にして、作業をこなしていく人々の輪、それは徐々に確実に広がる。賑やかな中にも肅々（しゆくしゆく）と手を休めない、厳粛な空気感がある。

勝手に始められた行事だと、管理人が言ったが。

ケンイチは、ただのボランティアと括れない住人達のひたむきな姿に、根底に連帯と共通した真面目さを感じ、何となく無私な巡礼者達が聖地に集うというイメージを、光景に重ねていた。

メツカやエルサレム、ベナレス。聖地と呼ばれる彼の場所では。

彼の地に集まる巡礼の人々がモスクや城壁、その聖域に額を着け五体を投げ伏して、悲哀を嘆きその心を洗い祈る。

もちろん、ケンイチが見渡すこの丘に嘆きなどはない。未明の蒼白い空の下で、祈りの声が空気を震わせる事も無いし、迫る夕闇にかき消えていく悲嘆の姿など、ありはしない。

ケンイチが感じるのは、重々しい趣と同じように在る筈の、聖地の牧歌的な雰囲気だろうか。ようやく巡り着いた約束の地には、一方で同時に、巡礼者達が彼の地で彼岸に立ち見つけた希望と、その足元の泥水にさえ美しさを見いだす喜びが在り、満ちるのだ。それは賑やかで賑かで、清々としながら時には喧騒であろう。

ケンイチはつかの間の時、異世界めいた丘の風情に心を奪われていたのである。

「おーい、ケンイチさん」

ふいに階下からの呼び声に我に帰る。気が付くと、西野陽子が玄関口で飛び跳ね、おいでおいでとやっついて。

ケンイチは【恋文】手早くを拭き上げて、額縁をパネルに固定し脚立から降り去ったのだが、この時彼は、固定金具の一部を掛け損ねていた。

これが後々、ちょっとした騒ぎの種となる…

「ハイ、ケンイチさんの焼きそば」

わーい、焼きそばだ！と嬉しくもあり、通常の3倍の量に途端に悲しくもなり、ケンイチは西野陽子から大皿を受け取る。

ケンイチが丘に出てみると、美術館のすぐ横には天幕型のテントが2張り立てられ、食堂の女主人と女性達が屋台風の急ごしらえのセットで、バカバカしいまでの、大量の焼きそばを調理していた。

軽トラックに野菜の山、調味料に、うず高く積まれたそば玉は500人越え分か？

「お祭りか？」

賑やかなテントの周辺だ、もちろんケンイチもその中にいる一人だった。

管理人は？おお、テントの横で食ってる喰ってる、いや、喰わされてる？珍しく泣かされてるゾ。

パイプ椅子に座る管理人の周りには、普段は会社のOLさんだろう風の若い女性が集まり、モテモテ中かと思いきや、女性達はいたずらっぽい笑みを浮かべ、ワクワクドキドキの瞳で彼を見守っている。

管理人は、大皿の焼きそばをペロリと平らげる、すると女性達が矢継ぎ早に次の焼きそばを継ぎ足すという、いわばワンコ焼きそば状

態に拘束され、食べ強いられている？

さしもの管理人もあがいていた。どんなバカならそんな目に遭う、恐ろしい。

「いつそ、出店でも出すといいんだけどね！」とは、食堂の女主人だ。

派手に油を焼く音をさせて、周りにそう告げる女主人の料理の手際は、見事というより曲芸士のようだ。こん棒を自在に両手の宙に舞わせる巧みさで、豊半豊ほどもある鉄板の上のどっさりと量のある焼きそばが、ザックリ軽快に炒め揚げられている。

丘の向こうから、笑顔でこちらに帰ってくるグループがいる。さて、と中座した作業にまた戻る者達もいる。

騒々しい中、ケンイチの横にはいつの間にか西野陽子がいた。

先程までは、人込みの中で忙しく給仕していた陽子だったが、自分のポジションは此処だといわんばかりに、極当たり前にケンイチの横で、小皿に中盛の焼きそばをつついて「おいしいネ」

ケンイチと陽子は、人が集まるテントに背を向けなるべく目立たないようにして、焼きそばにありついていてた。立食だった。

お喋りはもごもごと、焼きそばをほおばりながらだ。

「もぐもぐ、ヨーコさん、似合ってるな？ ジャージ姿も」

「もぐ、借りたんです」

照れて、服装を眺め見せて「あ、ジャージ姿も？それってどういう意味ですか！」

「だから、ソレワ」

お互いに、赤いドレスについて言っているのだ。西野陽子は恥ずかしかったと、ケンイチはなかなか良かったと。

「意外に似合ってた、つーか孫にも衣装というか」

「あ、それってどういう意味ですか！」

と、このように口論でない照れ隠しのつつき合い。

「もご、だから、ドレスも良かったゾって言ってんだよ」

「よく見てないくせに」

（にゃあー）

「見るも何も。見たかったが、さっさと着替えたのは、ヨコさんじゃねーか」

「そういう状況じゃないでしょう、え？…見たかった？」

（にゃあー）

何だか会話にネコの声の合の手が入ってくる？気付くと、2人の周りをチビッコ達の集団が取り巻いていた。

今やケンイチは街の人気者だが、特に子供達には絶大な人気がある。チビッコのリーダーらしい 確か風太といって、ケンイチがいたったか、道すがらにキャッチボールに付き合ってた小6の男の子が「ケンイチ、みんなを紹介するよ？コッチから、ケンちゃん、雄二、ヒロシ、よっちゃん」と、勝手に友達紹介を始め、その中ののんちゃんという小さな女の子がいて、彼女が子猫を抱えていた。

「ネコ？」

「アメ吉だよ？アメリカン・ショートヘアみたいなの、三毛ネコだよ、男のコです」

のんちゃんはたどたどしく、台本のセリフの棒読みのようにネコの名を紹介をした、とそこでハッと驚き、子供のクセに大人っぽく後ずさる。

ケンイチさん、ヨーコネエさん。魂を抜かれた中毒患者ジャンキーみたいなのアメ吉を見つめているよ？

子供達は更にみんなでギョツとする。こちらを伺い、人ごみの隙間から鋭い眼光を放つ管理人に（口いっぱいから焼きそばを垂らしたままで、幸せそうな恋する瞳で、アメ吉に熱い視線を送る怪人に）気付いたのだ：この物語の主人公3人、ネコ派だ！

アメ吉を中心に、ワイワイガヤガヤとケンイチの周辺が沸いた。何事かと周りが見受けるその光景の印象は、丘の中に咲いた花のような風だった。

焼きそばの振る舞いが終わるとそろそろ、丘の清掃作業も片付き始めていた。

刈り取られた芝は、広大な敷地だけに半端な量ではない。丘のあちこちに刈り草の山が出来て、それを一輪車で運んだり、軽トラックで運んだり。作業の向きが一樣にその流れになる。

ケンイチもしたたかに汗をかき、付近に集められた芝草をスコップで軽トラックの荷台に移していると丘の向こう側が騒がしくなる。視界の先の空に突然、泥の噴水：何だ、何だ？

すぐ先で、一輪車をへ口へ口と押していた西野陽子と子供達も何事かと、動きを止める。

丘の端の方で、泥にまみれた男達が慌てふためいていた。管理人はスプリングラーの修理が残っていると行っていたが、それが壊れたのか？その辺りで、空に向かって泥水が噴き出している…

距離は遠く、また丘から吹き降ろす風向きは逆でこちらに流れていくる気配はない。作業をしていた男達は全身泥を浴びて真っ黒になり、3号爺、管理人、その中に以前食堂で紹介された中村という弁護士もいた。

見ていると彼らはヤケクソになって、子供のように水の掛け合いを始めて。だから初め心配気に見ていたギャラリーからすぐに安堵の声が漏れて。大事ではない様子だ。

吹き上がる泥水は徐々に水しぶきに、完全な透明になる。水は破片となり小さな粒子となって大気に溶けて、彼方の景色を覆うスクリーンとなる。光彩の絨毯^{じゅうたん}が辺り一面で波のように流れ、空のあちこ

ちが七色に輝き始める。

「嘘みたい、綺麗だわ」

西野陽子の言葉を耳にして、ケンイチもそれを見ていた、ただ、正確には。

視界の隅にケンイチが見ていたのは、軽い歓声で手の平を宙にかざし景色を仰ぎ、少し踊るような仕草をする陽子の姿だった。無垢な少女のようで、ふいに美しさを感じて、ケンイチは目を奪われてしまっていたのだ。

遂に管理人と3号爺が、水しぶきの中で体を洗い始めてしまう。すると、ソコでウケた陽子が「可笑しいね！」とケンイチにも煽るの^{あお}で、慌てて笑顔を作り、状況を上手く誤魔化すケンイチだったが。

ケンイチは見とれた事に、気付かれはしないかとヒヤヒヤしたが、彼は女性をよく分かっていない。陽子は背中に拡がる感覚で、既に一切に気付いていた。

（今、ケンイチさんは私に見とれてくれた）

ただ、陽子は嬉しさばかりを感じた訳ではなく、他にも感じるものがあった。

（でも、なぜ、彼は寂しそうなんだろう？）

ケンイチは迂闊^{うかつ}だったのだ。彼は何時も西野陽子に笑って見せるが、時折ふと寂しげに笑っていたのである。

ちょっとした騒ぎ、小さな事件を描こう。

「美術館・大清掃の日」が終わりを告げ、住民達が散会を始めた頃だ。

1Fロビーではなかなか帰らない常連達と、管理人、ケンイチ、西野陽子が歓談をしていた。

泥だらけになった男達はシャワーを浴び、すっかり身づまいを整えてから「えらい目にあった」と笑い合っている。

陽子は、女主人の取り巻きの婦人達に、何だかからかわれていた、もう赤いドレス姿に戻ったからか？

食堂の女主人の軽トラックは、丘の中をあわただしくで行き来していて彼女の姿はそこになく、既に引き上げた様子だ。

やれやれといったケンイチは、入口付近のガラスの壁に体をもたれさせていていた。

そこで鉢合わせになったのは、風太率いるチビッコ達だ。コイツらまだいたのか？子供達、とりわけのんちゃんは、不安そうにキョロキョロとして落ち着かない様子である。

「ケンイチ？アメ吉が…居無いの。ここにいないかなあ」

「？」

ケンイチが膝を折り、のんちゃんを覗き込み、何だつて？ロビーを見回し伺う仕草になり、その空気が伝わると、皆が一様にお喋りを止めて「どうしたんだ？」となった。

「アメ吉が、子猫がいなくなったらしいゾ…」

ロビーが軽いざわめきに包まれる。

婦人の一人が館内で見かけたと呟いたので、探してみようとケンイチが立ち上がると…その耳にかすかに届くネコの鳴き声だ。いつせいに耳を澄ますその場の人間だ、その鳴き声を追うと。

程なくアメ吉は発見された、子猫は2Fロビーで佇む（たたず）んでいた。

アメ吉は、脚立のてっぺんに座り（ケンイチが最後に使っていた脚立だ）【恋文】を眺めており。

ぱっと喜色を浮かべる子供達だが、年長の風太がしつと人差し指を口に当てて、仲間の動きを制する…

アメ吉は、随分静かだった。穏やかな感じで、時々頭を痒かゆそうにムシヤムシヤやって、またひとしきりと【恋文】を眺めている、小さく子猫らしく唸っている。

子供達は顔を見合わせて、変な事を言った。

「ネコが、絵を観ているよ？」

ネコが、絵を鑑賞するだつて？ケンイチはいぶかしく思い、よくよく眺めてみる。すると、まんざらそう見えなくもない、神妙な空気が

を感じる。

名画を観る子猫かい？とニヤリとするケンイチのタイミングで、のんちゃんが我慢出来ず「おーい、アメ吉」

アメ吉は階下の飼い主に気が付いた様子だ、少しうずうずして、一同がまずいと思った瞬間。アメ吉は、ぱっと跳ねて【恋文】にしがみつぎ、立てパネルを蹴り3角跳びで跳躍した。アメ吉の手摺を越えて跳ぶ試みは、ついでにパネルボードから【恋文】を引っぺがし一緒になつて、だ。一同が色を失つた。

ネコが落ちてくる！【恋文】も（時価数百億円も）落ちてくる！

変な声をあげるケンイチ。反応出来たのは、ケンイチ、管理人、西野陽子だった。

3人が慌てふためき、落下点に走るが、床はワックスがよく効いて思うようにいかない。

（くそ！タイミングが…）

飛び込み走りこみ、衝突する3人はなぜかぐちゃぐちゃに絡み合つた、果たして。

子猫を胸にキャッチしたのは、西野陽子だ。【恋文】はケンイチが何とか片手一本、アクロバットでキャッチしていた、無事だ。

ギャラリーから歓声が上がると同時に、ケンイチが寝転んだまま安堵の調子で苦言を吐いた。

「…なんでオマエ達、アメ吉なんだよ？」

ペタリと床に座り込んだ西野陽子は、ネコまっしぐらだった。アメ吉を抱きしめて呆然と答える。

「だって、咄嗟とっさに…ネコに走っちゃった」

陽子の下敷きになったまま、管理人は冷や汗でぐっしょりになり、いまさら【恋文】の無事を喜んでいる。

だが、この大男も走り込んだのも絵画でなくネコの落下点だった。彼も思わず（絵画を守る管理側のクセに）ネコを助けようとしたのだ。

ケンイチの、大きなため息になる。

同じだったからだ。ケンイチも、最期の空中で陽子が無事にアメ吉を救出したと見てから、慌てて死に物狂いで手を伸ばしたに過ぎない、【恋文】が無傷なのは、たまたま運が良かっただけだった。

結局。

「バカバカしいゾみんな、そして、オレ」

人が思わず取る行動に、説明の必要はない。そこから伺い知れるものは、例えば価値や価格という虚飾の向こうにある筈の、物事を包む幾重もの錯覚の中にある、無垢の透明な芯なのだ。

アメ吉はにゃあと鳴く。何かを笑っていたのかい、キミは？

物語には、いくつかエピソードがある。

それを描いておこう。

ある日の事。

ケンイチは夕方のシャワーを終わらせて、濡れた髪をタオルでゴシゴシしごきながら、地階から1Fロビーに顔を出した。

「あのさ、（街の食堂の女主人の）今晚の新作メニューの大盛り秋刀魚丼は、見た目ネコまんまで（猫の御飯で）多分味もネコまんまで、でも美味かったから何て言うか。複雑な気分だ、なあ？管理人」

ガラス壁から何う外の気配に、夕暮の訪れがある。ロビーに満ちる光は、残る日の色から、間接照明やスポットライトより洩れ出るり色味のある白色に、移りゆくようとしている。

管理人は机に座り込んで事務仕事をしており、その姿を卓上のスタンドランプが照らし出している。

いつになく考え込んでいるな？と、管理人に歩み寄るケンイチは、ガラス越しに小路脇に軽トラックが駐車している事に気付いた。食堂の女主人だ、ここに来てるのか？

「食堂の姉さん^{ねえ}？何でこんな時間に？」

管理人は表情も神妙に、ええと、とか、うーむとか、答え難い^{にく}態度

だ。

「先程から、オーディオを使っておられます」と、声を低めに継いで。

「ケンイチさん？あの方のデリケートなプライベートというものがあります。デリカシーを以^もって……」

「は？」

確かに、2Fフロアから音楽が聴こえていた。

（何を言ってる？デリケートとか、デリカシーのない管理人が言うてんじゃねーゾ）

ブツブツ言いながらケンイチは、とりあえず挨拶でもしておこう、と階段を上がっていった。

2Fフロアから見える遠景に森林の眺望があり、丁度水平線に夕陽^{よう}がある。フロアにはまだ残る日の色が差し込み、茜色の霧が満ちる回廊のようだ。

オレンジ色の淡いコントラストの中、静かな気配で音楽に耳を傾けている食堂の女主人が、そこにいた。

「音楽なんて珍しいな？」と、声を掛けるケンイチの足音にも気付かなかつたのだろうか。

女主人は驚いた顔をケンイチに向けて（なんだ、ケンイチさんか？）とそのまま何も言わず、オーディオに注意を戻してしまった。

「？」

普段は陽気で、歯切れよい女主人の筈だが、何だか雰囲気が違うゾ？

ほんの1時間ほど前、ケンイチと管理人は食堂でワイワイやって夕食を終わらせていた。あまり酷ひどくない下ネタありの、下らないバカ話で盛り上がった。それと随分勝手が違う。

彼女は、仕事着の薄汚れたエプロン姿のままで、その手にほうかぶりを握っていて、仕事を仕舞ってそのまま来たのだろうか。もう心地良くなった食堂の料理の匂いを、ケンイチはかすかに感じたような気がした。

「元気がないな、どうしたんだ？」

反応を億劫おっくうがる女主人は、一生懸命に音楽を聴いているのだ。

怪訝になってケンイチは、女主人の前のガラス製の小さなテーブルに目をやった。コツリ、と音楽ディスクのケースを手に取り眺めてみたり。

「…リボルバー、ビートルズか。アビー・ロードじゃないんだな」

やはり、それはもう熱心に音楽に聴き入っている女主人は、しばらく経ってからようやく口を開いた。

「それでいいんだよ」静かな口調で。

「美術館にあるビートルズは、それ一枚きりだし」目を閉じて。

「これが、死んだ主人が好きだったアルバムなんだ」

ケンイチが「えっ？」と、声を漏らす。

口ごもるケンイチに、それを見透かした女主人は軽く微笑した。

「安心しなよ、もうずっと前だ。病気で死んだ、苦しんでもいないし寿命だったのさ」

彼女は語る風でもなく、独り言をポツリ、ポツリと言った。

「私の中にはね？特別な日付がある、それが23日、23のエニグマだ…」

「ある月の23日が主人の誕生日だった。そしてある月の23日に、あの人は死んだ、だから23日 今日特別な日なんだよ」

「病室から眺めた夕日が綺麗な時に、あの人は逝ったんだ。だから夕日が綺麗なうちに、ここでビートルズを聴きたいんだ。こないかげんな私だけど、主人は私を宝物のように大事にしてくれていたんだ」

「…」

ケンイチが悪い質問をしたなという風になる。頭を掻き^{いた}労わるように。

「別にいいじゃねーか？毎日来ればいい。ヨーコさんが言っていたゾ、ここのオーディオはなんだかスゴイらしい」

女主人は頷いて、寂しげに「見えるんだよ」と、ポツリ。

ケンイチは空中に人の姿を描く仕草で「ビートルズが浮かびあがる、
だろう？」と相槌。

「そして、主人が笑っている」

「？」

相槌を封じられるケンイチだ。

「なぜだろうね」

女主人は分からなくてもいいんだよという風に「ビートルズの4人の横に、時々主人が現れるんだ。そして笑ってる、がんばれって言ってる」と言っつて、ただ誰もいない筈の空間を見つめるばかりだった。

おとなしくなるケンイチ。当惑もあり黙り込むしかなかった。

亡くなった自分の夫が見える？…心霊現象なのか？不思議なオーディオ・システムだが、そこまで不思議な装置なのか？

一瞬背筋に寒気も走るが、このシステムなら何度も聴いている。映像が浮かぶのは確かだが、それでも幽霊までは見なかったゾ。

思い過ぎだろうと、そうを口にしようとしたケンイチは、その時に見てしまった。

目前の空間にビートルズのメンバーらしき姿と、もう一人。そこに彼女の亡き夫らしき男の姿が現れたではないか！

更にその人物はケンイチに気付き、はにかんで笑いペコリと頭を下げる！

「！ゆ、幽霊！」（幽霊の感嘆符の絶対値）

ケンイチが凄いものを見た慌てて女主人に目をやると、女主人は…

ソファーに座る彼女は、なんと若返っていた、清純な乙女姿の女主人がそこに座っている！

ケンイチは目をパチクリさせるが、映像は変わらない。じたばたと焦るケンイチだったが…

なぜだかふいに、ケンイチの心が沈静した。とても静かなのだ。若き女主人は、ご主人と静かにやりとりをしていて、会話をしている…

ご主人が、何か説明をしている、忠告している、諭なぐさしている。乙女の女主人は反省したり、首を傾げたり、その度にご主人が笑う、彼女も笑う。

光彩めいひが閃くような感覚があった、そして我に返るケンイチ。

今彼に見えていたものは、次には忽然と消え失せていた。旋律は静かに流れている。

（オレは、何を見たんだろう）

ケンイチは慄然として、考え込んでいた。

分析をすれば、この不思議なオーディオ・システムだ、秘密はまだまだありそうだ。リアルを越えて、ついに聴く者のイメージまで他者に影響するのか？例えば西野陽子ならそう分析するかもしれない。願うものが見える、例えば魔法の鏡だとかどこかで聞いた話だ。では、女主人が願うものが見えたのか？

違うような気がする、とケンイチは思う。

女主人はさておき、ケンイチは願ってなどいない。事実、会話があるからこそ他者にも見えた、とそんな思いが強い。

ケンイチの脳裏を「このシステムは、陽の光のように暖かい」と、評した西野陽子の言葉がかすめていた。そのほうが近い、理由があるのなら暖かいから、だからそこまで描いてしまう。

西野陽子は言い得ていたのかもしれない。

システムの真意の前に、仕組みや理屈にどんな意味がある？夢のよきな人に遭えて、自分は若返って。

それがこのシステムがここにある真意だとすれば、驚きよりも何よりも断然、素敵ではないか。

目をやると、女主人は、デフォルトの姿に戻って背筋を伸ばしてソファアに座り、いつの間にか泣いていて「あの人はずっと励ましてくれているのかね？」

いつしか微笑んでしまうケンイチだった。

何か声を掛けようとする、あっちに行けシツシツ、と煙たがる女主人（オレはネコか？）

ケンイチが首に下げていたタオル差し出すと、チーンと鼻をかむ女主人は、やはり普段着の彼女なのだ。

苦笑になりケンイチ。

「分かったよ、もう邪魔しない。だからオレにも聴かせてくれないか？」

背後でカチャリ、と音がする。食器が鳴る音だ。

振り返ると管理人だった。彼は3人分のコーヒーを準備して（デリカシーを以^もって？）足を忍ばせて背後にやってきており。

彼は女主人に「23日のエニグマ、初めて伺いました。貴方はお幸せでは？」と声を掛けて励まし、ケンイチには「ところで、なぜですかケンイチさん？」と、質問をした。

「貴方まで、なぜ泣くのですか？」

えっ？と、ケンイチ。

不用意な大粒の涙が、彼の頬を伝ってしまっていたので。

後編・5

また、ある日の事。

ケンイチは、2Fフロアの壁際の長椅子に片膝を立て座り込み、時間を潰していた。

もう折り目もくたびれてしまったメモ紙を、利き手の中指と人差し指でつまみ、顔の前にかざして見入る。メモ紙は、あのピクニツクの最中に西野陽子から手に入れた、フェルメールに関する手書きメモだった。

そこには、芸術家の生誕、足跡、作品名、所蔵と評価額？例の「テイルの義賊」やIRA政治犯が起こした事件の顛末^{てんまつ}などが、びっしり書き込まれている。

細いボールペン字で、所々にある感嘆符や疑問符はケータイ絵文字を手書きして。思い切りの良いまっすぐな筆致^{ひつち}の流し終わりが右側にはねてしまう、クセはあるが綺麗で読み易いひらがな。

何度もひっくり返してそれを眺めて、最後の余白の9ケタの数字に目が止まる、未完成のケータイ番号だ。

西野陽子がメモを渡そうとして「私のケータイは…」と書き込んでいた途中で、ケンイチが「いいよ、それは」と取り上げて、そうやって。

ヨーコさんは露骨に面白くない顔をしたなど、思い返してしまうケンイチも、その時面白くない顔でメモをひったくった。もう数え

切れないほど何度もメモ紙を眺め、また今、ケンイチは同じ面白くない顔をしていた。

ケンイチのため息は、雨音に溶ける入る。ガラスの壁面に水滴が踊っている、その日は午前からの曇天が、午後遅くに雨に変わっていた。

2Fロビーには、先程から来館者が一人いる。

静かで柔和な老紳士、ロマンスグレーの風貌の水晶の街の住人、中村弁護士だ。

以前女主人の食堂で笑顔くれた人物で、以来、街中で見かけると笑顔を交わす位はする。先程もケンイチはひよっこり現れたその姿に、軽く頭を下げる挨拶を済ませていた。

絵画鑑賞をする中村弁護士、長椅子でぼんやりのケンイチ、階下の管理人はまた得たいの知れない事務仕事をして、しとしと雨音だけがする、そんな館内だった。

ケンイチはフェルメールの記事を眺め、自分の内にある、過去の出来事を思い出していた…

ケンイチは好きでフェルメールを知った訳ではない。

故郷で高校時代の最後の春休みに、思い出の地方の美術館で、たまに催されていたのがフェルメールの展示で。また、美術館にフェルメールを観に行った訳ではない、観賞と呼ぶのなら旧友の、コンクールで賞を取ったという絵画を観に行った、その有様を言うのなら、観賞というよりボロボロになって転がり込んで、だ。

ケンイチには、幼馴染の友人、A男とB子がいた。3人は中学までは同窓で、ケンイチとA男はB子にほのかに想いを寄せ、B子はどちらも選べないほど大好きで…という、それはありきたりな甘酸っぱい三角関係だった。

A男とB子は、共に勉強が出来る優等生、ケンイチは子供の頃から勉強が苦手でその分、腕白^{わんぱく}で。成長期の異差がつきがちな時期に、3人が兄弟のように仲が良かったのは、それぞれが健気^{けなげ}だったからだ。

A男は理性的でいつもケンイチを立てようとした、B子はどんな時でも男の子2人を平等に褒めよう、共に行動しようとした。それが判っていたケンイチは、無理やりにも2人と過ごそうとした。

卒業前には2人は優等生、ケンイチは出来損ないと明確な区分けがなされたが、3人の友情に何一つ変化はなかった。

3人は同じ美術部に所属していた、それが3人が友情を繋ぎ得た要因のひとつだった。ケンイチが冗談で入部した美術部に、A男とB子は1も2もなく入部して。

絵が上手い、下手というのならケンイチよりもB子が、B子よりももちろん中学生の技術やレベルに大差はない。上手い下手より、ともかく絵を描くの好きだった3人にとって、同じ部に所属する事は、大切な時を共に過ごせる陽だまりの場となり得たのだ。

A男は言った、ケンイチ…B子はお前が好きなんだよ？もっと真面目にやれよ？

B子は褒めた、ケンちゃん… A男はデッサンが上手だけど、色使いはケンちゃんの方が綺麗だよ？

ケンイチは笑った、A男とB子はお似合いなんだから、ちゃんと付き合えよナ？

日が暮れるまで部室で語らう3人だった。

高校に進学すると、3人は疎遠となる。

母子家庭だったケンイチは家庭の事情もあり、隣町へ越し実業高校へ。

見知らぬ土地で、ケンカなら誰にも負けないケンイチは、ごく自然に荒れかけていった。程なく、近隣に名が知れる程のケンカの猛者となり…この頃に『赤毛のケンイチ』という素地が出来上がったのだ。

ケンカに明け暮れる日々が続いた。どこかでA男を見かけた事があって、ケンイチは見なかった風にA男を見た。B子から数回連絡があったが、それも届かなかったものと聞き流した。2人を黙殺した。それほどに、ケンイチの生き方も感情も変容していった。

A男とB子から最も離れた頃、彼らを忘れかけていた頃。

高校卒業の春に、A男からの連絡があった。

絵は今も描いているか？僕は続けている、市のコンクールで入賞した、観に来てくれ…

ふん、と鼻を鳴らしたケンイチだったが、電話口の懐かしい声が耳じ朶だに残った。

「B子と僕は進学する。上京したら会えなくなる、美術館で3人、再会しないか？」

その日、ケンイチは約束したの時間に間に合わせるつもりだった。

気の利いたセリフは吐けねーなど、しきりに考えながら道を急いでいたケンイチの前に現れたのは、よりによって、隣町の対立する不良グループの集団だった。

今日は勘弁してやるからあっちにいけ！と言えば、だから当たり前前に乱闘になって。

何とかヤツラをやっつけて息も絶え絶え。正午にと約束していた美術館に、泥まみれケンイチがたどり着いたのは、閉館間際の夕刻だった…

当然、A男とB子の姿はなかった。

ケンイチは2人を探す事はせず、その年の市の展示会の展示ブースを、よるめきながら探し当て、したたかにやられ変形した顔をイテテと押さえながらA男の作品を見つけ、耐えられずにそこに座り込んだのだった。

身体中の痛みを歯を食いしばって、ケンイチは目の前にある作品に目をやると。

そこに在ったのは、丁寧なタッチで描かれた油絵の人物画だった。人物はあの頃の、中学生時代のケンイチの後姿だった。

背後からの視点だ、キャンバスに向かう少年が筆を口にくわえて、右手を上・左手を下に、両方の親指と人差し指で4角を作りトリミングしている…紛れもなくそんな癖を持っていた、ケンイチだ。隣に笑うのは？…B子の姿も描かれていた。

封じ込んでいた感情が一気に溢れ、ケンイチはバカのように泣いた。友情は色褪せないのだと思い知った。ケンイチは涙を止める事が出来なかった。

あの日、他に来館者が一人いた。中年のサラリーマン風の男性で、ポロポロで床に座り込んだケンイチの様子を心配して、ハンカチを差し出してくれた。

「キミ、大丈夫か？」

凜とした静けさの中、夕日が差し込む薄暗い美術館の、片隅の光景だった。

その時の美術館のリーフレットを、ケンイチは持ち帰り、しばらく大切に保管していた。

リーフレットは主に、同時に展示されていたフェルメールの作品群を紹介した物で、【恋文】は画像付きの詳細な解説がなされていた。ケンイチが持ち帰ったのは、その紙面の目立たない隅に、当時のコンクールの入賞者であるA男の氏名が、記録として小さく記載されていたからだ。

眺め読みを繰り返して、結局フェルメールを知り【恋文】という絵画が印象に残る処となったが、そのリーフレットは、今はどこにやったのか。故郷のどこかにしまいこんで、その場所も忘れてしまった。

風の便りで、A男とB子は学生結婚をしたのだと聞いた。

今は幸せに、九州、熊本の大きな川の近くに暮らしているのだと聞いている…

ゆっくり時間が流れている。

ケンイチは雨音を耳にしながらそう感じ、中村弁護士に目をやった。

彼はずいぶん長い時間、ひとところに立っている。魅入っているのは【恋文】だったので（もしかしたら、ザワザワしているのかもしれないナ？）

ケンイチはメモを片手に立ち上がっていた。

「その【恋文】なんだけどさ」と、中村弁護士に歩み寄って。

「本物なんだってさ…信じられるかい？」

タメ口は、もちろん悪意無しだ。

中村弁護士は、街の噂でケンイチが口が悪い事を知っており、とても善い奴だとの褒め言葉がつく事も、もちろん知っていてそこは気にならない様子だ。

「本物でしょう？ここにがあるものは」

彼の返答は笑顔で、【恋文】を眺めつつ、目を返しつつだった。

横に並んでみると、中村弁護士は一回り小柄だ。だがその立ち姿はゆったりと堂々としていて、おそらく周囲に体格差を感じさせないだろう、彼は細身なのだ。

「本物なら、時価数百億円だってサ、有り得ないだろ？」

ケンイチが肩をすくめて笑うと、弁護士も笑う。

弁護士の醸^{かも}す雰囲気は大らかで、ざつくばらんだった。笑う様^{さま}も他者に合わせてくれるようで、例えばその印象は、何にでも静かに耳を傾けてくれる懐^{ふくろ}の深い老紳士の風。

「しかも、いわくつきだゾ。知ってるかい？」

「いわくつきだゾ、ですか？」

温和で親しみ易い弁護士の笑顔が、ケンイチを普段以上に饒舌にしたのか。

「実は【恋文】には事件があつて…」と、が楽しげにコホンと咳払いをしただけなのに、ふむふむと、興味を寄せて彼がケンイチを見るものだから。

ニヤリと笑ってケンイチ。メモを片手に「昔、笑える事件があつた。1971年、ベルギーで発生した義賊「テイル」による【恋文】盗難事件とわ…」と、なんと事件の説明を始めてしまったのだ。

始め弁護士は面食らうのだ、だがすぐに苦笑いになって（ふんふんと熱心に聞き込む中村弁護士に、時々質問「コレは、何て読む？」

「え、ん、ざ、い（冤罪）です）」

熱心に辛抱強く、2人は何だかたどたどしくも、話し手と聞き手を上手くやり遂げたのだった。

ふう、説明終わり、というケンイチは軽い赤面だった。まんまヨコさんのコピーだったナ、とは内心だ。

事件のあらまは、弁護士の肺腑はいぶを衝いたようだった。

彼は唸り「美術品犯罪事件の公判事例として、聞いた事はありません」と言っつて、しきりに絵画に見入る。

「その事件の、これが本物なのかなあ、本物でしょうか？」

弁護士が意見を求めているのに、ケンイチは一瞬口ごもったり（はたと、この人は澄んだ瞳をしてるナ、などと思ったからだが）

【恋文】オリジナルが本物が贋作か、すんなり疑念してくれた事に感謝になりながら、会話に戻つてのケンイチは「状況証拠は、本物らしい。そんな事件の大それた名画なのナ」

彼は腕組みになって、口をへ字に曲げて見せた。

「普通なら、有り得ない話だよな。本当に本物ならなぜ此処にあるんだろっ？」

独り言ともとれる口調は寂しげで。

「こんなチンケな美術館で、ひっそり展示なんて。名画が泣いちゃう」

弁護士は、ちらりとケンイチに目をやる。

「絵画の価値が、展示場所で変わるものでしょうか？」

そんな中村弁護士の意見はもつともだろう、だが名画は名画たればこそ、在るべき場所を選ぶのではないかとケンイチは思う。少なくとも、世を忍ぶ…なんて厭世的であってはならない筈だ。【恋文】については、オリジナル、レプリカの疑惑以上に、未だに何か釈然としないところがある。それが何か、ケンイチにもよく分からないのだが…

ここでケンイチは質問してみる気になった。この人の絵に対する印象はどうなんだ、と、妙に気になって。やや躊躇いがちに、瞳は悪戯っぽく。

「ところで【恋文】に、ザワザワしないか？」

不思議そうな中村弁護士は「ザワザワ、ですか？」と、キョトンとする。

(そりゃそーだ、突然何を聞いてるんだ、オレ)

問い掛けておいてうるたえる自分に、ケンイチが呆れていると。

中村弁護士は暫く絵画を見て、次に笑みを見せ、視線をガラス壁の雨だれに移し「私は芸術がよくわかりませんが」と、語り始めた。

「此处で【恋文】を観ていると、不思議に気分が落ち着きます」

「ご存知だと思います。私は弁護士です。職業柄、例えば刑事事件などは、知らなくてもいいプライバシーを覗き見るもので…人の思考、移り行く感情という面倒で危うい、掴み処のないものに翻弄さ

れます。疲れてしまい迷う事もあり、そんな時はよくここに立ち、【恋文】を眺めます」

「本物か、偽モノか、その展示場所がどこであるのかに関わらず。少なくともこの絵画の婦人が庶民的であり、此処でそれを観れるのなら、私は構わない、例えば街ですれ違うご婦人を思い出させてくれ、ホッとさせてくれれば、それが偽モノで秘密の部屋であっても、私は嬉しいでしょう」

まるで雨音のように「ザワザワとは？落ち着かない感じですか？」と、弁護士が問うのでケンイチは慌てて「いや、そうじゃなくて」

「感動するんだ、ザワザワと…あれ？落ち着くかも知れない」

ケンイチは首を傾げて考えてみて、どちらかという^{うなず}と落ち着くんだなと気付^{うなず}き結論し、頷く。

即座に「それなら私も同感です」と相槌する弁護士は、そして不思議な事を言った。

「感動してザワザワするのでしょうか？問題にすべきはそこです。感動を問うのなら私は【恋文】と、それを教えてくれたケンイチさんに感じます」と。

はあ、オレに？

雨音が強くなっていた。

「義賊「テイル」は、バカげた行為ながらも難民を助けようとしたのでしょうか？貴方はそれを賛美するように、ロイマンス青年を弁護

するように、事件を語っていましたよ？」

中村弁護士は微笑んでいる。

「それなら、私が【恋文】の前で立ち止まる理由と同じです」

変わらずケンイチは、はあ？で。

「アンタ、まさか？難民でも助けてるのか？」

ケンイチは、又バカな質問をしたと恥じ入るが、中村弁護士はユーモアを以^もって真面目に返答してくれるのだ。

「人の弁護は、難民救済と同じです。罪無き人は何人も法の下に守られる権利がある。報酬の有るなしに関わらず、ね」

はあ？は少し間が空いて質が変わる、笑いに変わる。

「弁護士さんだろ。当たり前にそうじゃねーのか。報酬の有るなしに関わらず、だろ？」

「はい、そうですとも」

中村弁護士は嬉しそうに頷く。彼は又、変な事を言った。

「【恋文】を盗んだロイマンス青年も、ザワザワしたのかもしれませんがね？」

ケンイチは眉を寄せる。えっ？弁護士の言葉がストンと胸に収まらない感覚だ。ロイマンスが、ザワザワした？

「単純に、彼を衝き動かしたものは、絵が訴えるヒューマニズムだったのではありませんか？私もケンイチさんもそれを感じた。ザワザワとは、感動と別の次元で落ち着くんだ、沈静するというのは私も同じです、随分落ち着きました」

「事件は枝葉がついて大仰ですが、案外、素朴なものだったのかも
しれない」

素朴な、ヒューマニズム…

そんな考えは微塵も浮かばなかった。ロイマンズは世間を騒がせた
かつただけの、愉快犯だとばかり思い込んでいた。

ふいに、ケンイチの心がザワザワした。

絵画に、ではない、オーディオ・システムでもない、ここにいる中
村弁護士にだ。だが彼は…人だゾ？

中村弁護士は会話に満足した様子だった。

幾度も頷いた後、最後にひときわ大きく一つ頷いて、ケンイチの肩
に手を置き「楽しいひと時でした、またお会いしたいです」と言っ
て、ケンイチから離れる。

雨脚が強まり、雨音が更に強くなった。

気付くと既に距離があった。目で弁護士の背中を追うケンイチ脳裏
にはその時、不思議にも…海のイメージが広がっていた。

海岸線の長い砂浜だ。青年がいる、強い風に、上着がはためき、髪が散らされる。風と海鳥と波の音がする。水平線に視線を投げ、空を仰ぐのはマリオ・ピエール・ロイマンズ…ティル？それとも？彼の気持ちがなぜか伝わる、なぜ奴は、あれほどまでに孤独なんだ？

我に返るケンイチの視界に、2Fから1Fへフロアを降りつつある弁護士が映り、そこに管理人がお喋りに参加しようと階段を上がってきており。弁護士は、固辞を終わらせようとしている…

更にケンイチの脳裏にイメージが浮かぶ。今度は海岸線ではない、あの時だ。

あの日、故郷の美術館でA男の人物画に慟哭なげなげした、かつてのあの時。今になって、フラッシュバックの中に見出し気付く事があった。あの時、ハンカチをくれた中年のサラリーマン風の男性は、怪我を気遣うお喋りのつもりだったのか、こんな事を言った。

「この絵の中にいる女の子はきつと、このポーズを取る男の子を好きなんだろうね」

A男は。

A男はそれをケンイチに伝えようとしたのではないか。再会し別れを惜しむ為でなく、A男が最後に伝えたかったのは、B子の心だったのではないか。

衝動的に身を翻ひるがえしたケンイチは、中村弁護士を追おうとして、階段の手前で管理人に制せられ「どうしました？」

「弁護士は？」

「良い時間だったと。良い話をしてもらったと、ケンイチさんを褒めていましたよ？」

ケンイチが、管理人を突き飛ばし踊り場に急ごうとするので、解らぬ管理人で「ケンイチさん、中村弁護士は本当に良い方です、絡んではいけません」

「うるせ、判ってる！」

階段を降り切ろうとしたところで、ケンイチは中村弁護士の背中を見つけた。既に、彼は美術館の入り口扉に立ち、傘の準備をして出て行く気配だ。

「なあ！」

声に気付いた中村弁護士は、上半身だけで振り返る笑顔を見せる「？」

ケンイチは、なぜ追いつき声にを掛けたのか自身で判らない、気持ちの向かうままだった。如実にに階段を降り切らぬままに。

「アンタ、まさか難民の弁護じゃねーんだよね？」

まさか、と苦笑する弁護士は「今は、そうですね、とある傷害事件の弁護です」続けて。

「水晶の街に、気は優しいが乱暴者の青年がいて、彼を守りたい、母子家庭を守る事になります。儲けなどありません」

ただのヒューマニズムですと付け加え、彼は気さくなガッツポーズを見せる。

(くそ、まるでオレじゃねーか)

巡り、遡る(さかのぼる)何かがある…

「そうか、オレには良くわからねー。だけど…がんばれ。いや、頑張ってください！」

なぜに敬語だと動揺になるケンイチを、背中に受け止めたかのような中村弁護士だった。そして、彼は美術館を去って行ったのである。

そこに、片手を上げた挨拶が残っていた。

あの時あのサラリーマンは、もちろん中村弁護士ではない。だが重なる姿をケンイチは感じていた。

つかの間だがオレは今、あの時を取り戻していた…誰もいない空間を前にして、ケンイチは礼を言わなきゃと思う。

「ハンカチをありがとう…教えてくれてサンキューだった。A男、B子を幸せにしてくれよ？」

西野陽子が暗示した第六感とは何か。

ケンイチは、漠然としたそれに触れたような気がしていた、いや、ほんの今そのただ中に在って、答えが解っていた筈だった。だのに、それをすぐにを見失ってしまい…彼は暫くの間、そこに立ち尽くし

ていた。

そしてある日、追手が美術館に現れる。遂に、ケンイチにとって奇跡の2日間が始まった。

ケンイチが此処で過ごした、最後の土曜日の早い午後。

数日続いた雨が上がったので、丘に出たケンイチが芝刈り機をブンブン振り回していると、視界の遠くの門前に、ゆっくりと車が停車する。それは、良く知っている黒塗りの高級外車だ。

ケンイチは芝刈り機のエンジンを止めて、唇を噛んだ。

門を挟んで、車から降りてきた男達と3号爺が言い争いになっている。ケンイチは歩み出して、すぐ小走りになった。

「ケンイチなんぞ、おらんゾ！」

鉄柵越しに3号爺がめくらめっぼうに叫んでいるが、襟首を捕まれて動けなくなっている。

「離せ！」

全力疾走で、怒声を上げるケンイチ。

明らかにそれと分かる男達。市街Z会のヤクザ達が、いつせいにケンイチに目を向けた。

彼らは声を荒げて、鉄柵を乗り越えて芝生に降り立ってくる。1、2、3人、よく知っている3人だ。

2人は下っ端ヤクザ、残る一人は兄貴分で、組事務所を飛び出す際

に、ケンイチに傷を負わせた男だ。もちろん、その時は不意を衝か
れただけで、たっぷり仕返しはした…

ケンイチはひと月前、やくざ組事務所から、金庫にあつた現金を
持ち逃げした裏切り者だった。追手が現れるのは必然だった。追手
はその時の姿のまま、シーンを切り取つたような当時の勢いで、遂
にやってきたのだ。

探したぞ、許さんぞと、追手が口々に声を荒げる。

3号爺は逃げれば良かったものを、かばうように場に割って入ろう
として、簡単に再び捕まっている。

ケンイチは、人質になった3号爺に舌打ちしながらもニヤリ、と笑
つた。

短刀を抜く者がいたが、この3人ではケンイチに歯が立たない。
ケンイチのケンカの腕前は、3人を総合したよりもおそらく、立つ。
自覚していたし何より、3人が凄んばかりで一向に詰め寄れない
のは、それを物語っていた。

人質のハンデが合つても楽勝だ。ケンイチの笑みは追手達にそんな
風に映つたか？だがケンイチの内心はヤケクソだった、それで笑つ
ていた。

自分が嫌でたまらなかった。遅かれ早かれこうなる事は判っていた、
なのにオレは。

すんなりと、捕らえられれば良かったのかも知れない。

だがふがない自分に対する怒りが、彼をヤケクソにさせていた。こうなったらひと暴れしてやるゾ。

兄貴分の「覚悟しろ！」と言うセリフは気持ちを逆撫でする。

「いいぜ、相手になってやる。ここしばらく、調子も狂ってたところだ」

対峙する距離はケンイチの距離だ。右に回ると、ヤクザ達は左に回る。じりじりと間を詰めると退く追手。

やはり慎重になっているナとケンイチは思う。彼の笑みは、戦闘モードの不敵なものに変わる。

(それで、オレが倒せるか?)

しかし、ここで視界に、高級外車から降り立つ男の姿が目に入り、ケンイチはギョツとする。

追手はもう一人いた。その男は2m近い大男、白いダブルのドレススーツに特徴のある金髪 của サーファー・ヘア、スクエア型の赤いセルフレームのサングラスは…

近付いてくる金髪の大男は、殺し屋・金狼きんろうだった。ケンイチの表情から、血の気が失せていた。

金狼は、任侠の世界やその筋の裏社会の、有名な殺し屋だった。その同じ世界で知る限り、お目にかかる事の無い雲の上の人物だ。

下っ端ヤクザに接点などももちろん無く、そもそもなぜここに現れる

のか判らない首都圏あたりの、いわゆる中央のメジャーな筈の、暗黒社会の有名人。

以前、組事務所で、その雄姿を映像として見た事がある。

どこかの大組織の幹部の葬儀だったか法要だったかを、マスコミが取り上げた報道番組に、ちらりとその派手な姿が映り「あ、コイツだ、知ってるか？」 時間つぶしに読んだ、裏社会の薄汚れた任侠雑誌にも写真付きで特集されていた、凶悪を誇らしげにする黒い偶像に「この人だ、任侠界最強の殺し屋だ：金狼」と、仲間内の誰かが指を差し憧れ話す、奇形した賛美を思い出す。

(こんな奴が、ナゼ出てくるんだ?)

首筋を冷や汗が伝う、見ると追手達は勝ち誇った顔になっていた。

「ケンイチ、終わりだな」

誰かの言葉にケンイチは齒軋りする、ちくしょうと思つ。

金狼が近付いてくる。多分ケンイチの攻撃範囲より、大きな金狼のエリアだろう、そこに至ればお終いだ。素手の殴り合いは同じスタイルでも、レベルは雲泥程違う。

その寸前に覚悟が決まった。両拳を一度開いて、握り締める、ボキボキと指の関節が鳴る。

「やって、やるゾ」

金狼は、ケンイチを見下すように眠そうな表情だ。薄笑いを浮かべ

て両手をポケットに突っ込み、そこに至ろうとした処でピタリと足を止める。

奇妙な間がある。気付くと場の気配が変わっている。

「管理人！」と3号爺が声を上げ、振り返ると背後に、いつの間にか管理人が立っていた。

管理人は、いぶかしげに「何が、どうなっていますか？」

金狼がニヤリと笑って「メインディッシュが、登場か」

2mの大男が対峙する、その様は壮観だった。

金狼の狙いは、ケンイチなどではなく初めからこの管理人・矢野龍介だった。

どこかの地方の組で揉め事が起きている…、些細な情報から偶然、金狼はその関係者に矢野龍介がいる事を知ったのだ。

まったく興味のないマイナーな傘下組織の、下らない出来事がケンイチの逃亡劇だった。だが、どうやら騒ぎを起こしたチンピラの逃亡先に矢野龍介がいて、何か関係があるらしい。

それだけで充分だった。以前から金狼は、管理人・矢野龍介を探し回っていた。

矢野龍介は、伝説の男だ。最も強いだろう日本人、失われた格闘界の星。そのネームバリューは闘う男達の世界では絶大だった。

華やかなエンターテイメントとしての格闘界がある。闇の中で凌ぎ合う悲惨な殺し合いの世界もある。金狼はその暗黒の世界で、自らの体を磨り潰し命を削るように生き延びて、それなりのポジションに登りつめた、その頂点に。

ところが、陰陽、明暗の格闘界どちらも統べてランク付けされる場合に（当事者に取っては、比べようもないと笑いたくなる、バカげたランキングとやらだが）その珍妙な序列で、金狼は矢野龍介に次ぐナンバー2だった、いつまでも。

死して神格化された者を超えられないのなら仕方がない。だが、過去しかない消息すら判らない矢野龍介を、なぜ恐ろしく強い、と口にする者が絶えないのか？なぜ風評を変えられないのか？彼は歯軋りをした。それは同時に、身の内に憧れを隠し切れない自分に対してでもあった。

かつて記録映像として見た矢野龍介という男は。その空手家は、オープントーナメントという世界戦決勝ラウンドで1度きり動き、南米の世界最強を謳う対戦相手を戦闘不能にした、それは映画の1シーンのような、超高速の回し蹴りだった。

あの矢野龍介には戦慄した。そして畏怖を以^もって（俺はこの男に勝てるのか？）

幾度となく修羅場をくぐり抜けテクニクを身に付ける度に、あの映像に肉薄する自覚があった。そして今や、流血の中で洗練された自分の格闘技術は、確実にあのラウンドの矢野龍介を、超高速の回し蹴りを弾き返し圧倒するに至っている。

探し出し決着をつけよう、頂点に憧れなどいらぬ。

今、金狼は力で勝ち取ったこの裏社会で、絶大な賞賛と生きて行く保障を得ていた。だがその内に生き、生かされながらも、反吐へんが出るほどにこの世界が嫌いだった、恨んでいた。俺を利用し、血の海を平然と笑う自らは決して手を汚さない奢おごれる者達が、未だ支配の側でのうのうと生きているこの国。

では今度は俺が震え上がらせてやろう、何時いつまで笑っている？と。

憧れなどという美しい思いの欠片かけらすら無い、荒涼とした世界を現出させて、自らこの暴力の世界を嘲笑してやろう。

金狼にとって、それが目の前の男を倒すという事に他ならない。待ちに待った、彼が最強を証明するに不可欠な儀式だったのである。

「矢野龍介、やっと見つけた」

金狼は呟き、危険な瞳でにんまり笑う、が管理人は興味が無い。ちらりと金髪の大男を一瞥しただけで、視線は追手のヤクザ達とケンイチに巡らせていた。

「この騒ぎ、説明していただきましょう」

「これは、その」

ケンイチは口ごもる。ヤクザ達が口々の罵声は異口同音で「ケンイチは組の金を持ち逃げしたんだ！」「1億だ！」「かばい立てすると、容赦しねえぞ！」

ヤクザ達の騒ぎ立てに、1億？持ち逃げ？ケンイチさん？と呟き、

管理人はケンイチを睨みつけていた。

「それはケンイチさんが悪い、本当ですか？」

「それはその。本当だ、ごめんなさい」

ケンイチが肩を落とす。謝りなさい、そしてちゃんと返してあげなさいと、管理人が諭し始めると、ヤクザ達の雰囲気が変わる（おや、この大男？話せる人じゃねーか？）

短刀を抜いていた者が、構えていた手を下ろす、3号爺の拘束もいっつしか解かれる。何となく、金狼を除く者達で談議が始まっていた。

「金は返すよ、組には迷惑をかけた」

「ケンイチ、金はどこにある？」

「私鉄のコインロッカーだ、ひと月前に隠したままだ」

「ひと月前!？」

3号爺の襟首を捕まえていた一番若い男がすっとなきょうに。

「ケンイチ、ロッカーは2週間で拾得物だぞ。じゃあ金は…駅の落とし物係だ」

「え？」

ケンイチが困った風になると、全員がやれやれと腰に手を当ててしまふ。

こりや笑い話だ、では無かった。

鈍い音がして、管理人がぐわっとうめき声を洩らす。

金狼がいるのだ。

金髪の大男は鬼神のように既に始めていた。議論など必要ない、この男の目的は違うのだ。

恐るべき右の一撃だった。大木のような豪腕が唸り、管理人の頭部を直撃していた。次に砲弾のような左がアゴをえぐる。

周辺がばらばらと散り距離を取り、ケンイチもその中に在って拳を握り締めていた。

凄まじい金狼の重量級の攻撃だ。たまらず管理人は数歩あしあと後退るが、重たい前蹴りが追い腹部に命中する、膝を落とす管理人の頭部に、凶弾の右拳が見舞われる。

管理人は芝にめり込まされ、そこに倒されてしまった。

「管理人！」

3号爺が叫ぶ、ケンイチがダメだ、と洩らす。ヤクザ連中はいたたまれない顔だが、仕方ないもう止められない、と模様眺めだ。

勝ち誇る金狼は管理人の胸元を掴み、苦痛に顔を歪める大男を引き立たせようとしていた。

「ケンイチ、あの金髪は強いのか？」

3号爺の問い掛けに、ケンイチは嫌でも頷かざる得ない。

金狼は恐ろしく強い筈だ。奴にまつわる血生臭い話ちなまぐさはごまんとある。素手の勝負で有名な武道家が太刀打ち出来なかった話が、任侠雑誌にも数ページあった。この男にはあだ名がある、確かおぞましい、何だったか？

3号爺逃げる、後はオレが何とかすると言う端で、3号爺が胸ポケットからカードのようなものを取り出すのを、ケンイチは見た。カードはまさしくカードの風だが、3号爺が表面を撫でると一瞬表面が輝きデジタル表示が閃き流れる。

始めに数回点滅した大きな文字は `signal`・`NAIシゲナルL`だった。

「ケンイチさん、逃げろ」

半ば無意識なのか。よろめき立つ管理人は、金狼に胸ぐらを捕まれたまま、ファイティングポーズでケンイチに呻いた。

「3号爺を助け出して、ここは逃げなさい」

3号爺がきよとんとする。

「ワシは、もう捕まっておらんぞい？」

議論は丸く収まりそうだった、だからヤクザ達は特に3号爺を人質にする理由もなく。彼は隠れるようにケンイチの傍にいた。

少し空気が変わる。管理人は今、何か、ムスツとしなかったか？

管理人の顔面を、金狼の頭突きが襲う、ゴツ、ゴツ。鈍い音で2回、これはキツイ…

「懂れていたのにな？失望したぞ、矢野龍介」

これで終わりだと、金狼が舌なめずりをして3度目の頭突きを叩きこむ、バシツと音がして？管理人が手の平で、金狼の額を受け止めていた。

管理人は面白くなさそうに金狼の頭部を突き放す、よろめいた金狼だった。管理人は呟いていた「せっかく盛り上げたのに」

あっ？何だっ？コロリと空気が変わっていた。

管理人はスルリと金狼の背後に身体を入れる。

後から首に腕を巻きつけられ、もがく金狼だ。距離をとる打撃戦は不利とみたのか、管理人は金狼に組み付く、接近戦に持ち込んでいた。

だが関節技？空手家が自らそんな戦法を選ぶのか？とケンイチが、ギャラリーが回り込み詳細を伺うと、あるう事が管理人は。

「コノヤロウ、よくもやりやがったナ」と文句を言いながら、背後から金狼の頬をひねくりあげていた、あれ、あれれ？

金狼の表情が、動揺とあわせとんでもなく歪んでいる、ジタバタする、管理人は離さない。やみくもな肘打ちも、後に抱き付き踊るようにかわす管理人の体術に効果がない。

金狼が後頭部で後方に頭突くような動きを見せ始めて、管理人は金狼の背中に蹴りを入れて、体を離れた。蹴りは空手のものではない。例えばそれはどつき漫才のつつ込み方がやる、痛くないオーバーゼスチャーな、ケリだ。

どうなってる？とケンイチは思う。相手は、殺人鬼だゾ、なぜ空手を使わない？

離れざま、金狼の裏拳が管理人の首をなぎ払うように放たれたが、管理人は更に速いスピードで裏拳の回転方向に回り込み、一周し裏拳を追い越して無防備な金狼の目前に現れていた。すっげーゾのケ

ンイチがここだ！と思った決定的場面だった、が。

管理人は、ここから左右の細かい平手打ちを金狼に浴びせ始めていた。要するに手首だけの、ビンタか？

金狼は、怒り狂う。右のストレート、左のフックとハンマーのような拳を連弾で繰り出す、冷静を欠く攻撃など管理人は軽くかいくぐる。右から左から隙間から、とビンタを張り続ける。

そのビンタは、例えば相撲力士が使う張り手などではない。音だけがパチパチと響く、相手の戦闘力を1パーセントすら奪わない汚らしい攻撃だ。だが難敵の気持ちを折るには、効果絶大だった。

金狼の抵抗は、強弱を以^もつて試みられたが、次第に勢いが無くな^っていく。

金狼の特徴の一つは、無類のタフネスぶりだった。関東副都心の繁華街で、外国の現役プロレスラーと殴り合いを演じた事がある。立てなくなったのはもちろん相手だった。なまじ耐久力に自信があったから 例え矢野龍介の打撃にもすんなり倒される訳がない、という自負があつたから、この事態が齒がゆく受け入れられない。

オレはナメられているのか？ケンカにすらな^ってねーのか？野郎、貴様、テメー、コンチクショウ、おのれ矢野龍介！逆上の色が赤く腫れていく金狼の頬に見てとれるが、ビンタがそこを狙うのだ。パシパシパシ。声を洩らせると口元までパシパシパシ。体制を整えた金狼に、それを許さない管理人は執拗で。

(サディスト？)

遊んどる、とケンイチがため息になる。ヤクザ達も見守る表情に嘲笑が浮かんでいた。

ふと一番若い男と目が合う。ギラついた風貌で露骨に睨み付けてくる。ケンイチが組を逃げ出す前は、アニキアニキとお世辞ばかり言っていた若い男だった。

好奇心だけでヤクザになって虚勢を張って、例えばそこで凄んでいる。寂しいもんだと、ふと感じてしまう。オレもこんなだったかと嫌気がさし目を背ける。

空手を使え。早く倒せとケンイチは思っていた。相手は天下の金狼だ。すんなり行くのなら、早く決めてしまえ。

遂に金狼はビンタの嵐に、もがくのをやめていた「判った、止せ、もう止めてくれ」と、途切れ途切れに哀願を繋ぎ始めた。

管理人が、手を止めると。

見ると金狼は、頬が2倍くらいに腫れ上がり、唇はタラコだ。瞼も腫れ上がり、きつとサングラスの奥の瞳は糸目になっている筈だ。

管理人はやり過ぎましたかと笑い「何でしょうか？」と、本当にいやらしい。

「…強いな、余裕だな、矢野龍介、やっぱり憧れる」と呟く金狼は肩を震わせている、降参を表明しながらも怒りを収め切れないでいるのか。

いずれにせよ白旗だ、とケンイチは受け取る。確かにやりすぎだゾ

管理人、と金狼に同情を寄せながら、冷静に2人の有様を見る。管理人はかなりやられたが、恥をかいたのは金狼だ。この勝負引き分けだろう。

と、そこでふと金狼の右手が、軽くりズムを取っている事に気付く。金狼はまだ何か狙っているのではないか？

「だが、オレは殺し合いをやってたんだ！お前らの曲芸とは、違う！」

突如、怒鳴る金狼。ケンイチは、不吉なイメージを伴って電撃のように思い出した。金狼のあだ名は抜刀はうとうの金狼だ。コイツは、背中に隠した短刀で踏み込み、居合斬りを使う！

管理人、退ひけ！と叫ぶケンイチ、憧れなど、墮ちろ！と咆哮する金狼、声は同時だった。

剣術の居合は暫撃ざんげきである。運動の連動を犠牲にして、筋肉が放ち得る一度きりの瞬発点に全てを注ぐが故に、達人の居合いの抜刀は長尺の日本刀で切っ先が音速を超え、上段からでは断ち切れない巻き締めた藁束の塊をも、一刀で絶断するに至る。

金狼は剣術を秘め抱き、それを実践で使うのだ。40センチの仕込み刃かたなを腰に隠しその居合が放たれる時、敵には凄惨な最期が待っていた。

ところが、仕込みの短刀は宙を舞う。

暫撃を避ける事は難しい、だがこちらも暫撃を以もつて迎撃カウンターに臨めばそれに応じる事が出来る、それが武道の真髄、心眼しんがんである。

管理人の放った迎撃の一閃は、あの超高速回し蹴りだった。なんと初めて空手の技を見せた管理人は、居合抜きの短刃を蹴り飛ばしていたのだ。

一同が唾然とする。ケンイチも3号爺も、もちろん金狼も。

金狼にすれば、あの戦慄の回し蹴りは、想定したものより遙に速かった。矢野龍介、お前はあの試合ですら全力でなかったのか、何も見えなかった事に震えてしまう。次にはいよいよ繰り出される管理人の空手技があらうつというのに、もう術がなく立ち尽くす。

だが管理人は。空手技は繰り出さなかった、変わりに笑って「これは、堕ちません」

金狼の右頬に、回し蹴り触れたのか少し切れ、血が滲んでいる。管理人は腰に下げていた手ぬぐいを差し出していた。

「勝手に憧れたのでしょうか？勝手に止めないでいただきたい」

「…」

金狼は、ホレホレと管理人が勧めるので、仕方なく手ぬぐいを受け取る風だった。それは芝草があちこちに付き、明らかに汚いが管理人愛用の1枚だ。

「汚ねえ」

金狼が呟くと、え？の管理人。ふん、金狼は無然としていた、しかしすぐに苦笑いを返す。

彼は、スーツの胸ポケットから一枚数万円するエルメスのハンカチを取り出すと、管理人にひらひらと振ってみせる、自分の頬に当てる、ばか、氏ねと笑顔で罵^{ののし}って。

「矢野龍介、お前こんな田舎で何をやってる？」

そして、金狼は踵^{きんじゆう}を返したのだ。

「帰るゾ！」

撤収の号令だった、ヤクザ達は反応する、これで騒ぎは終わったのだ。

のろのろと追手達が動き始めた、引き上げていく。

そこでケンイチがちょっと待てと、兄貴分の腕を掴む。兄貴分は露骨に不愉快なガン付けだった。

すまねー、許してくれと言うケンイチは、人に初めて見せる哀願の表情をしていた。ロッカーの鍵だ、ほら、それから組にはちゃんとワビを入れるから…

「だから、もうココに来ないでくれ」

束の間、両者のらみ合いになった、いや正確には、ケンイチは肩を落とし目を芝に落とし気味に。

そんなケンイチを、突然、兄貴分が殴りつける。すわ、小競り合いか？

ケンイチは手向かわなかった。歯を食いしばって殴られるままだった（だが、今のパンチは…なぜか力がなかった？）

兄貴分は何も表情を見せない、ケンイチは続けるしかなく、「ここは違う場所だ、俺達が入る所じゃない、オレは判った、もう判ったから此処に来ないでくれ」

兄貴分は未だ僅かの間黙っていた。ようやく「あいな」と口を開くと、なぜか笑いながらに。

「金は、とつくの昔に戻ってきていた。例の拾得物だ。私鉄の駅員が、ママチャリで届けてくれてナ？金を詰込んだ旅行バックには、組長の住所、氏名札がしっかり掛かっていてな、落し物だった」

「中央セントラルから金狼アイツがお出ましになってな？コツチも退くに退けなくなっただけだ。金に関して心配はするな」

「オレとのイザコザも、今の一発ワンパンで勘弁してやる。だがな？」

「組に対してケジメをつける、ヤクザは遊びじゃネーゾ。それが出来なきゃ、オレ達はいつまでも此処にやって来る」

兄貴分はケンイチの傍を離れるが、離れ際に痛快に大きく笑った。

「ケンイチ、お前何があった…随分変わったな？」

敷地の外では、高級外車から首を出した金狼が、イクゾと叫んでいる。

高級外車は砂塵を撒き散らし荒っぽい発進をする、追手達は美術館

を去って行った。

(追手が去り) 美術館の丘に平穩が戻って来たが。

管理人、3号爺にと目をやると、やはりどこか気まずい空気だ。

「すまなかった、ごめんなさい」

ケンイチが素直に頭を下げると、管理人も3号爺もため息をつき、もういいのだという顔をする。

芝刈り機を一度肩に担いで、思い直したようにそれを肩から降ろすケンイチだった。

「じゃ、オレ行ってくるワ」

わたたた、行くって何？ちょっと待てと、まず管理人が慌てて。

「行くってどこに？まさか、ヤクザ組事務所ですか？」

「うん、ちょっと今から行ってくる」

「ちょっとって、そんな気が早い」

「まあ、待てケンイチ、ココは落ちつくんぢや」

3号爺が抱きすくめる、というか抱きついて制止だが、ケンイチは
ずるずると引きずって「いいや、今行く」

「オレが悪かった、これ以上迷惑はかけられねー」

「しかし」と、考えて見せる管理人だ。

「あの金髪の大男…まだ事務所にいるんじゃないですか？」

ムツ、とケンイチの抵抗が止む。

「もしかしたら、私に敗北して機嫌が悪いかもしれない」

おお、そうじゃぞいの3号爺。

「お前を目にしたとたん、居合斬りかもしれんな」

「い、居合斬り？」

見たでしょう、と管理人は言いながら、手ぬぐいで自分の顔を拭き
「おお、私の鼻が曲がってる」と言っつて、指でつまみゴリりと矯正
する。これは痛いのだ、涙目になる。

「結構長い短刀でした。ケンイチさんなら簡単に、上と下とに真つ
二つでしようねえ、くす」

うう、オレを脅してどうすんだ、のケンイチも涙目だ、小声になる。

「指の1本や2本なら、覚悟は出来てるんだ」

いいえ、と管理人が励ますように否定する。

「ちゃんと話せば、真面目にやっつていこうとするかたきさん（疑問

符)に何かする事はないでしょう。私がついていきます。菓子折りを持って日を改めて、それこそワビを入れようではありませんか」

「おお、それがエエゾ！管理人がついて行け。でもお前が暴れると大ごとぢやな？それこそ無茶苦茶ぢや」

管理人と3号爺は馬鹿笑いを見せる。危機は去ったのだ、もう笑い飛ばせばいい、と。

ケンイチは神妙に、目を芝に落としていた。

それを気にしてだ。笑う間から念を押すように管理人は「もうヤクザは辞めるんですね？」

ケンイチは地面に向かって笑顔を作る。少し元気になって大男の肩越しに、青空を伺うのだ。

「ああ、辞める。何だかこう、バカらしくなった」

うんうん喜ばしいと、周辺はお喋りを始めていた。いやあ、ヤクザというのは恐ろしいもんぢやな、はい、あの金髪の大男にはゾツとしましたよね…本当の話をしてるか、お前達。

そんな無駄話の中の、管理人の問い掛けだった。

「何故、大金を持ち逃げしたんですか？」

「いや」

ケンイチは返事に窮す。金に目的は無かった逃げ出すついでだった、

のだ。

「金は別にどーでも良かった、金なんぞ……」

不意に感じる場所があったのか、彼はそこで口をつぐむ。唇を噛む。芝刈り機を拾い上げ、エンジンを入れる。ついつと、そこからは離れてしまう。

僅かにいぶかしい管理人と3号爺は、ヒソヒソと作戦会議を始めていた。

「もし金を要求されたら、わしの蓄えたくわから2〜3百万位は出してやるぞい」

「いえ、お金なら公団がエゲツナイ程持っています。ゲストの保護の名目なら、いくらでも捻出出来ます」

ケンイチは、やみくもに芝刈りを始めていた。背中に会話は聞こえていた。歯軋りになり痛そうに、泣く。

（この2人はバカだ、オレを守って何になる、ゲストだと？オレはヤクザで、金を盗んだ悪党だゾ）

足元の芝をずんずん刈り進む。急ぐようにはない、逃げるように進むのだ。

そして遂に膝をつき、つんのめってしまう。耐えられなかった。耐えられずに肩が震え、嗚咽おえつし、泣いてしまう。

そうだった。オレはそもそも金なんてほしくなかった、恥ずかしく

もオレは…ぼんやりと九州を夢見ていた、A男達がいる九州に行こうとしていた。金を届けるような具体的イメージなど無く、ただ、行ってみたかった。新幹線の車窓から、頬を紅潮させて景色を眺める自分がいた。まるで高校生の頃に戻ってか？A男達は笑顔で迎えてくれるとでも、オレは思っていたのか？

（なんて、愚か者だったんだ）

もちろん、ケンイチの咽び泣きは、管理人達に見て取れていた。

彼らは大人である。暫く遠い景色を眺めて「はあ、今日もいい天気ですね」「おお、絶景ぢやのう」と、時間を潰すベタな配慮でケンイチに気遣いを見せてくれていた。

泣け、赤毛のケンイチ。キミは泣かなくてはいけない、誰の上にも雨は降るのだ。

ややあって。ケンイチさん、と管理人が声を掛ける。

気が付くと、涙は枯れましたか？と問う笑顔で、管理人は傍そばに立っていた。3号爺は既にいつものポジション、敷地入口の大木の木陰に向かっていた、彼は背中を見せ此処を離れていた。

「そろそろ、別離の時でしょうか？」

「…」

管理人の言葉に、脆もろくなった涙腺がまた決壊しそうになり、くそつ、

とケンイチ。強がって「だから、早く決着を^{ケジメ}着けに行きたいんだ」

そのセリフに、管理人は思案深げだった。

「危険なああの金髪は組事務所^{いっしょ}に何時までいるでしょうね？そして、街で知り合った皆さんにちゃんと挨拶するのなら、最低あと1ヶ月位、かかるんじゃないでしょうか」

「1ヶ月？」荒げる声に、まあまあとのなだめ声。

「ともかく、今日明日は絶対にダメです。明日は日曜日です。また西野陽子さんがやってきますよ？」

もう立ち上がって下さいの手助けに、ケンイチは膝の芝を^{はら}掃う。

「もしピクニックなぞやられた日には、私一人ではどうにもなりません」

管理人は頭を掻いてから「最短でも明後日の月曜日、です」そして
継ぐ。

「明後日の早い内に、ケジメをつけに行きましょう、ゲストのケンイチさんは私が守る、安心をして」

ケンイチは返事をしない、というか出来ずにいて。管理人は顔色をうかがう風に意見を待っている、仕方なくかぶりを振る。

「ケジメは、オレが一人でなんとかする、オレは悪役だ。ゲストなんかじゃねー、守らなくていい」

「おや？面白い事を言いますね？」

貴方はこの美術館で何か悪事を働いた訳じゃない、と管理人は笑うのである。

「貴方は、最高にエンターテイメントなゲストでした、西野陽子さんと共にです」

ここで彼は、不意に「では、急ぎ送別会を計画しましょう」

え？意外に思うケンイチだ（酒を飲まないと思っていたゾ、アルコールの類は、美術館一切ないし）

「変な話にするな、変に気を遣わないでくれ」

ケジメについても、送別会という場違いな話にもお茶を濁したい場面だった。しかし更に、景色に目をやったままで管理人は「最期に質問があります」

その時、彼は敢えて目を合わせないで、だった。ケンイチはそんな管理人は初めて見る。喜怒哀楽に七変化し、いつも最後は雄大な優しさを見せる瞳が、今はどこか遠くを見ている。

「いいんですか？」と、彼は一呼吸置き。

「西野陽子さん、彼女と逢えなくなりますよ。いいんですか？」

ケンイチが瞼を強く閉じる。ココでソコを言うか、一種観念した気持ちになる。

管理人を伺うと、彼は表情を変えないマネキン人形のように、一生懸命無表情を取り繕っているのだ。

（コイツめ、最期までバカ野郎だった、か）

「すまねー管理人。あんまり差がありすぎて…ムリだ」

途端に目の前の男は悲しげになる、大きく肩を落とす。これは演技ではなくこの男の素だ（本当に悲しい時、コイツはこうなる）

ケンイチは、よくよく考えたんだ、と呟いて。

「実らなくてもいいんだ。オレには…そんな恋も有り、だ」

「ケンイチさん！」

いきなり管理人が感情爆発だ。これも初めての怒り心頭の瞳で、さすがに恐ろしい。

「好きな者同士が、なぜ付き合えないんです！」

「す、好きな者同士って？そんなアンタ」

「イヤ、アナタ達八好キアツテイル！」

ここで、大男はたどたどしいガイコク語（真剣な時の言語）かと、苦々しいケンイチだった。この眼は、無理やりにも引つけようとしているのか？ああクソ、何てめんどくさい大男だ。もう最後の場面でこんな絡み方をするなんて。ああいっそ、こんな奴金狼に叩き斬られりゃ良かったのだ。

その異音、は少し前から響き始めていた筈だった。

ケンイチと管理人が口論を始めようとしたその時に至って、異音は明確な爆音となり辺りを包む。

何だ、とやみくもな身構えになるケンイチ、仁王立ちの管理人。

突然、丘の端から現れた物がある。軍事用の攻撃用のヘリが2機だ。辺りを劈く大爆音を放ち、ケンイチと管理人を威圧し、ガラスの美術館をかすめる。荒っぽい曲芸飛行の爆風に、衣服がちぎれるか程はためく。

次に何かが、凄まじいスピードで落ちてくる気配がケンイチを襲う。たまらず首を竦めてうずくまると。見ると何か戦闘機のようなものが3機、丘のすぐ上の空中に静止していた。甲高い金属音がしている…

戦闘機のような紺色の機体（ヘリも同じ紺色だった）、最新鋭のステルス機を思わせる部分もありそれなら戦闘機だといえなくも無いが、それは昆虫のような大きな羽を持って、それを振動させ空中に静止していた。

複座のコクピットの後部座席で、呼吸器を外したのは、パイロットスーツを着ていない場違いな黒いスーツ姿の男で、こちらを見ている。

「…ナイル」

管理人が呟くと、黒いスーツの男が、ニヤリと笑ったように見えた。

次に3つの機体は、一瞬で上空1000メートルまで（羽を使い）ジャンプアップする。そして滑らかにパルスジェットを連携させて、マツハ3の速域で。空の彼方に消えていったのであった。

僅かな時間の出来事だった。いつの間にかへりの音は空の遠くへ離れていた、それもついに消え去って。

ケンイチはひっくり返っていた、大汗だ。

「何だ、今のは何だ？」

管理人は無表情だ、事務的に答える。

「面白くありませんね」

と、そんな彼は、遠くでこれもまた腰を抜かしている3号爺を咎めるように注視している。3号爺はスマンのゼスチャー？

ナイル、と考えるケンイチは。

そう言えば3号爺は、先ほど金狼が圧倒するかという場面で、何かカードをいじっていた。 シケナル・ナイル signal・NAIL、この事だろうか、という事は…

（3号爺の友達か、友達は軍隊か？）

ケンイチさん、という声はどこか醒めた管理人だった。

「今の出来事は忘れて下さい、此処に、美術館に關係のない話です。」

私も驚いた、こんな事になるとは「

彼は長い時間、それが現れて消えた空を^{いま}忌わしげに見つめていた。

轟々(ごうごう)と…

強い重い風が吹き荒れていた。

山々がざわめき、木々が軋み、大気が濁流となる。

風が咆哮をあげている暗闇の丘に、男が立っていた… ナイルである。

スーツが風に破れるかとはためく、ネクタイが舞い踊り、黒髪が散り逆巻く…

闇夜の空には、黒々とした山塊のような暗雲が垂れ込めている。

雲は大きく深く割れながら激しく動き、胎内にはらむ雷いかずちが鈍く淡い光を発している、谷の奥のような深部の、遙か背後に隠れる… 月光は銀色の境界を滲にじませる。

凶事が訪れるのか。

暗闇は吹き払われ、暁が迫るのか。

その行方を知る奥深い瞳に光を沈めて、ナイルはそこに立つ…

その日の夕食は、中村弁護士宅で鍋物、すき焼き（内密にはケンイチの送別会）となった。

湯気の向こうでビールを煽り、豪快に笑う管理人がいる、その隣には食堂の女主人と、中村弁護士だ。向かいに座るのはケンイチで、順に西野陽子、中村弁護士の奥さんと座り、宴もたけなわ、皆上機嫌だ。

ケンイチは、笑いの渦の中に在って尚、笑いつつ独り首を捻っていた。

昼間に事件があった。逃走劇の決着はともかく、それよりも突然飛来したあのヘリと戦闘機だ、あれは何だったのか？管理人も3号爺もお茶を濁すばかりで「いつか話す機会があれば」で、うやむやになっただけだ。

そもそも、この飲み会にも納得がいかない。

確かケンイチと管理人、2人だけで一杯やろうと、管理人が持ちかけてきた話だった。ソレが見よ。ただの宴会だ、皆で楽しむ食事会になっているゾ。

中村弁護士は、美術館で語らって以来随分ケンイチを気に入りのよんで、再三呑みに来い遊びに来い、と誘ってくれてはいた。だからといってこの宴会は、連絡を取ったその晩の事だ。性急すぎではなかったか？ましてや、食堂の女主人、よりによって西野陽子まで引っ張り出すとは。どこが男2人の別れの杯だろう。

別にこんな風の宴なら、女主人の食堂の周辺にも居酒屋や呑み屋はあり、それなら女主人の店を利用すれば良かった筈だ、要望に応えて弁護士夫妻をお誘いすればそれで善しだったろう。弁護士宅は商店街・繁華街から（女主人の食堂から）2丁しか離れていない住宅街の始まりに位置する、こじんまりした平屋だ。（女主人の食堂の）近所で、敢えて各人が食材や飲み物を持ち寄り、ワイワイやる必要がどこにあった？

更に更にと考える程に、ケンイチには何かと不満に思えてくる、それはなぜなのか。

要するに、目の前の男のせいだ。つまり目の前で、ワハハツと大喜びし過ぎている管理人、ケンイチはその姿に憤懣ふんまんやる方なかったのだ。

美術館の丘から降りてきた大男は、おそらく（間違いなく）自分が楽しむ為に、この宴会を画策していた。別れを惜しむだと？ならばなぜ、あろう事かすき焼きの肉を独り占めにし、ビールを1時間に1ダースのペースで呑み続け、皆をからかい、大はしゃぎしてるんだ？

（コイツはひとつも、勢いが変わらない）

ケンイチの疑念は、今や確信に変わっていた。送別会は口実に違いない、始めはそのつもりだったかもしれないが、今となっては自分が一番楽しくて仕方ないのだコノヤロウ。

もちろん場には事情を明かしていない、皆知らないで当然に、料理に舌鼓を打ち酒を楽しんでいる。そんな中では不機嫌になれる筈も

なく（えーい、くそっ）

「どうしました、ケンイチさん？」とは、かんらかんらの管理人だった。

「何でもねえーよ、知らねーよ」

そうだったと気付く。管理人が絡む話はいつも最後はバカバカしくなつて笑つてしまふんだつたっけ？

始めの内、皆は管理人の乱痴気騒ぎぶりに、目を丸くしていた。

だが、彼が度を過ぎて騒いだ訳ではない。酒を勧める為に盛り上げたかと思つと、皆の呑みツぷりを注視しつつ抑えるべき処は抑え、治めようとしていた、彼なりに心を砕いているようだった。皆はそれぞれにそれが判つて、感じ入るそこここで感謝の笑みを浮かべ、宴会は和やかに進んだ。

宴の席の身の上話は誰かから順番に、と始まつた訳ではなく自然にそうなつた。各人が自分の意見を面白おかしく話す内に、その人の身上が伺い知れるものだった。

食堂の女主人は、そこそこに酒が強い。盛んにお喋りをする内にも、管理人に何度も酌をさせた。冷酒をぐいぐいやつて「亭主は、ふざけてたけど、まともな人だった…」

彼女によると彼女は10年ほど前に、水晶の街で小料理を夫婦で始めたらしい。若き日は2人はミュージシャンを夢見るバンド仲間でした。それはそれは奇抜なライフスタイルを貫く夫婦だった。

だからといって、いつまでも音楽に浸り続けはせず、その情熱は、ご主人が導く形で小料理店の経営に注がれた。夫の口癖は、生きる事（飲食業で生計を立てる事）即・心が奏でるミュージックだった。主人を早くに失いロストした失意は大きかったが、女主人に言わせると食堂の厨房に残る夫婦だけの旋律は今も鮮やかに色褪せず、寂しくはないのだという。息子が一人いたそうだ。少年期に交通事故で亡くしたのだといい、彼女はそこは黙し語らなかつた。

「ところで、私は別に歳は離れてても、管理人ならオツケーだよ」もちろん女主人の酒の席の冗談で、管理人は酒の席ながらの苦悩を、腕を組む「うふふ」の仕草で答えていた。

中村弁護士夫妻は、20年程前に此処に越してきたのだという。それまではZ市街の外れの地区に、アパート住いだつたが、アパートの建替えを機に、住み易く居心地が良い物件としてこの住宅を見つけ、水晶の街に居を移したのだ。

ケンイチに言わせれば中村弁護士とは、驚く程聡明でたつぷりとした知性をふんわりと体現している、そんな人物だった。

会話の中の弁護士の論調は、自分の考えや感想だけを楽しませる為に語らいでおく、そして意見があるのなら伺いましょう。そんな優しい風だから語らいに破綻は有り得ない。優しい皆の相談役とは街の評判であり、管理人やケンイチもそこは頷く処だ。

今晚改めて紹介された弁護士の奥さんは、美術館を訪問する婦人グループの中で、ケンイチもよく見かけた事がある女性だった。

静かな印象、なるほど柔らかな物腰の弁護士にはお似合いで、妙齡でいつまでも可愛らしい野菊のような女性だ。そう言えば、美術館で見かける姿は食堂の女主人と親しく、大掃除の時にはそのグループの縁の下の力持ちの役柄で、明るく振舞っていた。

「私達は、管理人とケンイチさんがデコボコ漫才のようで、面白いですね」

夫妻は声を合わせて笑い、2人共に美味な酒のようであった。

管理人・矢野龍介はと言うと、今夜まず始めにそのバンソウコウだらけの顔を、皆に驚かされていた。

「昼間美術館に。大柄な金髪の美女がやって来まして。見とれて階段を踏み外しました」この説明にはケンイチ、大笑い。

彼には今更話す内容はないかと思われた。5年前に、此処に美術館の管理人としてやって来た事、空手の達人である事、それは西野陽子にさえも知れている、既知の事実だし。

ところが、軽い新事実が語られた。それによると、彼がまだ都会（関東）に住んでいた頃、実は彼にも浮いた話があった、彼は都心の高級クラブのママさんと一時お付き合いをしていた、というのだ。

夜な夜な彼の宿所に、高級外車で乗り付けたそのママさんが現れては、彼を誘惑して大変だったらしい。

これには、皆がすつとんきょうな声を上げた。当時の管理人は、ボロアパートにママチャリしか持たない大男に過ぎず、不相应な付き

合いは結局すぐに破綻したのだそう。

「当時のアンタなら、空手で、いくらでも稼げたんじゃないのかい？」

もったいないと不満を洩らす女主人に、管理人はスコツとビールのコップを空けて。

「まったく、性に合いませんで」

クツクツと笑いながら、彼にビールを注いでやるケンイチだった。

西野陽子は、国税に勤めるお堅い役人以外の部分を、少しだけ明かした。趣味は筋金入りのオーディオキチガイ以外にもちゃんとおつて（へえ、そうなんだと言ったケンイチは、もちろんここで彼女に頭をはたかれた）他に好きな事、それは星の観察なのだそうだ。

「星の観察？」皆が唸った。

星は、いつまでも普遍的にそこにあります、と彼女が言うと、北極^{ボラ}星^{リス}ですね？と、管理人が合いの手を入れる。西野陽子は微笑ましく管理人を見て、ぐつと、ぐぐぐつとワインのグラスを空けた。

ギョツとするケンイチ。彼女の持参したワインは3本だ、確か1本は女主人が飲んだ、じゃあ2本はヨーコさんが空にしている、大丈夫か、ヨーコさん。

星は、色々な見方を許してくれます、そこが素敵です…

西野陽子が語る星とは、北極星を中心に地軸の自転により夜空を巡る星々ではない。彼女は違う視点から眺めるもう一つの星々の姿を話した。銀河座標と呼ばれる、銀河中心と銀河面を基準とする座標系から捉えた、星世界である。

太陽系も自転をし、公転をしている、銀河系の一員として。では、その銀河は何を中心に回っているのか？その銀河系の銀河北極は『かみのけ座』、銀河南極は『ちようこくしつ座』と呼ばれる…

夜空の煙のように見える天の川は、銀河系と言つ星雲を内部からみた側面を観察している姿である。少女の頃、星空ウォッチングの会に参加した時に、大人達からそう聞かされた西野陽子は、なぜそんな観え難いものを観ようとするのか尋ねた。

いい質問をすると笑つた一人の大人が、彼女に教えてくれた。

「では、邪魔な障害物の無い空がある、目立たないけれど、そこは『宇宙の窓』と呼ばれているよ？」

大人が指し示してくれたものが、銀河北極の『かみのけ座』だった。あの部分を中心にして銀河は巡り、その先には遠くまで見える、より透明な宇宙がある…

「見方によつて、まるで違う話でしょう？星空には色々な姿がある…だから素敵です…ひっく！」

ケンイチは、ひっくを気にしながらも、真面目なヨーコさんらしいと感じる、星の話はさっぱりわからないが、ロマンチストなんだなと感心する事しきり。

それにしても和やかだなど、談笑の中でケンイチは思う。こうやって、皆で鍋を囲むという雰囲気の中にいるのは、何年ぶりだろうか？

ケンイチが少年の時、両親が健在だった頃は、無条件にこんな団だん樂らくがあった。

片親となって。荒れた青年期を経てその延長でヤクザになって。暫く経って、或る日ケンイチが実家のアパートに帰ってみると、母親の姿はなくなっていた、母は蒸発していた。

愛人の影がちらほらあって、彼女はそれでも上手く良き母親を演じていたが、ある日忽然と、ケンイチの前から姿を消してしまった。

親子の縁を切りたかったのかと、当時は勝手な母親に怒りを感じた。愛人を探し出し血へドでも吐かせてやろうか。しかし、ヤクザ者の息子と生きるよりマシかもなど、そこは思いとどまった。母は幸せになるチャンスを見つけ、それを選択したのだと苦く納得もして。

母親からは後日、所在を伝えるつもりだったのだろう連絡があったが、ケンイチは届いた手紙に添えられた菓子箱を窓から放り捨て、書面は内容もいい加減な確認で丸めて、ゴミ箱に放り込んだ。母への怒り、荒すさんだ自身への怒りを混ぜこぜにして、捨てた様な気がしたものだ。

それでも思い出せば優しい母だった。蒸発劇の寸前まで確かに母であった。忠告も聞かずバカな道に走った息子に、なぜならそれまで、彼女が用意し続けた食卓の暖かさは、今此処にあるものと何も

変わらなかったのだから。

(全部、オレの我儘わがままから、こうなった)

オレは自作自演で荒れずさんで、結果、幾つかのものを失ったんだ…

ところでこの家には、一体ビールが何本あるんだろうか、と皆が不審に思い始めた頃。

ようやく管理人が腕時計を気にしはじめる。弁護士はそれに気付いて「ああ、いい時間ですね」と声に出す。

先程から西野陽子はすっかり酔ってしまって「コンチクヨー、コラア、ケンイチ」と、ケンイチをポカスカやっている。始まって、あつという間の数時間だった。そろそろ、宴会はお開きだ。

彼はその時、迂闊うかつに洩らしてしまう「今日は、オレなんかのためにすみません」

稲妻のように。

ふにゃふにゃの西野陽子が反応していた。彼女はケンイチの襟首を掴む。

「ちょっと、ケンイチさん、それどーゆー事!？」

しまった、と管理人が大汗になり、弁護士夫妻と女主人が眉を寄せると。視線がケンイチに集まり、同様に(何だって、どういう事だ?)と。

ケンイチ、ダメダ、此処ニイテヨ、と呻き、酔いで自律を失った西野陽子が首元に取りすがるが、ケンイチは寂しげに微笑んでいた。

「実は」と、切り出し。

「オレは、実はゲストなんかじゃありません、ヤクザです。Z会のただのチンピラです。オレは、みなさんを騙していました…スミマセンでした」

「オレ、いなくなります」

管理人は下を向いている。

頭を下げたままのケンイチを、西野陽子はポカスカ叩き続けた

…

「さて、ケンイチさん。これからどうするおつもりですか？」

中村弁護士が、お茶をズズ、とすすりながらに問う。ケンイチは、まだ幾分口ごもり気味に「それは…」と、返答に窮すのだった。

先程、ケンイチが素性を明かしてから暫くが経ち。すっかり片付けられた座敷のテーブルを、今は管理人、ケンイチ、中村夫妻が囲んでいる。

食堂の女主人は、酔いつぶれた西野陽子を「この娘は今晚、私の店に泊める事にするよ」と肩に抱き、連れ帰り際ケンイチを睨み付け「ケンイチさん」と、ドスの利いた声で。

「いいかい？キミがヤクザ者でも何でもかまわないけど、無茶をするんじゃないよ？」

ケンイチは苦虫を噛み潰した顔で「ああ、わかった」と、応えるしかなかった。

ヤクザ者でした 彼が告白してからの経過は、こうだ。

まず、管理人が焦りまくって「私の責任です、申し訳ありません。ケンイチさんは馬鹿モンでしたが、もう大丈夫です」と、そこに土下座をした。西野陽子もなぜかそれに習って「私も知ってたんです。ケンイチさんは、とんでもない奴です」と、ひれ伏してしまう。つくづくチクシヨウと、しかしケンイチも下げた頭を上げられないでいた。

弁護士夫妻と、食堂の女主人は困惑して顔を見合わせていたが、どこか笑みがあった。シヨックを受けた風ではない、なぜなのか？その答えはすぐに明らかになった。

中村弁護士は「西野陽子さんはそれを知っていたのですか？」と問い、コクリと頷く彼女を見て取りニッコリ「それなら、問題はないでしょう」

食堂の女主人も、苦笑이었다。

え？と、今度は頭を下げた3人が困惑になったのだ。驚かないのか、ゲストのケインチの正体はヤクザ者なんだゾ？

「実を言うと。知っていました、かな？」コホンと喉を鳴らし、中村弁護士は笑いながら。

「ネット上の管理人の紹介ブログです、確か最後の写真は寝姿でしたね？背中を、少しはだけていた」

ぐっ、がはっという、伏せた顔での男達の呻き声と女主人の声が交錯した。

「ケインチさんは背中に。あれは流行のタトゥーじゃないね、ハデな刺青いれずみがあるだろう？バッチリ写ってたし」

管理人・テメエ！ちよっ、ちよっとタイム！と、頭を下げたまま口論を始める2人を、弁護士夫妻は面白がる。こんな姿が夫妻のお気に入りなのだ。

「街の皆さん、ご存知のようですよ？だから安心をしてね？」

励ますような、弁護士婦人だ。食堂の女主人も一緒になってからかうのだ。「初めから皆知ってる、事情のある男だろうが、ゲストだから大丈夫でしょ？位のもんだ」

まあ刺青があれば、と中村弁護士は楽し気に。

「やっぱり、その手の人なのかなあ、コワイなあ、しかし好青年だしなあと、街の人気者だしなあと」

西野陽子が、下から覗き込みながら「私は喋っていません、私じゃあナイヨ？」

ともかく笑い話となった。

この際に、食堂の女主人は刺青の絵柄は『千手観音菩薩』である事、腕が24本ある事をケンイチに喋らせ「千手観音なのに、たった24本かい？へー！」「…千本も背中に背負^{しよえ}る訳ねーだろ」「しかし聞いた事がないデザインだね」「オレは美術部だったからナ」「どれ、見せてみ？」「見せん！」

西野陽子は此処に至って安心したのだ。酔いを取り戻し、ぼやんとして。

「良かったネ、ケンイチさん、ずっとココにいて頂戴」

ごちんとテーブルにおデコを突き、彼女はそのまま寝入ってしまうと、これが顛末^{てんまつ}だ。

ケンイチは勧められるままに、濃い熱い日本茶をすする。酔いは半分醒めていた。管理人に目をやると同じようにお茶をすすり、こちらにウィンク中だが。

(コイツ絶対、後でぶん殴る)

ケンイチの瞳は決意に燃えながら半ば、管理人を不思議に思う色だった。

早くから、ケンイチがヤクザ者だと知れていたのに、皆が優しく接してくれたのはこの男のおかげだろう、管理人とは街の住人にとって、それ程絶大な信頼が寄せられる人物なのだ。

だが腑に落ちない。美術館の管理人がなぜカリスマ的な人気を博すのだろうか…街の名士だとしても、一介の人間がこれ程までに信頼され得るものだろうか？

ケンイチの疑念に答えようとしたのは、涼やかな物を出しましよと、林檎や梨を剥いた小皿を運んできた弁護士婦人だった。

「街の皆さんは、過去に傷がある人ばかり。職業を後ろめたく思わなくていいのよ?」

オイオイ、と軽い咎めだての弁護士に、アラ、いいじゃない。

「私だって、若い頃は半ば娼婦同然で…」

ぶっ、ぶっ、ぶーっとお茶を吹き出す男達、弁護士は声を荒げる。

「お前、何もそんな事まで」

「アラ、いいじゃない！」

婦人は毅然として「彼は正直に話してくれたわ、私達が心を開かなくてどうするの？」

うむむの弁護士は、腕組みになり黙り込む。

「私と主人は出会い系サイトで知り合いました、私は男を騙しお金を騙し取るサクラで」

うーむ。

「主人は、詩ばかり記入する変な純情な人でした、可哀想で私は最後まで騙せなかった」

あ、うーむ。

「だから一緒になったんだけど、主人は弁護士のくせに貧乏で、それからが大変でした」

あ、う、ううん！と喉を鳴らしたのは管理人だった「奥さん、別に話さなくて良い事もあります」

「でもね」野菊のように穏やかで慎ましい婦人が、伝えねばならぬいんだと、強いて口を閉じないのだ。

「私達だけじゃない。食堂の女主人さんだって、病弱なご主人と連れ添って、大変な状態でこの街に来たわ」

「八百屋さんだつて魚屋さんだつて、事件に巻き込まれたり借金取りに追われながら、この街にやって来た」

「…この街のお陰なの、私達は皆この街に救われた、美術館に救われたの」

ケンイチさん？と婦人が続け問う「貴方は美術館のゲストなんですよ？」

ケンイチは問われるままに、自信なげに（管理人がうんうん頷いているので）ハイ、と頷く。

「それなら貴方は。ヤクザをやめて水晶の街に住みなさい。住宅や土地が無料になる」

管理人とケンイチは「えっ？」と驚く、住宅や土地が無料になる、という言葉にだ。何だ、ソレ？

難しい顔になるのは中村弁護士だった。咎めるとも戸惑うとも取れる表情になり、彼は妻を見る。

妻は夫にペコリと頭を下げた。

「貴方ごめんなさい、私のお喋りはここまでです、後でしっかり怒られます。だけど、どうかこの子を助けてあげて」

婦人の肩が震えていた。彼女は下を向き、ぽつぽつと涙を零しはじめてしまひ。

「…お前、考えていたんだなあ」

弁護士は、夫人の肩に手をやると力を込めて励ます仕草をし、頼にハンカチを与える。婦人はそれきり何も話さなかった。彼女は生来、草木そくもくのように寡黙であった。

そんな人が今ひと息、懸命に喋ったのだ。ケインチには何がしかの熱意が伝わる、管理人は婦人の懸命な様に涙を誘われつつ、彼らは固唾を飲み弁護士を見つめていた。

今、彼女から端を発した街の事実とは何であろうか、と。

弁護士は尚も、複雑な面持ちで考え込んでいた…

後編・12 後編の終り

「これは、慎重に話すべき件なので」と、中村弁護士は前置きをした。

「妻の言った事は本当です。ゲストなら土地や家屋が無料タダになる。けれどもケインイチさんは、そんな理由で水晶の街に住んではいけません。皆はそれが目的でこの街に来た訳ではありません、住んだ後、公団に助けられた。私達を含めて皆さん、そうだったからです」

ケインイチは眉を寄せる、何の話が始まったのだろうか？

理解は後ほど話の中で、と構わぬ弁護士の視線は管理人に向けられていた、管理人は緊張する。実は、管理人に聞いておきたかった事があります、と弁護士は言い。

「水晶の街・住宅公団 ご存知ですね？」

ハイ、と頷く管理人は腕組みになり「直接の関係はありませんが、美術館の母体事業団の一つです」

中村弁護士は、場の不思議そうな空気に構わず質問を続ける、彼自身幾つかの疑念があるのか。

「美術館のゲストは、管理人が決めているのですか？」

「はい、私の一存ですが？」

「ゲストになる、その基準は何ですか？」

ゲストの資格というかそのような物です、と弁護士が重ねると、未だ話がかめない風の管理人は腕組みを組替える。

「それはですね。美術館に訪問された方で、懇意になった皆さんがゲストです。前任者から強く指示されていたのは「弱者はゲストとして親しく守るべき事」これ位です。但し、ゲストが悪しき人物だと、後々にでも判明した場合、撤回する事はあります。ケンイチさんはヤクザでしたが、行動はまあ（本日を以ってヤクザを辞めると、強く決意しましたから）申し分なく、立派なゲストです」

「うむ、ゆるい基準ですね、と弁護士。」

「はい、大変ゆるくて恐縮です、と管理人。」

オレはゲストらしいが、ゆるくて悪かったな、とケンイチのやけくそ。

「では公団は？管理人がいれば独断で決めたゲストを、どう把握しているのでしょうか？」

「多分、美術館に毎日届く書類で把握している、と思います。黄色い封筒に入った調査票が届きます。ゲストですか？と同封される写真に間違いなければ、この方はゲストですと、公団にはお伝えしています」

ここで弁護士は、考えを巡らせていたのか、視線を宙に移していた。やり取りに、やや間が空く。

目前の男達が顔を見合わせていると、それに気付いた弁護士は「質

問ばかりして申し訳ありません」と詫びて「管理人に、最後の質問です」

「公団が、ゲストに対して特別な諸、便宜へんぎを計らう事を、管理人はご存知でしたか？」

「は？と管理人の目が点になる。特別な便宜？という彼の唸りが、彼の腕組みを解いていた。」

「便宜とは、何の話でしょうか？」

管理人の何も解らない様さまに、中村弁護士は、大きく息をつく。貴方がそれを知らないのか、と呟つぶやきになって。

「不思議な話です。もしかしたら、私情を差し挟ませぬという目的が在るのかもしれない。では、これからお話する事実を、管理人は聞かなかつた事にしなくてはなりません。きっと、貴方に作為があつてはならない事柄なのです」

では、お話ししようと言つた弁護士に、ケンイチはしかめっ面（前置き、長すぎデス）

「妻が言つた事は本当です。ゲストとして水晶の街に住む場合、購入家屋や土地は無料タダとなるようです。いえ、誤解なきように言えば、相殺されるのです。私の場合を説明しましょう。2千万円で、土地付きの住宅を公団の住宅ローンを利用して購入しました。20年で返済の計画でしたが20年後、口座には消えていなければならぬ筈の2千万円が丸々残っていました。理由はローン支払額と同金額を20年間、公団が協力助成金という名目で振り込んでいたからです」

「私達夫婦が、たまたま美術館を訪問したのは20年前です。当時の管理人が、私達をゲストと評して下さった。程なく公団から、水晶の街の格安住宅物件の購入勧誘パンフレットが届くようになり、引越しを決めた或る日、公団から黄色い封筒が届きました。「貴方はゲストですか？」簡単な質問票でしたが、それに「イエス」と答えました、すると数日後、電話帳程もあるぶ厚い手続き書類束が届き…パズルのように難解なそれは、おぼろげに。街はいわば公団の実験都市であり、その協力には様々な特典があり貴方は保護される…それは出来るだけ難解に奇妙な事を告げる？書類でした」

「公団はゲストに対し、協力助成金、協賛金、調査礼金、様々な名目で、例えば一般的な税金まで補填・相殺します、個人の銀行口座に、一方的に振り込まれます。個人事業主などは 食堂の女主人さんはそうですが、売上赤字分がいつの間にか公団により補填されているらしいのです。彼女は10年前ご夫婦で美術館のゲストとなり、この街に住むようになった…」

「なぜ、ゲストがこのように手厚く保護されるのか？管理人、この理由は何でしょう？」

「はっ？気が付くと管理人が質問されている。管理人はアワアワ、慌てていた。」

「私には解りません。私はただ、業務だと思つて黄色い封筒を受け取り、返信を続けてきました。ゲストと認める事は、実は大変な事だつたんですね」

「それを知らなかったのなら、この事実はプレッシャーになりますね？ゲスト認定も大変になる、けれども貴方の方針を変えてはなり

ませんよ？貴方はこれからもずっと、貴方らしい大らかさで人に接していただきたい」

中村弁護士は笑うのである。

「ゲスト保護の理由は私にも、誰にも解らないのです」と継いで。

「私には公団の在り様は不可解です、とてもじゃないが公序とは言えず、異様にすら見えます。しかし、いたずらに資金をばら撒いている訳でもなく、手当てするべきところに見事に為され、行き届いている。例えば、食堂の女主人は、お客にたつぷり料理を食べさせようと、安価な料理料金をを設定するので、毎月数十万円赤字なのだそうです、そこが過不足無く補填されている。どういう風に調べてるんだろうね、と彼女は笑っていました。スポーツ用品店のご長男は、今年大学入学です。入学金が、下一桁まで、きっちり補填されたらしく、我が家のプライバシーは無いぞ、と親父は笑顔の憤慨です。年収500万円の人が、1000万円になるのではなく、秘密裏に詳細な調査が行われ、綺麗に穴埋めが為されるようです。もちろん、お金が全てではありません、しかし否応なくそこから始まる事は、実に多い。街の皆さんが、助かっている事は事実です」

あの、と小声でお茶を汲み直して勧めてくれる弁護士奥さんは、ニコニコニコニコ笑っていた。士はそれがまた嬉しそうに。

「街の住人は。私達も、この話題についてあからさまに触れませんが隠しているつもりはありませんよ？この恩恵に本当に感謝出来ているのです。町内会の集まりで、皆さんと話した事もありました。公団は、なぜこんな事をするのだろう？ぼんやりと、食堂の女主人が言いました「…生きろって事かねえ？」皆で、大きく頷いたものです」

「暗黙の感謝があります。妻が話したように、皆、苦しんで苦しみ抜いて、やっと此処に安住の地を見つけたのです。ですから本当の意味で隣人を愛せる。苦勞した仲間であろうから信じる事が出来る、無言の連帯がある」

この街は、不思議な色をしたコミュニティーかもしれません、と弁護士は湯呑みを握る。彼の瞳は畳の上に座りながら尚、優しい風の中に笑い合い石畳を往く住人達の、個々に向けられていたのだ。

「美術館に惹かれて、皆が自然に此処に集まって来ました。恩恵があるからと、ほくそ笑む者は一人もいません。みなさん、ならばその恩恵を以って社会に貢献できないかと考えています。今、思うのです。公団によるこの不思議な仕組みの真意は、実はそんな、住む人の意識の変革にあるのかもしれない、と」

弁護士はグイとお茶を飲んだ。その深い、澄み切った眼差しでケンイチを見る。

「ケンイチさん、貴方はそんな水晶の街を、どう思われますか？」

ケンイチは無言だった。ただ驚くばかりで、口がきけないでいたのである。

ネオスクリプト・開かれる扉

中村弁護士は「ヤクザを辞めるのなら、私の処で働いてみてはどうですか？貧乏事務所です、決していい給料は払えませんが、コツコツ勉強するのです。まだお若い、道はいくらでも開けると思いますが」と、最後にそう締めくくった。

管理人は「いい話ですね？ケンイチさん」

弁護士婦人は顔をほころばせて「それがいいですよ、是非そうなさい」と、喜んでいた。ケンイチはそう思い出し、苦笑うのだった。

ケンイチと管理人の、深夜の帰路である。

水晶の街の晩秋の夜は、さすがに冷え込む。石畳を歩くと冷たい冷気が首元より忍び入るようで、ケンイチはM-1ジャンパーを自然に羽織り直す。

振り返ると水晶の街の夜景であった。

街灯やまだそこ此処に明かりが残るが、まばらなそれはやがて街が寝入る気配で、しんと静まりかえっている。

住人は皆、過去に傷を持つのです、と弁護士婦人は言った。この街が安住の地なのです、と弁護士は語った。

ゲストが保護される特別な街、不思議な夢のような街が今眠ろうとしているのかと思ひ、ケンイチは感慨深いのである。

「なあ、管理人」とケンイチは、横にいる管理人に声をかけてみる。管理人は、ずっと考え込む面持ちで歩いていた。彼は小声で「何でしょう？」

「アンタも、心に傷があるのか？」

管理人は無言だった。大男は苦く笑うのみで、ケンイチは彼のそんな反応を確かめたかった訳ではない。ただ彼は冷たい空気の中で、口に出し言葉にして、もう一度アウトラインを眺めたい気分だった。

「…不思議な街だな。色々の事が無料になるって、本当かな」

「…弁護士夫妻は優しい人達だな。オレの働き口まで心配してくれた、助けようとしてくれたな」

「…みんな、オレに優しくかったんだな」

石畳が終わり、林道に入る、晩秋の虫達の声がする。

ここで、管理人がポツリと言った。

「私は、今日初めて自分が 美術館の管理人が、なぜ皆さんに大切にしていただけか、その理由が解った気がします」

林道には、蓄光が淡いグリーンのホタル灯が左右に並び、夜の山路を照らす。落ち葉重なる自然な土の道のようにだが、歩んでみれば石ころ一つも無い、明らかに整備されている。

これは一種の参道である、人が公とする何かへの。美術館だろうか。

やはり美術館と街は何か密接な関係にあるのだ。

2人は林道が山道に交わる丘の稜端^{はじまり}、美術館の入口に出る。

管理人は、ヨイシヨと鉄柵を開き、目線を上にあげて、今日は星が綺麗ですね？

見ると、雲ひとつ無い夜空に、砂塵を散らしたように星々が輝いている。

ケンイチは、ぼんやり西野陽子を想う。

「ヨーコさん、酔ってたが、大丈夫だったかな」

「彼女は、酔っても素敵な女性でしたね」

男達は微笑んで小径^{こみち}を上がり、美術館の入口に立った。さて、と息をつく管理人である。

彼は「ケンイチさん？」と改まって「私は、今日ようやく幾つかの事に合点がきました。貴方には未だに、たくさん解らない事があると思います」

ハイ？と、ケンイチ。考えてみる…此処は解らない事だらけだゾ。

（【恋文】にオーディオ・システム、駆け込み寺のような街、昼間の戦闘機エトセトラ、だな）

明らかに解らない事だらけだなと、内心で指を折っている風のケンイチに、管理人は微笑む。

「私が知っている事を全て、貴方に話しましょう。それで謎は解けるかもしれない、ただしその前に」

管理人は「少し、物語をファンタジーに持っていきます」

はあ？ファンタジー？

空に飛行機はナシ、と管理人は仰ぎ指差し呟いて、ワイシャツの袖をめくる。

「…離れて下さい。45度の角度で空と私を同時に、全景を捉えて見ていて下さい」

何だ、どうしたとケンイチが後づさるのと、管理人がドリヤ！と唸るのと、まばゆい発光があり空の彼方にギョーンツと光が飛び去ったのは、同時だった。

空気の焦げた匂いがする。管理人は、空に向かい45度の角度で正拳突きをしたのだ…が？が、ビ、ビームが出た！レーザー光線発射を人がやった！

腰を抜かすケンイチである、アワワ！

プラズマです、と管理人が鼻で笑う。偉そうな高飛車だ。

「公団は関係なく、私の師匠の関係者に大学の博士がいて、その方が様々に計測・分析をして下さり…」

「私の体内の、ごく僅かな重原子が何かの理由で体外にトンネル効

果で現れ、その際のインフレがイオンで…よく解りませんが今の、
いわばプラズマ弾？が放たれるらしいです」

「集中して一度しか放てません、気を練ってようやく一度です。こ
れを初めて見た学者の先生は、ホエー！と驚きました」

「数センチの鉄板が、シユンと抜けます。電柱なら木っ端微塵です。
どこまで飛ぶのかというと、少し重力の影響を受けつつ、地球の電
離層で対消滅する…とか何とか」

「海外のSF映画に、銀河を守る何とかの騎士というのがいて、ご
存知ですか？私は一発勝負で、一度だけ何とかの騎士に勝負が挑め
るかも知れません。ライト・サーベルでギャンと跳ね返されて「地
球にも戦士がいるのか！」と驚かれそうです、ハハハ」

ジタバタするケンイチの奥襟を掴んで離さない管理人は笑う。が、
ケンイチは更にジタバタして「オレは帰る」「おや？どこにですか
？」「べ、弁護士の家」「何を言ってます？」

「オレはただのヤクザだ、ファンタジーは無理だ」と、ケンイチが
まくし立てていると、今更逃げられんぞ、ひゅ〜ドロドロ〜と強面
で脅しふざける管理人だったが、彼はすぐに冷静な笑みを浮かべて、
にっこり。

いつもの管理人の笑顔で、彼は言った。

「驚かせるのはこれ位です。後は何も出てきませんから、どうか安
心をして」

ケンイチが未だうろたえているの見て取り、腕組みの管理人は「変

「ですね？」と首を傾^{かし}げて。

「ケンイチさん？ここで貴方が体験した事、全てファンタジーではありませんか？時価数百億円の【恋文】は本物ですよ、オーディオはどうです、追手は撃退するわ、戦闘機は飛んでくるわ…そもそも、貴方と西野陽子さん。バカな男と国税キャリアのロマンスなど、最高のファンタジーです」

彼はプラズマ弾の件は申し訳ありません、と頭を掻き「驚くのは判っていました、話しておかねば、私のこれから説明するお話を理解できないだろうと思ひまして」と言いながら、美術館入口のガラス扉の施錠を解く。

「それでは。水晶の塔・美術館と水晶の街、それにまつわる不思議なお話をしましょう」

管理人は、建物の扉と物語の核心という扉を、今同時に、静かに開いたのだった。

ネオスクリプト・白い秩序

1Fロビー、正面より右手側の奥ばった長椅子にケンイチと管理人は並んで座っている。

顔を赤くした疲れたような2人の酔っ払いがぐだぐだ休んでいる、そんな構図だ。

管理人は、先程から気持ちが良いのか悪いのか、はあとか、うぶ、とか言っている。ウイスキー・ボトル1本、日本酒半升、ビールを中ビン36本超えて飲んでいる、完全な呑んだくれ。

かく思うケンイチも、かなり呑んではいた。ただケンイチは、先程の管理人が放ったプラズマ弾という奴のせいで、どうしても酔いに任せられずにいて、横にいる管理人を色物と見てしまう。管理人は時々、うけけと笑っているし。

だが外観とはうらはらに、管理人の思考は明瞭だった、いつしか日々の会話の風だ、話す程に引き込まれていく…何食わぬ顔の管理人と疑問符だらけのケンイチ、いつもの2人だ。

さて、どこから話せばいいのやら、と管理人は両手の指を組み、そこにアゴを置いて思案深げだった。

「私がここに来たのは5年ほど前です。水晶の塔・美術館の管理人として、私はやってきました」

「前任の美術館の管理人は、私の空手の師匠です。以前、食堂の女主人は、面識があると言っていました。彼女をゲストにしたのは、

師匠でしょうね。中村弁護士のように、穏やかで懐の深い私の師匠です。管理人としての師匠は優しかった事でしょう…私は、師匠の勧めでこの仕事を選びました、強く幹旋あっせんされたというべきでしょうか」

「5年前の当時の私は、はたから見ると、格闘技界で成功をした売れっ子の大スターでした。昼間に金髪の大男がやって来ましたね？彼はしきりに、私のナイスなカツコよさに憧れると、素敵だと話していたでしょう？（ケンイチはいいえ、と首を横に振る）当時どのような道も選択できました。しかし諸事情があつて…」

諸事情、というところが、小声になった。ケンイチはそこに気付かなかつた。

管理人が微笑む、うん？とケンイチ。

「いいえ」と、管理人は「…話を続けます」

管理人は組んでいた手の指を解き、おもむろに両手の甲を見せる。

相変わらずバカでかい、野球グローブのような手だな…おや？

ケンイチは少し目を細め、じつと観察して気付く。両手共、手の甲にぼんやり傷跡がある。見た目綺麗だが色が違う、裂傷の跡だろうか？

管理人は、薄く笑って指を組みそこにアゴを置くまた同じポーズだが、視線は宙に向けられていた。

「その頃私は、空手の正拳が突けなくなっていました。速すぎて、

です。目標物で拳が破壊するというケースもあるのですが、私の場合は。空気の壁によつてすら…手の皮や肉が裂傷を負うようになりました、音速の壁というものです。それは保護具でどうにでもなる事ですが、では私と闘う相手はどうでしょう？たまったものではない、大怪我をする。私の武道論は、決して殺し合いではありません。周囲の思惑とは別に、私はその世界の桧舞台から去る決意をしました」

そう言えば、地下フロアにあるサンドバックはカチカチに固まっていた、とケンイチは思う。使っていないかったのか？謎が一つ解けた…

「ちなみに プラズマ弾を放てるようになったのは、偶然です。ここに来て一年ほど経った頃でしょうか？早朝の丘で鍛錬をしていました。全力で突けない拳で相手を打ち倒す…本質を射抜く正拳とは如何なるものか？などと考えたひと突きが、プラズマでした…あの瞬間は忘れられません。静かでした、風は優しく、丘の芝草が辺り一面で波のようにそよぎ…遠くのヒノキの大木がぶつ倒れました（笑）プラズマは、拳を失った私に神様がくれた贈物だったのかもしれません。しかし、当時の私にはそれを上手くコントロールできず今は百発百中デスヨ？真正銘、結局私は空手を封じられたのです。制御できないそれを使ったら最期、人を殺してしまう。これではもう武道と言えなかつた」

「師匠は心配して下さいました。比肩するものなき孤高、などと褒めていただきましたが、師匠は悲しげでした。病院にも連れていかれましたが…精神病院でした！くそっあの老いばれじじい！」

師匠に向かって何て事を言いやがるとケンイチは思うが、管理人は激昂したきり寂しそうにしている。そんなものかなあと（いや、そ

んなものじゃないゾ」と少し情を移してしまふ…

「それで、私は、管理人の仕事をせつせと頑張る事に決めたのです」
管理人の口元が、決意の真一文字に結ばれている。うんうん、と頷くケンイチ…軽い酔いどれの男達。

「けれども」と管理人が言うので、ケンイチが苦く聞いてやる、変わった類たぐいの愚痴話なのか？

管理人が、思わせぶりに笑った。ただの愚痴話ではないという深い色が、その瞳の奥にあった。

「…管理人の仕事は、ひどく単調なものです。美術品等の管理は当たり前前にあり、世界的名画の管理は確かに重要な仕事かも知れないですが…ご存知のように丘の手入れと、住宅公団から毎日届く郵便物の整理が、主な仕事です。これが毎日続けられる。私は息が詰まってきました。師匠は、なぜこの仕事を斡旋したのでしょうか？私为空手を失ったから？楽な仕事だから？…ところが軽微な業務に比して、私に支払われる給料は高額でした。大企業の部課長クラスの年収が保障されているとお話でしたが、とてもじゃないがつりあわない…待遇の良さも、返って私は悩ませるようになりました。私はこんな場所で何をやっているのだろうか？いつしか悶々とした日々を送るようになり、管理側に問い合わせてみる処となりました」

「管理側は、正確には『水晶の塔・美術館振興財団』という法人です。水晶の街・住宅公団とは関連グループのようで、具体的に動くのは決まって公団です」と、管理人は前置きをした。

「始めのうち、贅沢な苦情では？の一点張りの返答ばかり 私の質

問になかなか答えてくれない管理側でしたが、ある時、責任ある立場の方とお話をする事が出来ました。パソコンのビデオ通信でしたが、嚴重なセキュリティ下でした」

「パソコン画面の奥は、真っ白い大きな部屋でした。大きな、これも真っ白いテーブルがあり、そこにはごく普通のビジネスマン風の老人が座っていました。背後の窓は逆光で、人物の姿は良くわかりませんでした。ビルの一室のようでしたが、ともかく一面が真っ白でした。そんな中で老人は言いました：大きな取り組みが行われている。美術館の管理・運営はその中核である。だから何も言わず、何も悩まずに頑張つてほしい…」

大きな取り組みとは何だと思えますか？と、管理人がケンイチに問う。

えっ？と。こんな時いつも頭がついていかないケンイチは慌ててしまふのだが、管理人は構わずに。

「大きな取り組みとは何か？それは、戦争と逆の行為である…と老人は言いました」

「目的は、具体的な人類を進化させる試みである…」

「は？」固まつてつしまふケンイチである。

ハハハ、と笑う管理人はやはり構わない風で。まるで聞き手などいないかのような顔をしていた。

「人間の歴史にはこれまでに多くの愚行がありました。戦争、企業間競争です。それに人は血眼になって湯水のように、労力と資金を

投じてきた、最期には何も得られないというのに。それでは、そうでないものに、湯水のように資金を投じる…それが大きな取り組みだそうですね、戦争と逆の行為です」

「目的は人類の進化だそうです。生物学的に行き詰まっている、人類の進化にメスを入れる。脊椎動物の骨の数、ある時代に至って以後、もう変化をしていません。哺乳類の指の数は5本の左右対称、霊長類が持つ長さの比率が理想的な最終形態であることは、DNAが持つ設計図の中で既に決まっているそうです。そこに生物学的変化の新たな波の発生を促す…そのきっかけは何であるのか？」

「幾つかの因子の選択肢があり、未だ進展の可能性がある脳の働き、未通知の人の心、とりわけ音楽や芸術で得られる感動、もしくは創作心…紆余曲折、試行が在ったの末に、それが選ばれたのだそうです」

「私は疑念しました。実験室で行われる話ではありませんか？我々に関係ないではありませんか？と。しかし老人は笑いました。それでは進化ではなて、改良・改悪であろうと。そのような手法が、生態系の可能性の種。進化を妨げてきたのだと。進化とはごく自然にやってくるものだ…」

「学術の構築、突き詰めた科学の進展によって世の中は便利になりました。重い物は荷役の機械が運びます。飛行機で一足飛びに、海外の友人に会うことも出来るようになりました。変容は続きますが、それが今の限界なのだそうですね、そしてそれは果たして正しい姿であったのか。一方は潤う、けれども同じほどの負なるものがあるのではないか？…一つの国家が企業が、競争に勝って繁栄したとします。それと同じ程の滅亡があるのだとすると、例えばそれは、細胞の暴走的増殖現象の一面をみているのではないか。老人は社会をそ

う総じたのです」

「老人から、美術館の運営には莫大な資本が投じられていると聞きました。時価数百億円の【恋文】など簡単に購入できる程です。水晶の街について私は今日まで、本当に何も知りませんでした。中村弁護士のお話によれば、どうやら公団は大きな取り組みの中の一部のようです。大きな秩序の中で動く歯車の一部ではないでしょうか？ その時の老人の話では様々に充てられる予算は、まず初めに数兆円。その規模で随時充てがっていくとの事でした」

「国家プロジェクト…と私は画面を忘れて唸りました。画面の奥で老人は笑うのです、国には出来ない試みだと。白い部屋の大きな白いテーブルに座った彼は「一握りの人間として利益を独占し続けた揚句、繰り返される歪に大いに嫌気がさして、一握り以外の利益を考えるようになった趣味の悪い金持ちが始めた事だ。未来への悲願と良心以外に、私には何も残っていない」と笑っていました」

管理人は宙を見つめたまま「…信じられますか？」

ケンイチは「…信じられません」

「てか」と、ケンイチは呟き「数兆円って、いくらだ？」虚ろに目を彷徨わせている。

管理人は吹き出して「実は私も全っ然」大きく息をついて「信じられませんでした」

「信じられない話でした。人類の進化に芸術、美術館ですよ？逆の行いだからといって、戦費のような金額です」

2人の間に、当たり前に間があつて。「けれども」と管理人が口を開く、トーンが落ちている。

何一つ信じられないケンイチだったが、信じられぬままで、語調が変わる空気を感じ、耳を傾けていた。

「…けれども私は、老人の話を信じるようになりました。2つの出来事がありました。これからお話するそれが、私の疑心を払拭したのです」

落とすような管理の言葉がそこに響く。ロビーは尚も静まり返るのだった。

ネオスクリプト・黒い秩序？

管理人は、おもむろに話し始めていた。

「私が半信半疑のまま、日々は流れていきました。真実は明かされましたが、何も変わらない、淡々とした日常でした。私はあまり深く考えない事にして、それなりに納得し、落ち着いて仕事をしていた或る日の事です。私は再び、白い部屋の老人から連絡を受けました。事務仕事の中の一本の電話です」

「…対決が迫っている、敵を倒してほしい」

は？のケンイチ。

「突然、そう告げられました。何の話だろうと私が理解できないでいると「殺し合いになるだろう」受話器の奥で、老人はそう言いました」

改めてケンイチはギョツとする。殺し合い？

管理人はさほど表情を変えない、宙を見つめたままに。

「あくまで可能性の話です。しかし十中八九、そうなる。それが老人の言わんとするところでした」

ケンイチは言葉が出ない。殺し合いとは尋常ではない。そんな連絡をしてくる白い部屋の老人とは、とんでもない悪党なのではないのか。

聞き手が眉をひそめるのに気付いたのか、空気を読んで管理人は「白い部屋の老人は、悪人ではありませんよ?」

上手く説明できないと、やや困りがちに「端的に表現するなら」と前置き「なぜなら、対決する敵こそ悪人でしたからね?」と、苦笑う。

「敵は悪人も悪人。なにせ相手はテロリストです」

は?テロリスト?

ケンイチは声に出し少し考えてから、たちまち湧き上がる強い疑念にさいなまれた。テロリスト?殺し屋の?高級な?物騒なタイプだろうか。爆弾犯人・ハイジャック犯人・政治犯?ともかく、そんな奴となぜ管理人が対決をする?

「敵対する勢力がある。それは恐るべき強さで、こちらには抗する術すべがない、そこで私に。こちら側の最期の切り札になってほしい、と老人は言うのです。敵対する勢力とは、一人のテロリスト率いる巨悪である、とそう聞きました」

管理人は更に苦々しく「テロリストの名は、ナイル」

ケンイチがあっ、と合点する「ナイルって確か?」「そうです、昼間の戦闘機の後に乗っていたアイツです。ナイルとは多分通称か、コードネーム:彼は日本人です」

深くため息をつく管理人だった。

「老人によると、ナイルは凶悪で強い力を持つ、世界的なテロリス

トなのだそうです。老人は最期に「ナイルと闘ってくれ」と告げて一方的に通話を切ったのです。私はもちろん、殺し合いに加担するつもりはありませんでした。まったく心外で、困惑しました」

管理人は懷述ムードである。淡々と語り表情が無い、ただ。

今、管理人の静かな面は恐ろしくも見えた。鍛錬を尽くし孤高を極めた武道家の素顔であろう、それを垣間見せる程に、彼は何を語るうとしているのか…

白い部屋の老人から緊迫した連絡を受けてから程なく、その時はやってきた。

或る日の遅い午後。その日も相変わらず、早くから来館者ははけており。

既に静かになった1Fロビーの奥で、管理人が公団の書類に目を通していると、そこに一人の来館者が現れる。

身長は180?を越え、やや細身(今のケンイチ程だ)長めの黒髪で、優しい表情をした黒いスーツの男。

彼はふらりとやってきて、美術品を観賞する様子も見せず、まっすぐ事務机に歩んできた。

「失礼、管理人だろうか？」

管理人は「ハイ、私です」と頷き、机から顔を上げてまず驚いた。

目の前の男は、なんと凜々しい男だろうと。

瞳は大きく切れ長で、鼻筋は通り、美しいアゴのラインは美術品の彫刻のようだ。何者だろう？（韓流スターかな？）

驚き見とれる管理人にも無関心に、男は微笑んで。

「私は、ナイルだ」

管理人は、ギクリと体をこわばらせる。あつげにとられ、姿に見入る管理人だった。

この男が、テロリストだろうか、そうは見えなかったのだ。

凶悪なテロリストなら、迫りに満ち、戦いの遍歴を思わせる頑丈で屈強な風貌である筈で、少なくともそんな匂いを漂わせるものではないのか？ところが、目の前にいるこの男は鮮やかで爽やかで、まるでどこかの映画俳優のように、クリーンな、例えば今華やかな銀幕の世界から垣間出た、風なのだ。

しかし、と感じるものもある。その笑みは冷笑で、瞳は恐ろしく冷たい。得体の知れない何か、秘めるものがある。

「私を狙っているのだろうか？」

ナイルは笑い「狙われるのは性分じゃない。こちらから出向かせてもらった」

そして「表に出てもらおうと」と低い声で告げて、クルリと背を向ける。

彼は足早にロビーから姿を消してしまい、その時に我に帰って、慌てて立ち上がる管理人だった。

「待て、ちょっと待ってくれ！」

声は届いていないか、届けども無視をされたのか。落ち着け、話し合おうと呟きながらバサバサと机上を整理し、既に扉から出て行った背中にしばし遅れて、管理人はナイルを追った。

「冗談ではない。殺し合いなど不本意の極みだ。なぜ戦う必要がある、私は初めから決めているゾ、絶対に戦わない。対立する理由があるのなら、それは話し合いで解決できないかと、耳にして以来ずっと思案していたのだ、それを伝えねばならない。」

果たして管理人が、丘に追い出してみると。

既にナイルは丘の中央に立っていた。蒼ざめた管理人を、彼は面白そうに笑っていた。

「ナイルだな？聞いてくれ。私は事情を知らないし関係がない」管理人は歩み、立ち止まり、違う違うとゼスチャーし、また歩みながら言う。

「私は戦わない、戦う理由がない、そもそも我々は憎み合っていない」

晴天の丘は静かだ。その情景を遠くから見ると、2人の男が丘の空気を楽しんでいるようにも見える。

美術館の入口に続く小径こみちにナイルが乗りつけた濃紺のスポーツカーが、芝の藍あおの中で美しく映えている。

ナイルは笑顔のまま、懐から自動拳銃を引き抜き、今、スライドを引いた。

（ピストル！）

管理人は、目を見開き（そうか、テロリスト…銃器を使うのか）と、噴出ふきだす汗と共に焦燥する。

「戦わない？では、好きに死ね。お前の自由だ」

ナイルの言葉が、閃光のような殺気が、管理人を襲う、と。

本能が、管理人を突き動かしていた。というより、あまりに極端な殺気の集中に反射的に…管理人は自ら封印していたプラズマを放つ正拳を、その一瞬に振るっていた。

2人の距離は、まだ10メートル以上離れていた、プラズマ弾ならば至近である。

しかしナイルは不思議な事に、それをかわしていた。

管理人が的を外した訳ではない、また、プラズマ弾がヒョロヒョロと飛び進んだ訳もないが。管理人が放ったその時、瞬時に距離を抜いた筈のそこには、既にかわしていたナイルが立っていたのだ。プラズマ弾は、ナイルの肩口近くの宙を射抜いていた、紙一重のスル
！。

ナイルは目は丸く、だがさほど驚いてもいない様子で「戦わないと言った割りに、とんでもない隠し玉だな？」

管理人は恐ろしくなって、体を震わせていた。

プラズマ弾をかわしたナイルに、その動きに戦慄もした。だが戦わないと強く決意したにもかかわらず、反射的にせよ殺人技を使ってしまった自身が恐ろしかった。自身の武道観が瓦解する音に、体が震えていた。

ナイルが近付いてくる。

管理人は目をきつく閉じて、次の瞬間を待った。

長い静寂とを感じるが、つかの間の沈黙だったか。ナイルが不思議そうに問う。

「目を開ける、何のつもりだ。戦わないのか？」

「不本意だった。私はお前と私自身を欺いた、早く殺せ」

ひと呼吸あって。

「殺意は無かったように感じたが？」

鼻先でナイルが笑う気配だ。管理人がゆっくりり瞼を開くとナイルは傍に立ち、自動拳銃をクルクル回して見せていた。

「カスタムタイプSIG22口径。ウルトラ・ブレード（超撤甲弾）は装甲車も打ち抜く。何も感じず楽に死ねたものを、愚かだな？」

ナイルはふふん、と笑ってピストルを地面に放り投げて「さて、こんな物は使う気が無くなった」と言った。

管理人は目をむく、戦いは終わったのか。

ナイルは、軽く腕組みをして、世間話を始めたかのようにだった。

「今の技は興味深い 矢野龍介、少しは調べている。百年に一度の空手家だそうだが、まんざら戦えない訳でもなさそうだ。ただの武道家がなぜ私の刺客になり得るか？理解に苦しんだが、今の技なら危なかった」

管理人は無言だ。戦意は初めから無いのだ、口論にはならない。

「今の光のようなものは、何だ？」

「あれはプラズマ、らしい。実は私にも制御できないし一度しか打てない、だからそれは申し訳なかった」

「それは気にしなくてもいい。どうせ殺し合いだ」

「殺し合い？それは、こちらが望んでいない事なんだ」

管理人が戦いを否定して、首を横に振る。

ナイルは、いいやこれは殺し合いだとそれを真似る。

「そのプラズマとやらは、お前の空手流派の技の一つなのか？」

いや、と苦く否定する管理人で、偶然使えるようになった、この丘で鍛錬を続けていつしか会得したものだ、と彼が呟くと。

ふふん、とまたナイルは薄く笑い、管理人を見て、次に丘を見渡し美術館に目をやった。

彼は、暫く何か考えていた風で、おもむろに口を開く。

「お前達の組織をひねり潰すのは容易たやすい。正義を標榜してそれを振りかざしたところで、お前達はまるで無力だ」

「お前達は甘い。奇麗事で武力すら持たず、世界を変えられると幻想している」

「お前達は、まるで正義のボランティアだ。我々に対抗する？ 歯牙にもかけぬが」

ナイルが管理人に視線を戻す。

「お前は面白いな？ プラズマが、この綺麗な丘で自然に体得しただと？」

ふざけるなよ矢野龍介、武道にそんな美しい話があるものか、と呟くナイルの周辺の空気が擦れうごめく。凄まじい殺気を、ナイルは漂わせ始めていた。

「では百年に一人どころではない、お前は38億年に一度の逸材だ」

一瞬だけナイルの笑みが残る。ナイルは「私も望みを言おう」

「全力で戦って見せろ、矢野龍介。こちらもお前の得意分野で戦ってやろう！」

ナイルの正拳が、唸りを上げて管理人の顔面を襲う。

管理人は、咄嗟の十字の受け手でそれを止めるが、その凄まじさに息を呑む。呼吸を間違えていれば、腕の骨は砕けていた…ナイルの打撃は目にも止まらぬスピードで、硬く重く芯のあるムチのようだった。

戦う戦わないのリズムではない、否応無く、撃ち合わねばならない、肉弾戦、管理人のモードだ。

（プラズマは一度だけ。不本意に殺す心配はない、ならば）

管理人は瞬時に後ずさり、覚悟を決め 殺さず、打ち倒す！と、体重を返し攻撃に入る。

ナイルは管理人の一瞬の反転に驚くが、彼はそれ以上の圧力で管理人にぶつかる、尚も笑いながら。

管理人は強い、だが更に強いのはナイルだった。

管理人・矢野龍介は知らなかったのだ。彼の力ではナイルを倒せる筈もない事を…

ネオスクリプト・黒い秩序？

管理人は真顔で遠い目だ。

「私とナイルの戦いは、熾烈でした。そう、いい勝負でした。なかなか決着がつかず」

男達の壮絶な戦いが目に浮かぶようで、ケンイチも遠い目になる。

「戦いはネコ戦へ」

「ネコ戦…」

ネコ戦って何だ？はい、お互いが持つてるネコグッズを持ち寄り、どちらが優れているか決めるものです。それがネコ戦？はい、あの、もちろん冗談ですが、少し気が和みましたか？

「貴様！」

ぐあっと、気が狂いそうになりケンイチ。

「てめえ、話をここまで引っ張って何を今更こんちくしょう！脱線してやがる？」

「だって実は。本当のところ私は、こてんぱんにやられてしまって」

「泣き言はいい！和めようとか、わからん話を入れるな！」

せつかく真剣に聞いてんだ、と怒り心頭のケンイチだが「でも、死

んでないんだナ？良かったな？」

はい、と頷く管理人の懐述は続く…

その男の名はナイル。彼は世界の一切を、暗躍のテロ行為で支配するテロリストだった。

彼の成り立ちは、日本の一実業家の傭兵から始まる。

十数年前、ある一人の若き実業家が日本国内の事業で成功を収める。それはごくありきたりな、ビジネスの成功劇だった。

超弾性ガラス 割れないガラスの開発に成功するのだ。それは、ポリ・カーボネイト樹脂に取って代わる新素材として、瞬く間に世界市場を席卷する。結果若き実業家は、巨万の富を得る処となった。

人も羨む成功者となった実業家は、更に栄光をと野心を抱く。それは暗く醜い「力づく」でもという野心であり、この頃にナイルは見出され傭兵化される。

力に依る謀略を目的に、ナイルは徹底的に洗練された。

ナイルは10年間世界各地を渡り歩き、過酷な修練を経て、世界中の格闘技・暗殺術を身に付ける。その間並行して非公式な第三国と結びつき、彼は、諜報術、暗殺術、多彩なテロ術、謀略活動の様々な経験をも積む。

銃・火器兵器の扱いに自在になり、その技術が格闘術以上に極めら

れた頃。彼は自らを中心、大規模かつ高度な諜報組織を東アジアに布陣していく、ナイルの黎明期である。

彼はまず、日本国内でその悪しき力を発揮した。若き実業家が望むままに「力づく」であらゆる組織、利権を手中に収めていく。会社組織の乗っ取り、経営権の略奪、政治的裏取引。許されない犯罪行為の限りが尽くされ、常にナイルが勝者となった。

ある時期に、実業家はナイルに飲み込まれて姿を消す。この頃ナイルは既に巨額の個人資産を持ち、多角的な明晰なブレーンを有し、彼が実業家に取って代わる事はごく自然な成り行きだった。

そして日本の、政財界のトップの顔ぶれが半数以上変わる、新たな台頭者達は、皆ナイルの飼い犬だった。

彼らが絶大な権力を行使する…誰も知らない背後で、日本はナイルが支配したのである。その力は、次に西の超大国を陥れ、EUを凌ぎ、もう新興国ではないアジアの眠れる獅子をも謀略していく…

その男こそナイル。彼の「力づく」は独自の軍事力にまで進展した。

国内の支配を確立すると、彼の組織は数々の科学技術を開発していく。それは技術公開すれば、更なる巨大利益を生んだ筈だが、ナイルはそれを秘密裏に秘密裏な事業、軍事産業に転用していった。

まず、コンピュータの画期的な新しい機械言語（マシン語）が開発される。それに伴い汎用OSが再開発され、ソフトウェアCPUなるものが実装可能となると、従来の制御不適分野が開拓された。

パルスジェットエンジン。プラズマ駆動機関。派生した巨大虫羽の推進システム開発と、レーザー兵器の開発等々。それらが詰込まれたステルス戦闘機を主力とした空軍戦力を核に、ナイルは「本格的な軍事力を有する」レベルまで軍事組織を構築する。

巨大地下設備下で過酷な訓練を繰り返し、秘密裏に準備されていたそれが姿を見せたのは。ナイルの諜報機関が画策しお膳立てした、ある日勃発した西アフリカの局地戦だった。

それは、希少鉱物の利権の争いに端を発する。

アフリカ西部の2つの国が、それぞれ政府と、反政府の危うい関係のまま、それぞれが後ろ盾に西欧諸国を擁してぶつかり合う。西欧諸国は表向き、ごく僅かな防衛的援助を行うものである、実戦闘には参加しないと表明する。アジアの眠れる獅子までが、模様眺めの周辺警戒で派兵すると謳った、単なる緊張であるとメディアは伝えたが。実は各国やる気満々で、西の超大国は我が物顔の侵略をすべく、相当の兵力をそこに準備していた。

戦闘がはじまると、西アフリカの局地を、焼き尽くし、蹂躪し、波のような火器兵器の炸裂がまるでを開墾するように大地を舐めていく。そこに突如、正体を明かさぬままのナイルが軍事介入したのである。

各国の空軍は、数の上で圧倒的に勝ったが、まったく異質の戦術―ステルス機体の決着は光学視界下のドッグファイトに結実するといふ、異形の昆虫の羽根を持つ戦闘機（こいつ）に悉く撃破され、甚大な損失をこうむったあげく制空力を失う。

千機を超えるナイルの空軍は、アジアの眠れる獅子の空母に依っ

て秘密裏に、インド洋南に運ばれていた。次世界の制覇をもくろむ
大国とナイルとの密約である、密約は 当面の、西の超大国の戦力
を削ぐ事。

ナイルの戦闘機は暗雲となって、かの国が展開するインド洋艦隊、
第7艦隊に襲い掛かり派遣勢力を壊滅させる。僅か1日の局地戦で、
西の大国はその持てる軍事力の30パーセントを失う事となった。

更に同時刻。その国は自国内で2度目となる、同時多発テロの災
厄に見舞われる。五稜郭の地層下フロアで、小型熱核弾頭が炸裂し
た。大西洋を望む宇宙センターで、周辺空軍基地で、人の手に依り
持ち込まれた超小型の中性子弾が閃光を放ってしまう。

この時、西の超大国は視力を失い、手足に大怪我を負った。何か
を告げる黒煙がその国から立ち昇るのを、多くの者が目撃した。各
国がその犯罪行為を糾弾したが、早い時期に犯人像を特定できずそ
れが命取りとなった。

その男たるやナイル。彼は経済をも支配した。

西アフリカ局地戦の西欧諸国の敗退は、フタを開けてみると私欲
剥き出しの各国の実態もあつたが故に、メディア管制が布かれ（あ
れほどの大騒ぎが）明るみになる事は無かつたが、西の超大国を襲
った多発テロが、世界の金融界に激震をもたらした。数日と経ず、
世界同時株安が起こり、世界の金融界は崩壊する危機に陥る。

この頃ナイルは世界中の裏組織と結び、幾つか巨大ヘッジ・ファ
ンドを形成していた。ヘッジ・ファンドは、ナイルの基盤に資金を
集めるM&A（企業買収）を行うごく当たり前の（いささ過剰な）
経済活動を見せていが、世界同時株安を以ってある国と心中をする、

西の超大国だった。

その時ナイルの巨大ヘッジ・ファンドは、一斉にドルを売りばら撒き、その価値を紙切れに変えてしまう。持てる力を全て尽くして自殺したそれは、引き換えにかの国の経済に重大なダメージを与えた。

ドルの価値が有り得ない程下落したにもかかわらず円、人民元、ユーロの相互価値が持ち直す、いわばドルが独り基軸通貨から脱落したのだ。

世界同時株安は、世界金融恐慌だった。IMF（国際通貨基金）IBRD（国際復興開発銀行）そのものが機能不全に陥ってしまう。輸出入で利益が保証されなくなったかの国は国債すら発行できなくなり、復興を期すべき時に自らが持つ双子の赤字に窒息して、事実上終焉したのだ。

きっかけが在り、西の超大国は凋落^{たふ}していく、それは歴史上のどんな帝国も巨大国家も、避ける事が出来ない同じ道だった。

一方、ナイルはこの時に数少ない経済の勝者となる。

彼が経済の復興を牽引した。その手法は、第3国に資金をつぎ込み振興させ金融市場を奮わせた揚句、金融デリバティブを駆使してつぎ込んだ数倍の利益を回収するという、いわば西の超大国が使った手口で、である。

ただし、ナイルは得られた利益を実体経済へと、注入を続けた。結果、世界経済は実経済とマネー経済がほぼ拮抗する比率に近付きながら持ち直していく。

世界同時株安からの脱却には数年を擁した。しかし数年後、世界GDPは120パーセントにまで回復し、世界各国にナイルの傀儡かいらいが溢れる事となる。

ちなみに白い部屋の老人は、ナイルに利害関係を持たない僅かな成功者の一人である。彼は確かに日本国内、世界規模に巨大な経済基盤を持っていた。もちろんそれはナイルにとって無視出来ない存在だったが、ベクトルが逆であり実態が旧時代の彼は、幾つかの大企業の経営者に過ぎなかった。時折対立する事があった。しかしナイルには笑える小さな反勢力に過ぎなかった。

その男はナイル、一人のテロリスト。彼の支配は誰にも止められぬ域にまで遂には達して、彼は史上誰も成し得無かった世界統一王国の、霸王のように絶大であった…

ネオスクリプト・黒い秩序？

機関車のピストンのようにギャンギャンと、左右の拳を引き手も見せずに繰り出し、一足飛びに間を詰め、かわされた拳の軌道を変え、鉄槌に変化させながら敵を求めたが、空を切る。貫き手後にただちに狙いを変え掌底へ、更に移動する目標へ心眼で見極め、カウターの回し蹴りへと繋ぐが。

管理人の重量に満ちた流れる攻撃は、全てかわされてしまう。

体を入れ替えつつのタイミングに、ナイルのボクサーのフックのような変則軌道の拳が、管理人の防御手につきささる。更にナイルのとてつもなく重い前飛び蹴りが管理人の完璧なブロックを、それよりも弾き飛ばす。

管理人はよるめきながら退きつつも、次に旋風のような円の動きでナイル側面を伺い、利き手で袈裟懸けに手刀を打ち逆手の裏拳に結ぶがナイルもまた、円の動きでそれを受け流す。

ざわりと、ナイルの飛び道具のような貫き手が来て、かろうじてそれをかわすが。紙一重のそれは管理人の首筋に、軽い切り傷を作っていた、管理人は歯を食いしばる。

攻撃は止められない、それを止めればナイルの攻撃が押し寄せてくる。そうなれば防ぎようがない。変則を入れて、拳と足技で円の動きから線の動きへ展開する。ナイルは呼応して一瞬で間を取る、彼は笑っていた。

管理人は不思議だった。

ナイルの武術は中国拳法を思わせる。打撃は悉く重心こころもちが乗り、動きは絶妙のバランスを保つ。だからといって自らも遜色なく立ち会えている筈なのに、何一つ打撃が当たらなかつた。

遊んではいけない、この男に遊びなどでは立ち向かえない。一つ一つ、破壊するつもりで確信をもって放つた筈の攻撃先に、そこに、忽然とナイルはいないのだ。

なぜかわせる、と内心で問い叫びながらナイルに怒涛の攻撃を浴びせるが、死角からナイルに反撃される。考えずに、せめて一太刀と繰り出した乱暴な往撃さえ空を切る。掴みかかる戦法を試みたが、絨毯爆撃のようなナイルの拳の連撃が、瞬またたく間に管理人に防御を強いた。

一切が通用しない、見切られている。それでも管理人はもがきながら、あらゆる技と型を繰り出してナイル挑んでいた。

ナイルは管理人・矢野龍介の攻撃を、完全に全て流し切る、それには理由があつた。

それが、ナイルが体現する処の最大の武器、コンセントレーション（ナイルの集中）であつたからだ。

コンセントレーションとは、ある種しゅ技であり、姿であり、環境のよくなものだつた。

ナイルがそれを意識して使うと、彼は自らが負傷しない行動を、ごく自然に取る事が出来る。打撃が来るのであれば、そこにいないように、あらかじめ体が動く。予知のようだがそれをまったく意識

しない。予兆に無意識に対応し感じるままに一連に動き、結果オライ。コンセントレーションとは、完全無欠の防御の形であった。

コンセントレーションは、格闘時下ではミクロ的に機能する。流れるように動きつつ、実は全ての打撃点をかわしている。更にそれはマクロ的にも有効に働いた。

ある時ナイルは、とある諜報機関に遂に行動を捕まれ、狙撃手のスコープの先に狙われた事がある。

その時彼は、ヨーロッパ某国の、とある繁華街のオープンカフェでくつろいでいた。もちろんコンセントレーション発現下で、である。その時、彼は不思議にも首を回したが故に、その瞬間頭部に着弾した筈の弾丸を、かわしていた。直後に彼は立ち上がり狙撃手の視界を外れ、席を奥にと移る。偶然居合わせた団体の観光客が、彼の姿をかき消してしまいその暗殺劇は未遂に終わる。ナイルは、午後のひと時とばかりに、悠然とコーヒーを楽しんでいた。

またある時期、対立する某国が、脱出不能な計略を以ってナイルを陥れ（おとしいれ）ようと画策した事がある。さしものナイルといえど、2重3重の刺客、巧妙に張り巡らされた罠の下では逃れようもないだろうという計画は、その立案段階のうちに、コンセントレーションを纏い（まとい）おもむろに行動を起こしたナイルの手によって破壊された。ナイルのコンセントレーションは、逃れられないならば、それ以前に回避すれば良いと選択していた。つまり、墜落する旅客機ならば、はじめから搭乗しないのだ。

いわば、刹那の動作に限らず長期のスパンに亘る行動まで、防御の一連の動きとなる、それがナイルのコンセントレーションだった。それはあたかも（生き延びたものが証言できたのなら）環境が防衛

的に働くように見えた、かもしれない。

これこそが、ナイルが世界を席卷し勝利し得た本当の理由だった。敵対した者達は、悉くくわくなぜ自身が負けたのか分からないまま滅びていった。ナイルは危険を回避できるのではないかと気付く者もいたが、コンセントレーションがどこまでに及ぶか測れるはずも無く、それを打ち破れる者は皆無だった。

ナイルのコンセントレーションは、彼が世界に君臨した十数年間の永きに渡って誰にも破られなかった。だが彼は生涯の最期に、人でない者と戦う事になる。その時遂にそれは破られて、彼は四分五裂に引き裂かれ命を落とすのであるが、もちろん今この時、ナイルが自身の運命を知る筈もない…

(…たいしたものだ)

管理人の空手技をしのぎつつ、ナイルは感心していた。

見よこの剛拳をと思う。管理人の正拳突きは、速すぎて目にも止まらない。拳が血まみれになっている、かまいたちのような空気による裂傷か？それほどにこの男の突き技は、速く鋭い。

コンビネーションの足技が、あらゆる方向ながら危険な角度で放たれる。ボツと空気が炸裂している。木柱や、氷壁を粉碎する空手家の蹴り技だ、浴びればひとたまりもない。

ナイルは、それを全てかいくぐって攻撃に転ずるのだが、更に管理人・矢野龍介を評価すべき点は、それを防御出来る、彼の卓越した

技術だった。

ナイルの格闘打撃術は又一流である。中国拳法を基礎に近代格闘術の粹を集めたそれは、破壊力は管理人に及ばないにしても、スピードやテクニクで彼を凌駕する暗殺体術だった。管理人は恵まれた体躯と、修練を極めた空手術と、天性のセンスでナイルのそれに対抗しているのだ。

但し、そろそろ満身創痍の状態だった。

（ボロボロだな、矢野龍介）

管理人の血の滲む唇に、血の気がない。チアノーゼ（酸欠）だ。

管理人は、ナイルによって一度も動きを休める事が出来ない戦いを強いられていた、空手の呼吸法を用いても、10分間を超える全力疾走の極限下では、著しい酸欠となる。

ナイルは見計らっていた。大木が朽ち倒れる時が来る。その時にどうする。粉々に粉碎してしまおうか。

（…不思議だ）

管理人は上がりきった息の中で、なぜか心だけが静かに、感じていた。

あれほど修練を重ね、正確にコントロールされた自分の打撃技が、全てかわされるといふ歯軋りはいつしか麻痺してしまったが、奇妙に夢中になって攻撃している自分がある。

何となくだが、自分は喜悅しているのではないか？一方では汗にまみれ、齒を食いしぼる敗色の濃い戦いに喘ぎながら、一方でそれに高揚する自身を、管理人は感じていた。

自分には、永く兄弟子がいなかった。先輩弟子はいたが、彼らをすぐに追い抜いて成長した管理人に、彼らは冷ややかだった。管理人が頭角を顕した頃、彼は共に組み手の出来るパートナーを失っていた。

道場の隅で、佇んでいると誰かの「化け物」と囁く声が聞こえた。孤高とは、孤独であった。孤独とは、管理人の少年時代だった。彼に兄弟はいなかった、体が大きく、優しすぎたものだから、子供時代の彼は学校でいつも苛められていた。だから強くなり、友達も作りたくて空手を始めたというのに。

結局、自分は何も見つけられなかったのだろうか。

ところが今、まるで演舞^{えんぶ}だが、全力で戦えている自分がいた。ナイルを見ると余裕だ。苦し紛れの変形した技を、いなして流して。まるで、そうではないと諭してくれている、長兄のように。

彼の反撃を受ければ、なるほどここに隙が出来るのだと痛感する。

だが、待ってくれ、視界がかすみ始めてきた。

彼の意識は、酸欠による混濁^{こんだく}が始まっていた…

ネオスクリプト・黒い秩序？

ナイルのコンセントレーション。この技は、彼のナイルと呼ばれる由縁ゆえんにも、深い関係がある。

彼には、世界各地で武術を学び、その力を育む時期があった。中国拳法の発剋はっけいの奥義は、中国慶州の奥地で一つの門流を壊滅に至らしめて体得した。関節技はヨーロッパの秘密軍事機関で、幾人もの軍人格闘家と死闘を演じ、訓練の被検者として再起不能にした揚句、身に付けた。

コンセントレーションは、その源を、みなもとアフリカは大河、ナイルの源泉の奥地さかのぼに遡る…

ある村落があり、そこにまだあどけなさの残る娘がいた。彼女の名はアミ（この地に潜伏していた西側は、彼女を「レディ・ナイル」と呼んでいた）彼女は恐るべき力を持った部族を束ねる、いや、その地域一帯を束ねる巫女だった。

ある時に部族間で争いが起こった。アミに敵対する一方の部族には西欧の傀儡かいらいが存在していた。開発後の利権の甘い汁を求めて始まった奇妙なネイティブと西側の癒着だったが、ある西欧諜報機関は、本気でアミの部族を滅ぼそうとしていた。

アミが原因だ。その諜報機関は幾度も、彼女によって甚大な被害をこうむっていた。それなりの近代的装備で戦闘を続けていた精鋭部隊が、この地域で次々に壊滅したのだ。

決着をつけるべきその戦いでは、数百人の重装備の西欧陸軍兵士

と、即席の西洋式軍人の姿になった反アミの部族が、自動小銃を携え槍を握って、アミの地域に侵攻していく。

アミは、それを独りで迎え撃った。

その時、彼女の背後の空が真っ黒になる。

それは彼女が操る「昆虫」だった。彼女の兵士は小さなウンカから毒蛾まで、数億匹である。アミはそれを自在に操り、それを攻撃に用いていた。

彼女が、コンセントレーションの使い手だった。彼女のそれは、環境を攻撃的に変える…

西欧部隊と反アミの部族は、高さ数十メートルの隙間の無い黒い層に飲み込まれ、あっという間に酸欠にのたうった。そして虫たちが発する微熱が、黒い塊となった中心部でどんどん蓄積していく。毒虫の致死量の何倍もの神経毒に絶命する者もあつたが、大多数は蒸し焼きになつて死んでいった。

その有様を、第三者として観察していた者がいる。大河の源泉の巫女アミの噂を知り、その力に興味を抱いていた当時のナイルだ。彼はその頃まだ日本姓で呼称されていた。

アミの技を解明して我がものにしようと、ナイルは彼女に近付いていく。程なくしてアミは異性として心を奪われ純潔を奪われ、ナイルの手中に堕ちたが…

ナイルは知る事となる。アミの力は、技や仕組みではなかった、それは彼女の生まれついて持つ特質だった。彼女を連れ帰り、解剖分

析せよとは、ナイルの背後の科学陣である。

ナイルに葛藤があつた、だが彼の野心が勝る。

ナイルとアミが戦つた時…悪夢のような時間が去ると、おびただしい昆虫の死骸の山の中にぽっかりと空いた空間に、黒い肌で優しい表情をしたアミが、ナイルに抱きしめられていた。彼女はナイルの手によって絶命していた。

アミは、最期のその時、愛するナイルを攻撃できなかつたのだ。

かくしてナイルは、徹底的に切り刻まれ、量的に分析され、数値的に計測されたアミの特質を、医学的に移植された。それは前頭葉の一部、染色体の一部にである。

そうして得られたものが、ナイルのコンセントレーションである。彼の場合は、環境を防衛的に変える発現であつた。

彼がナイルを名乗り、無敵の怪物として世界から恐れられ始めたのは、この瞬間からである。

管理人がふらふらになっている事に、ナイルは気付いていた。かろうじて本能で、この男は動いている…ナイルは、しげしげと管理人を眺めていた。

真つ直ぐな男だ。そして見事な武術だった。そしてこの男、なぜか私と戦う事が嬉しそうだった。

「だが、頃合いだ…」

ナイルは管理人をかく乱する動きを止めて、彼を突き飛ばす。管理人は一度膝から崩れそうになり、何とか持ちこたえるが、疲労のピークを遙に超えた体から汗が滴り、目がつつろだ。口元から少し泡を吹いていた。

最期の局面を2人は迎えていた。ナイルは少し息が荒くなっていったが、それだけの事だ。

彼の瞳に非情の光があった。コンセントレーションの範疇で生存者はいない。だからこそ、この技は誰にも知られず破られないのだと、その冷たい瞳は語っていた。

ネオスクリプト・黒い秩序? (後書き)

すみません、黒い秩序は長すぎなので、4つに分割しました。

ところで、ナイルのビジュアルは福山雅治さん(まじゃ)です、これは譲れません。

男子の読者さんはケンイチに、女子は西野陽子になりきりで、妄想キャストの上物語をお楽しみ下さい。

ちなみに(作者的には)3号爺は池乃めだかさん(吉本新喜劇)もしくはヨード(20世紀フォックス)

食堂の女主人は土屋アンナさん(要・老けメイク)を想定しています。

ネオスクリプト・水晶の組成と…

ナイルが、さて人体のどこから破壊しようと考えて、足を踏み出す。

(では、肋骨を心臓の上から砕いてやるう)

動き始め、呼吸に入ったその一瞬だった。

彼は、ほんの僅かだったが、極めて薄い擦硝子を抜けたような感覚を味わう。パリンと何かに割って入った、いや。彼方からやって来た何かが、今ここを抜き去ったのではないか？光の膜のようなものだ。

ナイルが気付くと、景色が変わっていた。

丘の芝の感触は変わらない。美術館が、建物が変わっていた。古びた小学校風のコンクリートの建物がそこにあり、校舎正面の水飲み場の涼やかな陰を為す落葉樹の幹に、彼は背中をもたれさせていた。目の前の芝生に2人の少年が座り込み、お喋りをしている。

幻覚術に陥ったのだろうか、ナイルはまず身の混乱の有無を確認してみる、が変化は無い。気持ちに動揺もなく冷静そのものだ。それどころか感覚は冴え、恐ろしく意識が沈静している。

どこかから、校庭で歓声を上げる子供の声が聞こえる、姿は見えないが、見えたようにも思う。自分が見ている景色は、望んで見ているという奇妙な達観がある。何にせよ、どうやら警戒を憶えない空気の中に今、ナイルはいるようだった。

2人の少年の会話が耳に入る、そこに目をやると。

少年達は、すぐ傍の木陰にナイルが立っている事に気付かないのか見えないのか。2人で気ままにお喋りをしていた。

ブツブツと呟いている大柄な少年は、管理人・矢野龍介だった。白くぱんぱんに張った頬に、柔らかそうなピンクの唇。低学年の小学生だろうか。

ただの肥満児だな、とナイルは薄く笑う。楽しげな、お喋りに夢中の一方の子供はナイルだった。さらさらの髪にどんぐりの瞳。こちらも初々しい、とナイルの口元が緩む。

ねえナイル、と少年管理人は少年ナイルに言いつのつた。

「強さ、強さって。やっぱりそれだけじゃ、だめなんだよ」

「だってさ」

モジモジの少年ナイルだ、そうだった私は内気な子供だった。

「だって、強くなりたいんだもん」

「うん、そうだね、そうだよね」

反論する管理人は、でもね、えーと、と考えて手に小枝を握る。彼は手のひらで芝から少し露出する地面をゴシゴシと整地して、何か描き始める。

「それじゃあ大事な人を守れないんだよ、お母さんとか、友達とか、好きな子とかね」

きよとんとしてナイル。

「でも、強くないと守れないじゃん」

「だからね、えーとね」

ブツブツは少年管理人の口癖だろうか。しっかりしろ矢野龍介、と腕組みのナイルは内心で彼を応援する、なぜだろうなと笑いながら。

「好きな人を守る気持ちから始めないとダメなの。お母さんは僕等ぼくらが好きでしょう？あの子だって好いてくれてるでしょ？んで、僕らもみんなが好きなら。この点とこの点を結んでいくと」

小枝で描かれる絵を覗き込む2人。

「ほら、綺麗な形になるでしょ？みんなの気持ちと一緒に、にじりがないから透明になる。ガラスみたいにキラキラしてて。これが水晶の組成。人を愛する、これが一番強いカタチなんだよ？」

「ふんわー」

2人の会話の結論に、（あっけにとられて）ナイルが苦く眉をかめていると。

「ねー、ナイル」

すぐ傍らの校舎の窓から呼ぶ声がする、子供の声だった。

ナイルが声を探して辺りを伺うと、うきつと喜ぶ少年2人と少女の3人組が嬉しそうに、窓から顔を覗かせていた。

「コンニチハー！僕はケンイチ、この子がヨーコちゃん、隣がケケ君」

赤毛の元気な少年が自己紹介と友達紹介をして、大人の反応を伺う3人は愛らしく身構えている。ナイルが「何だ、ガキンちよ共？」と笑顔を返してやると、うきつと3人は笑顔満開だ。

「ねえ。ねえってば、ナイル」

赤毛の少年が馴れ々しい態度だ。この子は、少しシャクに触る子供だ…

「ケケ君はね、ブラジル人なんだよ。でも話が日本語に聞こえるよ、変でしょ？」

「こんにちは、ナイル」

左端にいたケケと紹介された少年が、ペコリと頭を下げて微笑む。

その少年の容姿に、ナイルは軽く目を見張った。

浅黒い肌に強いくせつ毛の頭髪は一見して日本人ではないと分かるが、双眸つばめがひどく落ち込んでいる。この子は、眼窩がんかの奥に…眼球が無いのではないか？ポルトガル語が、日本語に理解できる不思議さに気付くよりも先に、ナイルはそれを怪訝に思うのである。

「この子の目は」と、慌てて少女ヨーコだ。

「片方をお母さんの入院費に、片方を兄弟の学校のお金に使ったの。すごく優しい子なんです」

少年ケケが頭を掻き照れくさそうに笑い、ナイルはそれに答える痛ましげな、表情を曇らせてつつの笑みになりながら（この少年達は、何だ）

ナイルの疑念をよそに、少年達は清らかな笑顔をみせてナイルを見つめるばかりだった。

「あのねー、ナイル」

唐突に、ケンイチがニコニコして言う。

「コンセントレーションって、何だか、第六感に似てるね？」

何、とナイル。

眉を寄せ、この少年は何を言ってるのだろうか、なぜコンセントレーションを知っているのか。

「ナイルさん」

今度は少女ヨーコだ。彼女はとても美しい娘だった。

「第六感ですね。第六感は、本当の事がわかる力、なんです」

ナイルは軽い歯軋りになった。この幻覚は奇妙だと自覚を始める。

私は何かに囚われているのではないか、思考をコントロールしようとする第三者がいるのか、と意識を張り巡らせようとした時、少女ヨークは。

「コンセントレーションは、アミさんでしょう?」

ナイルの時間が止まって彼の呼吸が止まった。彼の心を、何かが驚掴わしづかんでいた。

「あの人は、貴方をまだ好きなんです、だから今もずっとナイルさんを守ってるんです」

驚掴んだそれは。ゆっくり、穏やかに退いていく…うんうんと少年達が頷き笑い合っていた。

ナイルは目を見開いたまま、何も考えられなかった。少年達は今語ってはならないものに触れたのだ。心の奥底で鏡のように穏やかだった水面みなもに無造作に石を投げ入れたのだ。

少年達は何を言ってるのだろう、なぜ触れてはならない者の名を、それを知り、簡単に話したのか。

どうしてくれようとこみ上げる怒りの炎が現れた筈なのに、それを覆い尽くすほどに胸に満ちるものがあった。久しぶりに想うアミの笑顔が、懐かしく心の隅々にまで拡がっていたのだ。

握り締める拳は、怒りでなく泣き朽ちそうな感情に耐える為、だが下を向いた途端、彼の涙が宙に零れ風こほに散っていた。

僅かの時間だった。ひとしきりだけ泣いた、それがナイルの慟哭

だった。

少年達はじっとナイルを見ている、心配をしていたのだ。

ナイルが気丈に持ち直し、複雑な想いの視線を上げると、ホツとした少年達の笑顔がそれを迎える。仕方なく苦笑いになり「いい時間だった」とナイル、軽く別離の手を上げる。

「行くの？」と少年ケンイチ。

「…決着をつけよう」

「ナイル」

ケケだった。彼は心配そうであつ、安心もしている風だ。

「世界の王って、どんな気分なの？」

「世界の王、私がか？」

ナイルは考え込んでから、苦笑いを重ねる。

彼は優しい笑顔をして、誰もいないそこにいる筈の、笑ってくれているアミの幻に言ったのだった。

「惨めな私のどこが王だろう？テロは最低の行為だ。幾度生まれ変わっても、私は許されないだろう…」

少年ケケが最期に笑ったような印象が残った。再び擦硝子の光を抜ける感覚が来る、それを抜けると。

丘の景色が戻る。ふらふらの管理人がファイティングポーズを取っている、その光景がナイルの目前にあった。

無言のナイルは拳をふるい、無防備な管理人の頭蓋骨を粉碎するほどに 打ち抜くその素振りだけをした。それで観念し動けなくなった大男の頸椎に、すかさず軽い手刀を打ち込んで。

彼は、管理人・矢野龍介を気絶に至らしめる、にとどめていた。

足元に倒れる管理人を暫く見つめるナイルだった。これまで戦った相手を生かしておいた事はない、コンセントレーションは自身の魂こゝろ魄ぼくであるが故に。

だが、この男は最期まで殺意がなかった、少年のように。果たして敵であつたらうか、とナイルは立ち尽くしたのである。

そして、私は今この丘で何を見たのだらう、との自問になるナイルに、丘を往く一迅の風は微そよいだのである…

ネオスクリプト・ワンダフル・ナイルカードと…

「ナイルは恐ろしくて、本当に強い男でした」

回顧覚めやらずで、管理人はため息ばかりついている。さすがに自身の敗北秘話、寂しげだ。

ケンイチは、話のどこかの段階からか只々聞くばかりで、呆けた^{ほう}ようになっっていた。

本当だろうか、にわかには信じ難かった。テロリストとは、それほどに強くて圧倒的なものだろうか、昼間あの金狼を子ども扱いにした管理人が、歯が立たなかつたという程に。

湯水のように大資本を抛出する白い部屋の老人。対立する悪のテロリスト。確かに戦闘機でやってきたし、それを目撃した。が、そんな話が世の中にあるのだろうか。スケールが違うというか身にかげ離れすぎた話で、ピンと来ない。

ただ管理人の話は、不思議に満ちた美術館で過ごした日々のように、合点を匂わせていた。

そもそもフェルメールの【恋文】は、そこいらの転がるただの名画ではないのだし、美術館の在りようは極端に浮世離れしていた。資金繰り、運営形態、目的、何もかもが。

背景には大きなうねりがあつたのだ。

それでもすんなりと了解して呑込めないのには、しばらくをここで

過ごしたにも関わらず今まさにこの時まで、何も知らずにいたという疎外感を、ケンイチが感じていたせいもあった。

（オレは、随分場違いな場所にいたんだ）

ケンイチは話を聞き考え入るほどに、侘^{わび}しさをつのらせていたのである。

そんな時に「私は場違いな役者でした。私は何の役にも立たなかった」と、管理人が呟いたので、偶然であつてもその心理の附合に思わず（え？）

ケンイチは意外に感じて、すぐに察する。この損な役回りを演じた大男にしても、同じだったと。管理人とて、あまりに不本意に異質の世界に巻き込まれたのだ（で、あるう）

ケンイチはここでようやく、じゃあ大変だったんだなと、痛み聞いてやる思いに辿り（たどり）着いたのである。

この長い回想は謎解きではなく、管理人・矢野龍介の痛みの吐露であつたのだ。

管理人は今以て、ナイルの巨悪の実像は知らなかった（ナイルについて、ただとてつもなくケンカが強い野郎、位の認識だ）だからケンイチに話した事は、ナイルとはと断片だけを聞き、少しの時に自身が身をもって触れ知った、おぼろげな感触に過ぎない。

彼が事実を、ナイルがただ強いだけでなく、まさか様々な意味で常軌を逸した魔物のようであった、と知っていれば果たしてどうだったか。ナイルと拳を交えた管理人にさえ信じがたく、改めてはナイ

ルを実感できなかったかもしれない。

体験は現実味を失い、人に語る事、例えばケンイチに話す事も躊躇ためらわれたかもしれない。それ程にナイルとは、非日常の存在であった。

「気を失った私を介抱してくれたのは、3号爺でした」と、管理人は続ける。

「気が付くと私は管理人室の畳の上に寝かされていました。慌てて「ナイルは？」と問う私に、3号爺は笑って「アイツはお前を、弱すぎて話ならん、とか何とか評して帰っていったぞい」と。私が目覚めた時ナイルは既に、丘を立ち去っていました」

ここで、管理人が軽い笑みを込めて「3号爺とは、あの人の自称です。実はその理由が痛快です」

おお、やっと笑顔の会話だ、とケンイチは安堵になる。管理人は面白そうできて、どこか困ったような顔をして見せた。

「3号爺はたまたま美術館を訪問して、死闘の場面に遭遇したようです。直後に彼は（ナイルに捕まり）ナイルと話をしたのだそうです。ナイルは3号爺に対して、何と言ったと思いますか？」

もちろん、ケンイチは見当がつかないのでスルーだ。素振りで、いいからドウゾ話して。

ニヤリと管理人。

「ここは面白そうなので私も管理人になろうです」

「は？」

複雑な想いを、大きく腕組みしてまず管理人が表現する。遅れてケンイチも同じポーズになった。

「ナイルは勝手に管理人を請け負った、のだそうです。勝手に、私に次ぐ2番目の管理人です。何かあったら連絡をよこせと、3号爺は（無理強いに）約束をさせられ、あの人はその時から3号爺を名乗るようになりました。彼も勝手にです。つまり「ワシぢや、3番目の管理人は、ワシぢや」です。また勝手にどうか自発的に、彼は翌朝から美術館の入口に陣取るようになりました」

「…何、ソレ」

「3号爺は、緊急連絡用のカード端末を持っています。昼間の騒ぎに、あの金髪の大男が危険だと思ったのでしよう、3号爺はカードを使った訳です。もう少しで、美術館の丘が戦場になるところでした」

ケンイチの脳裏に、3号爺が使ったカードの光景が浮かぶ。 シグナル・ナイル sig
nal・NAIL、あれか？

「いや、あれはもう止めとけ！」と、事態を呑込んだケンイチは慌てて。

「ナイルが来るのか？大変だ、3号爺にもうカードを使わせるな、取り上げる！」

ハハッと笑う管理人は、ここで不意に顔を歪めて「痛い」

早くも二日酔いなのか？「頭痛がします」と、彼はこめかみを押さえつつ、痛みの中で笑っている？

ケンイチは鼻を鳴らし（ふん、飲みすぎだ）

ただ管理人の額に大粒の汗が浮かんでいて、それは少し気になったのだが。

管理人の、頭痛の波が退いたのかのタイミングの、話し始めた語調が明るくなっていた。

「ところで、そのカードですが、案外優れたものです。ナイルが話したところでは、GPSの機能や携帯端末になる。それでだけでなく、プリペイドカードでもあるらしいです」

「（スマン、よくわからん）は？」

「3号爺が、試しに街で自動販売機に差し込んだところ、じゃんじやん買えるんだそうです。水晶の街に7UP（セブン・アップ、炭酸清涼飲料水）を売る自動販売機が有ります。あの人は毎朝の美術館訪問前にカードで7UPを買って、飲んでいるそうです。それが楽しみなんだとか」

「あのじじい、何をやってる」

「でも、それが、それで」と、管理人が頭を掻く。モジモジしてる？

「（ア、ソコもわからん）うん？」

「カードですが、実は私も持っていました」

「え？」

「だって3号爺は2枚を受け取っていました。その1枚は私に、と無理やりです。もちろん使った事はありませんよ。捨てる訳にもいきません。破棄してそれがばれたら？あの恐ろしいナイルが、怒ってやってきたら？きつと7UPを買って飲む3号爺もるとも、私は今度こそ殺されるでしょう。ちなみに我々はそのカードを、ワンダフル・ナイルカードと呼んでいます」

見せましようかと、何だか得意げに腰の財布に手を伸ばす管理人だったので、顔をしかめてケンイチはそれを制していた「見せるな、いや見たくない」

ワンダフル・ナイルカードだと？ふざけたネーミングだ。呆れるとつかゾツとするとかのケンイチに、管理人は弱り切った笑顔なのだ、2人は肩をすくめる破顔となっではいたが。

管理人は、幾度目にもなる嘆息をついた。

「私がナイルに敗れたところで、日常に何の変化もありませんでした。例えば管理人を辞めさせられた訳でもなく、（給料が）減棒されたでもなく、穏やかな日々が続いています。私の本来の仕事は、やはり美術館の管理人です。ナイルと戦ったのは、無理があった、ただの巡りあわせだったのでしょうか」

「ただし（白い部屋の老人は、この美術館は正義を貫くためにあると言いましたので、それを信じるのならば）正義の勢力と、せめぎ合い敵対する悪の勢力は、事実あるのでしょうか。私は、正義の勢力の側で奇妙な体験をした、と言う訳です。不思議なのは、悪の勢力

までがここを守護するという、矛盾する奇妙な事になった点です。いつしか此処は善悪を超えて、特別な場所になった。」

「私は今やここ水晶の塔・美術館は、善や悪、白や黒、光と闇、そんな括りではない邂逅かいこうの場所であると確信しています。残るもう一つの出来事をお話ししましょう。これこそ、もっと不思議です。私の幻覚だったのかもしれませんが、少年ケケという不思議な少年の話です……」

ネオスクリプト・精霊と。そして…

管理人がナイルとの死闘を忘れかけた頃、月日が流れたある日の深夜だった。

就寝後、間もなく1Fロビーに人の気配がした。

管理人がパジャマ姿で、かつバットを握って恐る々そこを伺ってみると。

ロビーには照明が灯いている？

ロビーの中央に、人が立っていた。少年だった。

(深夜にチビッコの泥棒か?)

ロビーに現れる管理人を待っていたかのような、少年だ。管理人を見とめて笑顔になり、ペコリと頭を下げるのだ。

管理人は怪訝の中にも、不思議な空気を感じていた。

大きな横縞模様の古びたTシャツに半ズボン、素足にボロボロのズック。薄汚れた身なりの少年だ。目を引くのは、浅黒い肌よりも、目隠しのように眼部をぐるぐる巻きにした白い包帯だった。少年は目に怪我を負っているのだろうか？

「どうしたの？どうして君は、此処にいるのかな？」

不審者といえ、相手は10才位の子供だから、管理人の問う声色こわいろは

優しくなる。少年は笑って。

「僕はケケといます。はじめまして、僕はブラジルの子です」

ふむ、と頷き、直後にギョツとする。少年が喋った言葉は日本語ではない。ポルトガル語？だが、それは耳にして胸に収まる時に、日本語に理解出来るのだ。それでたじろぐ、管理人だった。

「驚かせてゴメンナサイ、ただ僕は貴方と話したくて、此処に来ました」

「私と話したいの？」

「ナイルと戦った事、彼も此処の味方になった事も知っています、てか、見ていました」

(ナイルの事を知っている?)

この子は何者だと、更に呆然となる管理人を可笑しそうに笑って、ケケ少年。

「たくさんの事を知った、なのにどうしていいか解らない。貴方は今苦海に沈んでいるんでしょう?」

管理人は得体の知れない少年への警戒もあつたが、それ以上に問い掛けに窮する思いがあつて、それで返答が出来ない。

確かに彼は、もがく思いでいたのだ。ナイルと戦ったあの日から、確かに悶々とした日々を過ごしていた。

得体の知れない世界に巻き込まれた、知らなくていいものを垣間見た。意識すれば出口の無い闇の中にいるのにまるで無力で、ただ漫然と繰り返される日常を眺め続けるのだろうか エンドが定められているというのに。

少年は察していたのである。

「答えはこの美術館そのものです。此処で行われている試みに、答えがあります」

「君は？」と、思わず洩らす管理人の疑念だった。

「白い部屋の老人の試みを、知っているの？戦争と逆の、実験のよくなものを？」

少年は微笑して、軽く制して手を上げて。

「偶然の符合は、必然です。事象が正しければ、事象は証明される為に条件を整えるのです。人の生きて行く道も同じ、確固たる未来は必ず踏み石を準備する……」

管理人が目にする少年の表情は、喜びとも悲しみともつかぬ不思議なものだった。

「貴方は知らない、此処を作った人も知りません。この丘は偶然にもレイ・ラインです、多くの人の魂が巡る場所です。ところが昔、此処に小学校がありました。円形校舎の建物に、天蓋てんがいが有って、その形が多くの魂の行き場を見失わせ、苦しめていました。そこにこの美術館が建てられました。彼らがこの水晶の建物が救ったのです。悪霊達は水晶が形作る幾重もの六芒星ろくぼっせいを巡り浄化されていき、

遂には精霊となって天に昇りました、それは今も続いている」

「また、偶然にも此処で始められた試みは、誠意に満ちていました。白い部屋の老人は、幸いにも善人です」

「更になぜか、貴方はナイルを味方に引き入れる事に成功しました。悪意までも、此処に害を及ぼせなくなりました」

管理人が、思考が混乱したまま問いかけようとするが、ケケに「つまり」と押し言われる。

「つまり、必然が始まったんです。人は遂に、次の高みを目指し始めた」

管理人は幾度か制せられ言葉を失い、かろうじて「君は何だ？」と、問う事しか出来なかった。

少年は、ニツコリと笑って。

「僕は、僕らは。この物語に関わる者ではないけれど次に現れる者です。星に選ばれ道を差す指、です。僕は、僕らは一度にたくさん人の心に同時に現れて、一緒に悩み、共に問題を解決していきま

す。でも普通の人間なんです」

「貴方には伝えなかった。美しい道歩んでいるのなら、答えは常にその中にある、と」

「水晶の塔・美術館の管理人、矢野龍介氏、もう悩まないで。3つの福音をお伝えします。貴方は多くの人に愛されます。此処は多くの人の心の拠り所となります。そして、貴方の病気は治せないけれ

ど、最期に貴方の心に安らぎが訪れます。それは一組の男女によってもたらされます…」

少年ケケは。そして煙のように、管理人の目の前から消えてしまったのである。

「な、何だ、それ!？」

と、こればかりは飛び上がらばかりに驚くケンイチである。

ケケ少年は幽霊だな、ここで幽霊を見たんだな?と青ざめてキヨロキヨロ、好奇心一杯で、騒いでいるようにも見える。

管理人は僅かの間、そんなケンイチを静かに見ていた。

彼は回想話の中で、少年ケケが触れた「病気は治せない」という部分を省略していた。少年ケケはひた隠しにしていたそれを見抜き、それは治せないと言ったのであり…

実は、管理人・矢野龍介には伏せていた最も大きな秘密ある。それこそが彼の余命の短かさ、であった。

彼は、眼底の奥に既に末期に至った脳腫瘍という死魔を抱えていたのである。それは5年前に既に発病し、告知宣告されたその時点で既に手の施しようのない惨状であった。

彼は、独り煩悶はんもんの末、ホスピスを選んだつもりで、美術館の管理人という仕事を選択したのだという。此処に来た、武道の行き詰まり

以前の本当の理由を、ここに至り話す必要は無い。今そう感じて、ケインチを見ていたのであり。そして、少年ケケの予言めいた言葉の通り、この赤毛のケインチが現れたんだ、と静かに想っていた。

病いについては、その始めから諦めがついていた。

彼にとつて、今や最も深い彼の懊惱おつらうは…此处で過ごした『時』の価値だ。果たして意味があったのか（唯、もうそこにしか求められない一点だった）

大いなる試みは立派な事だと理解できる。素晴らしい絵画、心に響く音楽、想像の翼を解き放つ文学、それに価値がある事は分かるが、それは本当に何かに繋がつながっていくのか？

おぼろげに、見事繋がったと思う。西野陽子が第六感を探り当てた、その上でケインチが何かを教えてくれたように思う。何か大きな歯車が回ったような気がする。

私の生きた日々は、最期に結実したと管理人は少し嬉しかった。だからケインチと過ごした日々はたまらなく楽しかったのだ。

彼はこれで全てを話したつもりだった。最後に、改まって此処でケインチに謝意を伝えようと考えていた。ありがとうと言うべきか、楽しかったと言うべきか。だが、彼の視界はそこで途絶え、意識は暗闇に墜ちてしまう…

突然、管理人は床に昏倒する。

驚くケインチだった、慌てて屈かがみ込み、気配を伺うと。ぐーぐーと、管理人は大いびきだ。

「クソッ、やっぱり酔っぱらいのたわ言だったか？」

と呆れ笑いつつ、だがすぐに異変に気付く、管理人の体が激しく、
痙攣けいれんしている？

一瞬戸惑い、背中に寒気が走りケンイチは慄然りっぜんとした。どこかで見た事がある、脳じゅうごうくに重篤な危険がある場合、こんな風に倒れるのではなかったか。

おい、起きろ管理人と。寝ているのならばの声を掛ける試みに、
管理人は異様に、頑かたくなに反応しないのだ。

「オイ？…オイ！管理人！」

ケンイチの呼び掛けは叫び声となり、静かだったロビーの空気を切り裂いていた。

ネオスクリプト・精霊と。そして…（後書き）

次回、終話です。

ネオスクリプト・流星群（終話前半）（前書き）

今回だけ「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれていません。

15歳未満の方はすぐに移動してください。
苦手な方はご注意ください。

ネオスクリプト・流星群（終話前半）

ケンイチは慌てふためいて、弾けるように管理人の傍ら（かたわら）から立ち上がり、フロア奥の事務机に走っていた。

惑乱しうわづりながら「きゅ、救急車」と、いったん機の電話機に触れるものの「いや、気道確保か」と、そこを離れる。管理人室に飛び込み、茶筴筒をがちゃがちゃ探って、なんだか手に割り箸を握り締める、そして再び事務机にと、突っ伏すように舞い戻ってきた。

「110番、いや、119番！」

電話機のプッシュボタンをガチャガチャと乱暴に叩きながら、しっかりしろよ管理人、と念じ呟く。

救急にはすぐに繋がった。

「…Z市地区管轄救急救命センターです。どうされました？」

「人がぶっ倒れた、痙攣してる、重体だ」

「頭を動かさずにそっとしておいて下さい、呼吸はどうですか。こちらの住所を教えてください」

受話器の奥から冷静な声色で住所を問われ、ケンイチは住所？と面食らう。よく考えたら知らんゾ、と心中で叫びながら、落ち着けケンイチ。

机に重ねられた書類をひっくり返して拡げ、探してみるが判らない。そういえば公団から届く黄色い封筒があったと思いつき、机の隅に束にして重ねられていたそれを調べてみるが。

どの封筒にも、どこにも。水晶の塔・美術館御中と、宛名だけしかない!?

「回線を調べました。そちらは市内中央商工ビル：水晶町住宅公団オフィスですね?」

市内?明らかに食い違う所在を告げる声に、ケンイチは色を失って。

「違う!此処は郊外、水晶町だ、Z市内じゃない、水晶の塔・美術館だ!」

はたと、思い当たる節がある。ケンイチは血の気が引く思いだった。

世間に対して公には住宅公団が表立っている、と管理人は言っていた。徹底的な秘匿はないにしても、伏せがちのではないか?運営はそうだった。住所、電話回線なども、一度住宅公団を経由するのだとしたら?内にいたケンイチに気付き得ない、外から見れば閉鎖的な運営だったとしたら?

それが今は裏目に出たのではないか…

ケンイチは、力任せに机を叩いていた。ちくしょう!致命的だ。からくりは簡単で、それで支障なくやれるのかもしれない。だが今、もたもたしてる場合じゃない。

「もしもし、では美術館で検索します。何か目印になる建物はあ

りませんか？」

「丘だ！山を目指せ、GPSとか何かで」と。

ここでケインイチは「あつ」と、閃いていた。GPS機能：といえ
ば？管理人がそう言っていた、ワンダフル・ナイルカード！

ケインイチは受話器を放り出し、管理人に走り寄る。探り当てて、彼
の財布を乱雑に振り回すと。

バサバサと、少ない紙幣やレシート類に紛れて、数枚のカードが床
に散乱する。

その中の、薄いペラペラの緑色のカード、これだ。3号爺が持って
いたワンダフル・ナイルカードだ。

さあ、使い方はどうだったか？3号爺は簡単に使ったゾ。

（矢印がある、ここをどうする、こするのか、タップか？）

ケインイチが床に座り込んでカードをいじっていると、管理人がひと
きわ大きく体を引きつらせて…

「ああ、くそっ！」

その時だった。カードが黄色く輝く表示を閃かせた：CALLING。
G。

よくわからん、だが！とケインイチは立ち上がった。CALLING
だ、連絡か何かがともかく走ったぞ！

慌てて机に戻り、受話器を握りしめるケンイチだったが、受話器の奥の声は沈黙だ。

（そりゃそうだ、くそ！オレの馬鹿野郎！）

だが「…こちらはナイル・コールセンターです」と、突然女性の声が響く。

ギョツとして、ケンイチは受話器を握り締める。繋がった？だが？救急センターは？

「今後受話器は戻して待機して下さい。貴方の行為は数秒間の口スとなりました」

相手などお構いなしの、冷静沈着な声は続く。

「回線は本通信が介入しています。如何なる第三者もこれを解除できません。所属と組織を明示願います」

ギョツとしたままでケンイチ。

「所属は？…わからねー、だけどここは水晶の塔・美術館だ」

女性の応答に一瞬の間があった。

「…用件をどうぞ」

「管理人が倒れてるんだ、重病だ、救急車を呼んでくれ」

再び間があり「おい？」「ヒットしました」と、両者の声が重なる。

「…水晶の塔・美術館・管理人 キーワードがヒットしました。緊急度をSランクに変更、コール地点を確定、一斉指令が北半球全域下に発令されました」

「は？」

「上海、韓国両空域、哨戒部隊からアンサーバック。そちらに向かいます。到着所要時間は、最短で2分30秒後、最長で3分後です。更にハバロフスク空域、グアム空域よりアンサーバック…大規模な動員が必要ですか？」

「いや、救急車は1台で…」

「では、案件は満たされました。グッド・ラック」

「ま、待て、何だ、それ！」

「…規則を破っちゃいけないんだけどね」

えっ？とケンイチは受話器を握り締める。女性の声はトーンが落ち、聞き覚えがあるものに…

「ケンイチさん、よくやった。管理人を助けるんだよ…グッド・ラック」

それきり切れてしまった通話だったが。

ケンイチは呆然としていた。今の声は間違いない、食堂の女主人だ。

だがどうして？スパイか何かかと、しかし、ここで首をひねってる暇はなく。

ケンイチは体を変えて管理人の容態を伺う、今は現場で出来る事をやらねばならない。

管理人は呼吸が切れ々だ。苦しげに不規則に、大きく背中を曲げる喘ぎを見せている。

（喉が詰まってる！？）

ケンイチがゲンコツで力任せに背中を叩くと、管理人がそこに激しく嘔吐する。だがそれでも尚に気管を詰まるのか、管理人の苦悶が続く。

ケンイチはすかさず口をこじ開け、顎内に割り箸を握り締めた手をねじ込ませていた。テレビで見た。こうやって上から割り箸で舌を押しえつけて、巻き込ませないようにして…

その途端、管理人は引きつけを起こして、歯を立てあごを閉じてしまった。慌てて、左手をねじ添えるが、時既に遅く、ケンイチの右手先はその奥歯で噛み付かれてしまっていた。

油圧の力のような、凄まじい顎のかしめだ。

ケンイチは目を血走らせて、ぐうっとくぐもった声でうめく。管理人が頑強に歯を食いしばっていて、そのあまりの激痛に一瞬気が遠くなる。

親指あたりの骨が軋んでる、だが管理人、呼吸させてやるからな！
管理人の口から、血が流れ始める、ケンイチの指先からの出血だ。
それでも抑える手は戻さない。

痺れに震える体で押しやり、血液を飲ませない風に管理人の頭を動かすと、管理人が一つ大きく吐息をついたのが分かる。

（よし！）

だが、管理人の顎部の緊張は解けるどころか、更に強度を増す。波浪のように押し寄せては退く激痛がケンイチをほんろう翻弄していた。

くそつ、くそつとその波の耐えがたきに耐える。涙が止まらなかつた。

痛みが来るほどに、その度に泣けてしまう。

悲しい程に、鮮やかに。管理人と過ごした陽の当たるこの丘の日々が、脳裏に浮かぶのだ。

大丈夫だ、これ位何でもない、わはは、だな？管理人。

鈍い音がした。骨が噛み砕かれた激痛が来る。チクシヨウ、やりやがったナ…だけど。

「オレは言ってなかった」

出血が、吹き出すおびただしいものになった。指がちぎれていく…
それでも。

「ありがとう、世話になった、管理人！」

ケンイチが永劫のような時の長さを感じ、涙を枯らし、痛みに朦朧となり何も分からなくなった辺りで、ナイルの救護班が到着したのは、通話後から本当に3分以内だった。

ケンイチは、この時の事をぼんやりとしか憶えていない。

濃紺の戦闘服の兵士姿の男達がばたばたとやってきて、救命処置を行い、数人がかりで管理人を運んで行った。

(そりゃ大男だし、宜しくたのむゾ…)

「…お前の右手の親指は、もうだめだ。ここで切断するぞ」

兵士が顔を覗き込んでそう言っていた、ケンイチの治療をしてくれた彼が、腕に局部麻酔をしたのを憶えている。

(や？来てくれたのか？救急車よりめっさ、速かったナ…)

麻酔は、ケンイチの酒による酔いも呼び戻していた。ここで、ケンイチは気を失ったのである。

ザワザワする。

第六感が寄せ来ている…

次にオレが見るものは何だろう…

気が付くと、ごく自然な日常だった。

ケンイチは、図書館の机に就いていた。

静かな空気、ただ、思索や、検索の^{ひとこま}人息がする。

ページを捲^{めく}る乾いた紙が立てる音、書籍棚の回廊に宛てを尋ね彷徨う靴音、ブツブツという、沸き囁かれる独り言、筆記具の奏でるかすかな作業音：そんな静寂達が、空調の利いた乾いた空気の中に流れ、行き届いた寒系の間接照明に満たされた館内を漂っている。

ケンイチの服装は、綺麗な綿のシャツに、清潔な色のジーンズ、適度にこなれた白布地のスニーカー、卸し立ての澄んだブルーのM1ジャンパー、清潔で、さっぱり爽やかな青年の風だ。

彼の向かいに座り、雑誌に目を落としている女性がいる、若き日の、ケンイチの母親だった。

正面に座る同世代の男性が、まさか自分の息子だと知らない彼女は、ケンイチを気にとめず、ただ雑誌に興味をうずめている。向かいあう距離はたつぷりと遠い、それはごくありきたりの館内の机に向かう利用者の姿だった。

ケンイチに母の認識はあった。だがそんな取り立てた興味を感じ

ない。ただ母という人物だ、同世代という立場で眺められる奇異な機会だというだけの、特別でない独りの女性の姿を見ている感覚だった。少し前からじっと、彼女を見ていた。

机上の数冊の雑誌の中に、育児物がある。写真で見た事しかなかった若き母は、今度ケンイチを身籠った頃合なのだろう。そんな雑誌を彼女は静かに読んでいた、小さく息をしている、時々、うん、と記事に納得させられている…

母は、透き通った白い肌をしていた。皮膚を感じさせない白すぎるそれは、妊婦だからだろうか。痛々しくも見え、育もうとする命が、まだ淡く頼りない脆さを滲ませているのだ。

はらりと、長い髪が額から垂れる。正面にいるケンイチを少し気にして軽くそれを掻き揚げながら、思いをめぐらせるものがあるのか、紙面を離れた瞳は宙を見つめる。時々顔をあげ、首を傾げ考え事をしながら、そんな風にひと時を過ごしていた。

穏やかな佇み^{たたずみ}だった。

柔らかな模様が動くだけのピントの合わない背景の中で、透明な水の中に置いた玉石のようにくつきりと光る透徹した瞳は。迷いなく優しく、ただ正しい物を見ようとしていた。

遠慮がちな、彼女の女性らしい柔らかい仕草はしばらく後の、帰る身支度となり退席する姿まで貫かれ、それは同じように見えた。

彼女がその間際、持ち帰る雑誌の中にしたたり顔を見せたのは、資格の関する書籍だった。そういえば母は若かりしこの頃、会社勤めをする働き者の女性だったのだ。

パリンと、何か割れる感覚を体に覚え、気配を耳にしたような気がする。空席になった向かい側の机上を見つめるばかりだったケンイチは、いつしか変わった季節を季語で今不意に実感した、そんな顔をしていた。宙を見やり、考えに想いをはせるそんな横顔は、母のまるで生き写しだった、ケンイチは、彼女の息子なのだし。

ぼんやりとするケンイチは、不思議な安息を迎えた気分だった。

蒸発した母だった。

心のどこかに在ったわだかまりが一つ消えていた。母親に激昂したがその実、最期まで彼女を苦しめたうしろめたさがケンイチにはあった。この人はずっと苦しんで生きてきたのだろうか、オレの為に…

だから若き日の母の、少なくとも溺愛や、疎ましさの中にだけ生きていなかった姿を見、迷いなくその時を生きていた事を知り、少し救われたのだ、そして思い出していた。

「人は等身大で、それ以上になれないしそれ以下でもない。気にせず、歩んで行きなさい」

それが彼女の口癖だった。きつと母は、息子に教えながら自身に言い聞かせていたに違いない、つまり、やはり今を頑張るしかない。それで何かに辿り着きそこから見える美しい景色に、その時に問いたければ価値を問うべきなのだ、と。

ケンイチはここで不意に目をやって、机の上に置いた自分の右手に驚き、すぐに気付いていた。右手は清潔な包帯が巻かれ、その少しだけ根元を残し親指は、失われていて。

(ああ、そうだったナ)

光景の視界の左隅から、白く薄い光がやって来る。

それは押し寄せて一瞬で輝度を増し、視界一杯に広がりケンイチに同化する。

体があつという間に潰れて、あつという間に爆発的に広がる感覚がある。

視界の白い光は、急激に前方一点の焦点に殺到して更に集中していき、訪れるスターボウ。

ケンイチは純粹にエネルギーに変換され質量を虚数域にシフトし、光の速度の理論値を越え跳ぶ、時間という制限を破って。

ネオスクリプト・流星群（終話前半）（後書き）

すみません、終話も長いので2つに分割しました。

ところで、あいうiuと猫。

猫の名前はミエネコといいます。

彼女によるとiuは小説を描く時、いつも小さいのだそうです、目を閉じて何か呪文を唱えているのだそうです。

そんな彼女が、朝顔の葉っぱを運んできます、それを食べながら、iuは頑張るのです。

ネオスクリプト・流星群（終話後半）

まばゆい光を感じて気が付いたケンイチは、1フロビーの長椅子に横たわっていた。

「…管理人？」

思わず、2人がそこにいた筈の場所に目をやり、同時に右手に鈍痛を感じる。

少し顔を歪めて、ケンイチは納得していた。そうだった、何らかのナイルの救援があったのだ。

しげしげと観察した右手には、やはり親指がない。巻かれた包帯は清潔でキツチリしていて、その先に血が滲んで、上手く止血されているようだ。麻酔の為か痛みは、痺れたような鈍いものだ。

頭痛を感じながらケンイチは上体を起こし、改めてフロアを眺めてみる。

静かで、張り詰めた空気感はいつもの深夜の美術館だ。唯、足元の床面に、痕跡を消す為か綺麗に磨きき上げられ凝視しなければ分からない程かすかに、ケンイチの血痕が白い床材の継ぎ目地に残っている、に過ぎなかった。

ケンイチは大きく息をついて、こめかみを押させて「…本当かよ」と、苦悶の声を洩らしていた。

この夜の出来事は本当だろうか。管理人は、倒れていなくなっ

まった。これは現実の話なのか。いや、そもそも。オレがここにきて体験したものの全ては、本当に現実だったのかと自身に問い掛け、様々に考え始める。

しばらく頭を抱えていると、ふとケンイチは、耳に届いている異音がある事に気付く。丘で何か音がしている…

彼がふらつく足で丘に出てみると、夜はまだ続いていて、空は星が煌き渡っていた。こんな雄大な星空は久しぶりだった。子供の頃にしか見た事がない鮮やかさで、星の距離が近い、空が手が届くほどに低い、が。

丘のの中央に、大きな異形のシルエットがあった。異音として響く低い金属音を発し、鮮やかな蛍光を尾灯やら指示器やらのあちこちに輝かせるそれは、昆虫のような大きな羽根を持つ、昏間に見たあの戦闘機の威容だった。

星明りは、そこに人影がある事も浮かび上がらせている。

ケンイチが近付いていくと、その男はタバコをくゆらせて、地平線を眺めていた。

もちろん人影は、足元のおぼつかないケンイチには気付いていて、男が足元にタバコを捨て足でもみ消すのは、彼の対応の仕草だった。

男はケンイチと同じ背格好だ。迷彩ではないが軍服らしい姿、パイロットジャンパーを羽織っていたが、どこかぎこちなく似合っていない。肩上までの黒い長髪で、闇の中ながら凜々しい瞳の美しい容姿だ。

男の傍に近付いてから、まさかとケンイチは思う。管理人が言っていた美しい容貌の男とは…

男は、まさかのナイルだった。もちろん、彼が自ら名乗る事は最後まででなかったが。

「1時間寝てたな？」

「うあ…」

恐ろしいとも、驚いたとも言えずケンイチが顔色を失うと、ナイルは笑う。

「生理食塩水を輸液済みだと聞いている。かなり出血したらしいが、大丈夫か、顔色が悪いな？」

きっとナイルは、警戒させないように振舞っているのだろう、笑みに柔らかな演出が感じられる。

内心殺されると、感じなくもなかったケンイチには安堵の想いで、ふとナイルに演出以前の親近感を感じてもいた。少なくとも、今の場になくなってしまった管理人とナイルは、拳を交えた遠いが近い男、と言えなくもない。

「管理人はどうなった？」と、ケンイチの警戒しながらの（それでもタメ口の）質問は、言わずと知れた人を選ばず話す、ケンイチの外交方針だった。

ナイルはケンイチの態度を気に止めない。彼が会話する人間は、敵か味方かのどちらかしかない。前者であれば口の利き方だけな

く、行動まで生意気な連中ばかりであったし。

彼は、ため息を一つそこに落とした。

「状態は良くない、今も危険な状態が続いているらしい」

ケンイチが「そんな」と、挟む口に覆いかぶせて「およそ、世界最高レベルの治療が行われている、それでも危ない」

目を見開いて、唇を噛むケンイチだった。

「祈れ。お前にせよ私にせよ、今はそれしか出来ない」

祈るだつて？意外そうなケンイチは「祈ってくれるのか、アンタが？」

ナイルは苦笑つて、新たなタバコに火をつけながら、その仕草の中に頷く様を醸かもしてみせていた、ややあつて彼は口を開く。

「私が一報を受けたのは太平洋上だった。ハワイから遅れて此処に駆けつけた」

「脳腫瘍だつたらしい。機内で入手したデータでは、発病は5年以上前、奴（管理人・矢野龍介）は隠していたな？腫瘍は脳幹動脈を圧迫して、大きな動脈瘤を併発じゅうみやくいんじょうさせて、その破裂が今回の症因だ。飲酒は即命に関わると、止められていた筈だ」と、こちらの医療陣は診みている」

ふうっと煙を吐く。面白くないとそんな嘆息のナイルだった。やはり彼にとつても管理人・矢野龍介とは、気になる存在ではあったの

だ。

「あの男は、自殺を図ったのか？なぜ酒に手を出したのだろうか」

「さ、酒…」と、口ごもるケンイチだ。

「オレの、あの、その。送別会だった」

何？とナイルは眉を寄せて「送別会、だった？」

会話に2人の思惑が交錯する間があった。しまった、知らなかったごめんよ、と後悔のケンイチと、なぜ？と呆れ顔のナイルだ。

しかしそれならと、ナイルは納得する、苦笑이었다。

「命懸けの酒だったのなら、あの男らしいのか」

ナイルはそこで足元にタバコを捨てる。ギリリと、靴底でそれを消し潰す様子は（芝生を大切にしていた管理人に文句言われるゾ、ナイル）と、ケンイチの小声を誘うのだが、もちろん耳に拾わないナイルには、それが話題を変える動作のつもりだった。

「お前は公団の人間か？」

「いや」

ケンイチは力なく否定する、ナイルはおや？つと言う顔になる。

「では？管理人・矢野龍介とはどんな関係だ、名は何という？」

「オレは、赤毛のケンイチだ。美術館のゲストだ」

ゲスト…ケンイチ？ナイルは小さく呟くと、黙り込んでしまった。ケンイチはナイルが何か考え込んでいると見て取る、どうした？と問いたいが、相手が相手だ、やはり気軽ではない。

ナイルには彼なりに想う処があった。数年前、管理人と戦ったこの丘で…

その最後に不思議な体験した、幻影の中に自分がいた。そこで会話した少年の一人が、確かケンイチだった。

10歳前後だったあの少年が目の前にいる青年だろうか、とナイルは当惑していた。ひと回りは変わらない若さだが時間の経過はまるで合わない。更にとある事実にも考えが及ぶ。

F端末（管理人等がいう、ワンダフル・ナイルカードだ）のボイスエンコーダは、あの会話を克明に記録していた。それで体験が幻想でなかった、と後日ナイルが知ったのだが、そこに不思議な点があった。時間の経過がまるで符合しなかったのだ。

約10分間の音声記録は、高周波に変調後、256ビット長で圧縮、記録されていた。記録日時を検証すると、データはマイナス4億7千3百万秒、6百秒間の記録。つまり約十数年前に10分間記録されたデータであると、F端末は語っていたのである。何度検証しても、だ。

当時、ナイルの科学陣はそれに興味津々だった。当のナイルはこ愛嬌だと独り首を傾げるばかりで、敢えて追及をせず、また追及を

させなかった…事だ。

「ゲストと言ったな？」

「…うん」

頷いた後で「多分そうだった」と言い添え、まるで自信のないケンイチを、何だ？と疑問に眺めるナイルだったが彼は構わず、探るよ
うに。

「どんな体験をした？」

「体験？」

「この丘はどんな所だ？この住民達はどんな連中だ、変わった点
はあるのか？」

きつと実験の事を聞いているのだ、とケンイチは思い夜空を見て
いた。

警戒して何も語るまいかと思う、だが（そうだった、ナイルは自称
2番目の管理人だったナ）とも気付く。

隠し事はするまい、だからと言って誇張して語るものもない、え
ーと、どう表現しよう。

「変わってるといえば変わってた、そうだなあ」と呟き、しみじみ
とケンイチ。

「…透明だった、かな」

この曖昧な表現はナイルは怒らせたかもしれない、とケンイチは言った端から肝を冷やし、ちらりとナイルを伺うのだが。

ナイルは、その言葉を待っていたかのような、穏やかな顔をしていた。

「水晶の組成、か」

「え？」

今度はケンイチが、眉を寄せる。

ケンイチに答える代わりに、ナイルは「もう、朝が来る」

恐るべき男、ナイルは。遠く遙かな山々の暗い稜線を眺め、不思議な笑顔を浮かべていたのである。

その時、暗く輝く星空から、白み始めた地平に向かって無数の流れ星が空を疾^{はじ}つていった。

この時期に見られるオリオン座流星群だった。

ナイルは軽く目を細めただけ、だがケンイチのその視認は、遙^{はるか}に違っていた。

ケンイチに見える流星達は、皆、遠近感と質感を伴っていた、何かを発していた、声だろうか、呼ぶ声、だ。

ふいに腰の辺りで子供の声が出た、初めて聞く子供の声、誰だろ

う。

「第六感は、子供の頃みんな持ってたよ？」

ケンイチにしか気付きようのない幻が、彼とナイルの横をすり抜けて、丘を走っていた。

子供達だ、A男、B子、西野陽子：みんながいる、食堂の女主人も中村弁護士夫妻も、皆子供の姿で走っていて、幼い姿の管理人がケンイチに、ニカツと笑って走る先を指差した。すぐに無数の子供達が續けて現れ、聞こえないが上げている筈の歓声と共に走り行き、そして大きな群生が、それを追って今度は走り抜けていった。

驚くべきそれは、鯨や象や猛獣や、野生生物の群生？それどころか更に、無機有機を問わない大きな川が大河の濁流となって、歓声は轟音となってすり抜けていく。

第六感はその姿を見せていた。それは：憧れだった。

星々が空間を巡る、その痕跡を記録としてそこに残す。多くの悲劇や、数え切れないの悲しみや、痛みまでもそこに刻まれるが、遙に膨大にそれを圧倒するものがある、それを人は、愛や、希望、夢だと表現する、別名はあれども。

それが変化する期待に満ちた、次へのエネルギーの流れだった。

息を呑むケンイチは、実にこの時大地の自転すら感じ、その大きな力を体感していた。もちろん、それはナイルに伺い知れるものではなく、だ。

ナイルは、ケンイチを一度見て、空に感じ入る姿を不思議そうに眺めたが、彼に干渉するつもりはない。程なく彼は、芝を汚したタバコの吸殻を拾い片付けて始めていた。

「そろそろ、私は戻るかな…」とは、別離の空気である。

ケンイチは、ふいに寂しくなって「コーヒーでもどうだ、インスタントだけど。管理人室で休んで行けよ?」

強がっていても、オドオドしていたぞお前は?と、くすりと笑つてのナイルだった。

彼は戦闘機のボディをコツコツ叩いて「夜明けのコーヒーはどこかのダイナーで。コイツを降下させていただくでしょう!」

それがケンイチが出会った、ナイルという男の最後のセリフだった。

こんな物が駐車場に降りてきたらどうすんだ?と、ケンイチが痛快に感じ見守る中で、このようにしてナイルが操る戦闘機は、丘を去っていったのだ。

暫く上空に留とどまっていた戦闘機だった。それは夜空の中でゆっくりと滞空旋回をして星のように煌めくと、ひと時に消えていったのである。

数時間後、3号爺が朝の訪問にやって来る。

出迎えたケンイチだった。

「お？早いなケンイチ、早起きは3文の得と言っんぢゃ、偉くなっ
たな」

笑わせる3号爺だ。

3号爺が丘の敷地に入ると入れ違いに、ケンイチは山道に出る。

「出掛けるのか、こんなに朝早く」

「うん、あいな」

右手を上げるケンイチは軍手を嵌めている。勘の鋭い3号爺はそこ
に気づき、首を傾げるがそれ以上は窺うかがい知れない。

「管理人がぶつ倒れた。多分公団の施設で入院、だろうと思う」

「何！何ぢゃと？」

ぴよんぴよん飛び跳ねて驚く3号爺に、ケンイチは舌打ちして齒痒はがゆ
がる。

「大体、アンタの変な自己紹介から、全部始まったんだよな？」

「はあ？朝っぱらから何ぢゃ」

ケンイチは、厄介な男を丘に閉じ込めるように、鉄柵をきつく引き
閉じていた。

「ヨーコさんが今日もやってくるだろう。だから伝えてくれ、出かけるけど、必ず帰って来るってな」

「はあ？ やっぱり、朝っぱらから何ぢや」

相変わらず面白い3号爺の反応に、ケンイチは大きく笑った、そして。

赤毛のケンイチはそれきり美術館から姿を消したのである。

彼はおよそ4週間、此处に滞在した。これはそんな彼の、不思議な物語だった。

(了)

ネオスクリプト・流星群（終話後半）（後書き）

ご愛読をいただきました。ありがとうございます、ぺこり。

数年後：という後日談が1話が残りますが、それはどこか別の場所
でひっそり描こうと思います。

その場所で、続編「パンドラ レディ・ナイル」を描きます。完成
したら、又此処に掲載しようと思います。

この物語は、どこかに投稿してみようと考えています。原稿用紙に
手書きですか、ふうと、
今からため息交じりです、やれやれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8861m/>

水晶の街

2010年10月16日23時51分発行